

大正



ガイドブック

●発行 平成19年3月

●編集・発行 大正区役所
TEL 06-4394-9743

大正区の...

名所
基礎データ
通史
年表

TAISHO
GUIDE
BOOK

「大正区ガイドブック」の編纂にあたって

大正区では、まちづくりの一環として平成 16 年度に史跡パネルを区内公園などに 21 枚設置したのをはじめ、平成 17 年度に区民による座談会を開催し、その内容を「大正区の歴史を語る」として冊子にまとめました。平成 18 年 2 月には座談会の中で判明した事実に基づき「大阪俘虜収容所史跡碑」を平尾亥開公園内に設置しました。また、同 3 月には区内の名所・旧跡などを案内した「大正区ガイドマップ」を作成し、同じく 3 月より始めたレンタサイクル事業とともに区の観光案内などに役立たせています。

平成 18 年度は、区内小学生への語り部役や観光ガイドとして活動していただくため「まち案内人」を養成することとし、そのための「大正区まち講座」を 6 月から 6 回にわたって開催しました。11 月の最終回を実地案内として講座の全過程を修了し、平成 19 年 3 月に講座修了者に「まち案内人認定書」を交付しました。

今後、この「大正区ガイドブック」によって、まち案内人が活動の幅を広げ、大正区民のみならず、大正区を訪れる方が大正区への理解を一層深め、大正区への愛着を高め、ひいては大正区の新しいまちづくりの一助になればと思っています。

なお、このガイドブックは平成 18 年 6 月から月 1 回の頻度で開催した「大正区まち講座」の資料を、「まち案内人」が通常使われる資料をベースに、実地案内資料と大正区の基礎データや通史および年表などに再構成したものです。

平成 19 年 3 月
大正区長 西村東一

目 次

I. 大正区の名所(60ヶ所)	· · · · ·	P.	1	~	60
II. 大正区の基礎データ	· · · · ·	P.	61	~	72
III. 大正区の歴史概要	· · · · ·	P.	73	~	81
IV. 大正区の年表	· · · · ·	P.	82	~	89
V. 参考資料	· · · · ·	P.	90	~	103

I. 大正区の名所(60ヶ所)

番号	項目	場所	ヘ - ジ
1	大正橋の碑と第九の旋律[大正橋北西橋詰]	三軒家東1丁目地先	1
2	両川口津波の碑[大正橋北東橋詰](浪速区側)	三軒家東1丁目地先	2
3	「木津川口遠見番所跡」パネル[大正橋公園内]	三軒家東1-1	3
4	勘助島渡しの碑[大浪橋北西橋詰]	三軒家東1-12	4
5	「難波島」パネル	三軒家東2-11	5
6	三軒家(近代紡績工業発祥の地)パネル[三軒家公園内]	三軒家東2-12	6
7	八坂神社(上)と中村勘助の碑	三軒家東2-7	7
8	難波島渡船場跡	三軒家東3-3	8
9	木津川水門	三軒家東3-6	9
10	船囲い場跡	三軒家東3-11	10
11	地蔵院	三軒家東4-5	11
12	了照寺	三軒家東4-15	12
13	大阪紡績の米倉	三軒家東5-9	13
14	八阪神社(下)	三軒家東6-14	14
15	尻無川南岸直通路開通記念の碑[JR高架下壁面]	三軒家西1-6	15
16	「御船藏跡」パネル[岩崎橋公園内]	三軒家西1-7	16
17	泉尾神社	泉尾2-17	17
18	「尻無川」パネル[泉尾2公園内]	泉尾2-25	18
19	「泉尾新田」パネル[泉尾公園内]	泉尾4-21	19
20	皓養社	泉尾6-1	20
21	尻無川水門と尻無川水門工事殉職者の碑	泉尾7-5	21
22	甚兵衛渡船場	泉尾7-13	22
23	尻無川櫓(はぜ)堤跡[泉尾浜公園内]	泉尾7-17	23
24	大正区壁画[千島ガーデンモール内]	千島1-23	24
25	落合上渡船場	千島1-29	25
26	三軒家水門	千島1-29	26
27	栗本鐵工発祥の地の碑[泉尾東公園内]	千島1-29	27
28	「昭和山」パネル[昭和山頂上]	千島2-7	28
29	大正運河跡	千島2-7	29
30	「江戸時代の大正区の風景」パネル[噴水広場]	千島3	30

番号	項目	場所	ヘーツ
31	大正区立体地図	千島 3	31
32	大阪沖縄会館・関西沖縄文庫	千島 3-19・小林東 3-13	32
33	「北恩加島」パネル[北村公園内]	北村 2-16	33
34	大正内港展望台と大正ギャラリー	北村 3	34
35	マリンテニスパーク・北村	北村 3-3	35
36	万葉の碑[済生会泉尾病院前]	北村 3-5	36
37	落合下渡船場	小林東 1-1	37
38	千島せせらぎの里[千島下水処理場内]	小林東 2-5	38
39	「小林」パネル[小林公園内]	小林東 2-6	39
40	材木橋親柱、嘉平次橋親柱[大正中央中学校内]	小林東 3-23	40
41	産土神社	小林西 1-7	41
42	大阪俘虜収容所碑[平尾亥開公園内]	平尾 1-11	42
43	「平尾」パネル[平尾公園内]	平尾 2-22	43
44	千本松大橋と千本松渡船場	南恩加島 1-11	44
45	「南恩加島」パネル[南恩加島公園内]	南恩加島 1-13	45
46	天満宮[南恩加島公園内]	南恩加島 1-13	46
47	十六地蔵[南恩加島小学校内]	南恩加島 3-6	47
48	ゼネラルモータースの跡	鶴町 1-16	48
49	「鶴町」パネル[鶴町中央公園内]	鶴町 2-7	49
50	神明神社	鶴町 2-7	50
51	鶴浜沖埋立地	鶴町 2・3 丁目	51
52	なみはや大橋	鶴町 3	52
53	千歳橋の碑[千歳橋南詰]	鶴町 4-1	53
54	千歳橋渡船場	鶴町 4-1	54
55	千歳橋	鶴町 4-1	55
56	木津川飛行場跡の碑[新木津川大橋北詰]	船町 1	56
57	中山製鋼所	船町 1-1	57
58	新木津川大橋と木津川渡船場	船町 1-1, 2-1	58
59	船町渡船場	船町 1-3	59
60	元水上飛行機格納庫跡	船町 2	60

II. 大正区の基礎データ

1. 大正区の概要		P. 61
① 概要	② 大正区の花	
2. 大正区の概況		P. 62
① 大正区の地勢	② 大正区の河川	~ 64
③ 大正区の運河	④ 大正区の橋	
⑤ 大正内港	⑥ 大正区の主な道路	
⑦ 大正区の公園	⑧ 大正区の防災	
⑨ 大正区の防犯・防火		
⑩ 大正区の土地利用状況		
3. 大正区の環境整備		
① 区画整理事業	② 住宅地区改良事業	P. 65
③ 千島計画	④ 北村計画	~ 66
4. 人口・交通体系		P. 66
① 大正区の人口	② 大正区の交通	~ 67
5. 大正区の産業		P. 67
① 大正区の産業大分類別事業所・従業者数		~ 69
② 大正区の工業	③ 大正区の商業	
6. 教育		P. 70
① 高等学校	② 中学校	③ 小学校
④ 幼稚園	⑤ 保育所等	
7. 医療・福祉等		P. 70
① 大正区の医療機関	② 大正区の福祉施設	~ 71
③ 大正区の地域施設		
8. その他		P. 71
① 大正区の史跡スポット	② 大正区の地名	~ 72
③ 大正区の高層建築物	④ 大正区の映画ロケ地	
区の一日		P. 72

III. 大正区の歴史概要

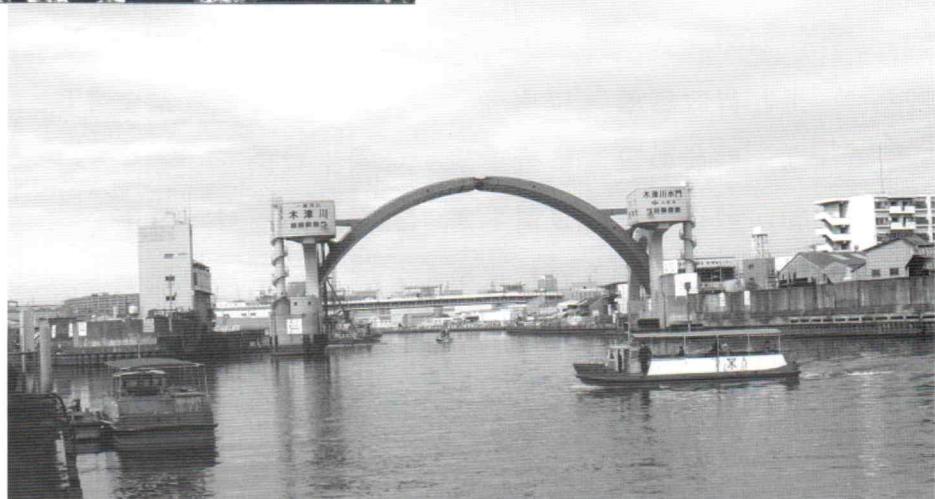
1. 大坂本願寺	P. 73		
2. 豊臣時代	P. 73		
3. 德川時代	P. 74		
① 勘助島	② 木津川	③ 朝鮮通信使	~ 75
④ 河口風景	⑤ 幕末時期	⑥ 安政大地震	
⑦ 新田開発			
4. 明治時代以降	P. 75		
① 行政区画	② 人口と産業の発展	~ 78	
③ 戦前の港湾修築事業	④ 戦災		
⑤ 戦後の港湾整備事業	⑥ 高潮対策事業		
⑦ 土地区画整理事業等	⑧ 小学校の変遷		
参考 「大正区から見た大阪の歴史（～室町時代まで）」			
1. 古代の難波	P. 79		
	~ 80		
2. 平安時代の難波	P. 80		
3. 鎌倉時代と室町時代の難波	P. 81		

IV. 大正区の年表

..... P. 82~89

V. 参考資料

..... P. 90~103



renta-
cycle renta-
cycle renta-
cycle renta-
cycle renta-
cycle renta-
cycle

☆レンタサイクルで快適・爽快 大正めぐり☆

大正区コミュニティ協会では、自転車のレンタルをしています♪

平成18年
3月から

料金は、1日300円！

---別途保証金700円をいただきますが、自転車返却時にお返しします---

「サイクリングコース」はもちろん...
健脚でお時間のある方は、全コースをこのレンタサイクルでめぐってみてはいかがですか？

●申込み…コミュニティ協会【コミュニティセンター2階（大正区役所前下車すぐ）】へ電話か、直接来館により申込みをしてください。

所在地：大正区千島2-6-15 電話：6553-5511

●利用時間…9:30～17:00 ※月曜日及び年末年始等は休業



大正区コミュニティマップ

緑いきいき 街いきいき
育てよう大正区の花 つつじ

大正区の位置



大正区の広域避難場所は
千島公園一帯です



避難所

避難施設	電話番号
三軒家西小学校	6551-0022
三軒家東小学校	6551-4508
泉尾東小学校	6551-0081
泉尾北小学校	6551-0028
中泉尾小学校	6551-0068
北恩加島小学校	6551-0020
小林小学校	6553-0010
平尾小学校	6551-3294
南恩加島小学校	6551-0047
鶴浜小学校	6551-0023
大正東中学校	6551-1956
大正中央中学校	6554-0630
大正西中学校	6552-6565
泉尾高等学校	6552-0294
泉尾工業高等学校	6552-0026
大正高等学校	6552-2221
大正中学校	6554-3100



55

千島橋通し

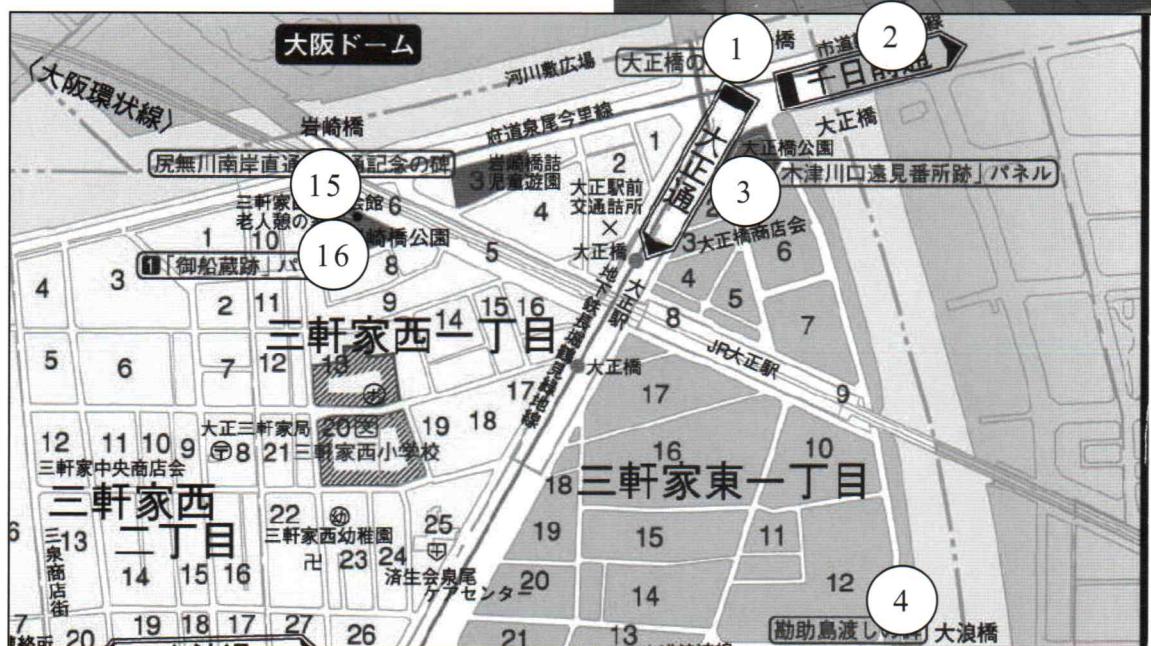
千島橋通

1	大正橋の碑と第九の旋律[大正橋北西橋詰]	三軒家東1丁目地先
---	----------------------	-----------

大正橋は、大正4年8月に市電の開通とともに架けられたアーチ橋。長さ90.62m、幅22.15mで橋の運行を妨げないよう橋脚を持たない橋として設計された。

市電の廃止後の昭和44年4月に、交通混雑緩和のために広い橋が必要となったことから架け替え工事が開始され昭和49年3月に新大正橋(長さ79.96m、幅44m)が完成した。架け替え工事は、下流側に橋を架け、古い橋を取り去った後に次の橋を架ける手法で、2つの橋を合わせて現在の大正橋となっている。

この橋の欄干を五線譜に見立てて、ベートーベン作曲の第九の譜面が、また歩道にはメトロノームの堰堤、路面にはピアノの鍵盤がデザインされています。



大地震両川口津波記

嘉永七年(1854年)六月十四日午前零時ごろに大きな地震が発生した。大阪の町の人々は驚き、川のほとりにたたずみ、余震を恐れながら四、五日の間、不安な夜を明かした。この地震で三重や奈良では死者が数多く出た。

同年十一月四日午前八時ごろ、大地震が発生した。以前から恐れていたので、空き地に小屋を建て、年寄りや子供が多く避難していた。

地震が発生しても水の上なら安心だと小舟に乗って避難している人もいたところへ、翌日の五日午後四時ごろ、再び大地震が起こり、人々は崩れ落ち、火災が発生し、その恐ろしい様子がおさまった日暮れごろ、雷のような音とともに一斉に津波が押し寄せてきた。

安治川はもちろん、木津川の河口まで山のような大波が立ち、東堀まで1.4mの深さの泥水が流れ込んだ。

両川筋に停泊していた多くの大小の船の碇やとも綱は切れ、川の流れは逆流し、安治川橋、亀井橋、高橋、水分橋、黒金橋、日吉橋、汐見橋、幸橋、住吉橋、金屋橋などの橋は全て崩れて落ちてしまった。さらに、大きな道にまで溢れた水に慌てふためいて逃げ惑い、川に落ちた人もあった。

道頓堀川に架かる大黒橋では、大きな船が川の逆流により横転し川をせき止めたため、河口から押し流されてきた船を下敷きにして、その上に乗り上げてしまった。

大黒橋から西の道頓堀川、松ヶ鼻までの木津川の、南北を貫く川筋は、一面あつという間に壊れた船の山ができ、川岸に作った小屋はながれてきた船によって壊され、その音や助けを求める人々の声が付近一帯に広がり、救助することもできず、多数の人々が犠牲となつた。また、船場や島ノ内まで津波が押し寄せてくると心配した人々が上町方面へ慌てて避難した。

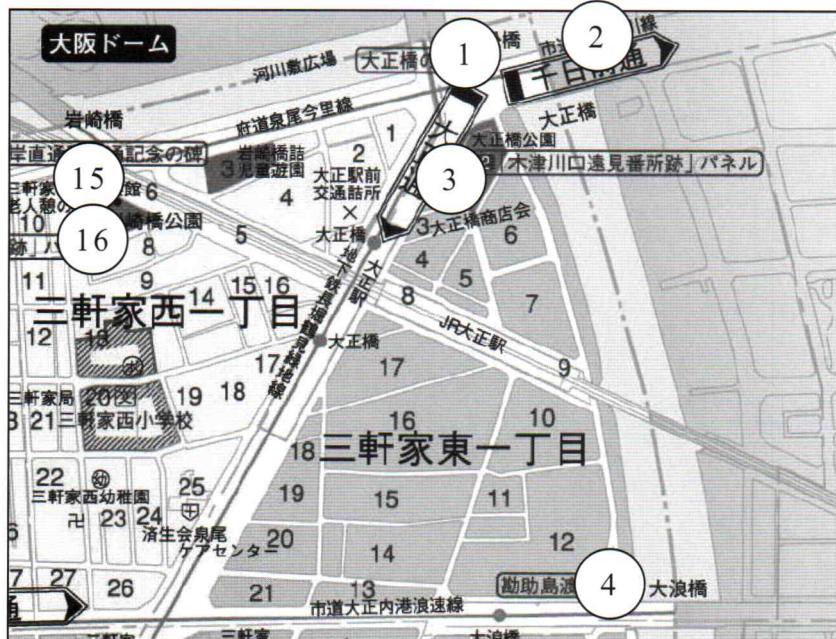
その昔、宝永四年(1707年)十月四日の大地震の時も、小舟に乗って避難したため津波で水死した人も多かったと聞いている。長い年月が過ぎ、これを伝え聞く人はほとんどいなかつたため、今まで同じように多くの人々が犠牲となってしまった。

今後もこのようなことが起り得るので、地震が発生したら津波が起こることを十分に心得ておき、船での避難は絶対にしてはいけない。また、建物は壊れ、火事になることもある。お金や大事な書類などは大切に保管し、なによりも「火の用心」が肝心である。川につないでいる船は、流れの穏やかなところをえらんでつなぎ替え、早めに陸の高いところに運び、津波に備えるべきである。

津波というのは沖から波が来るというだけでなく、海辺近くの海底などから吹き上がってくることもあり、海辺の田畠にも泥水が吹き上がることもある。今回の地震で羽曳野の古市では、池の水があふれ出し、家を数多く押し流したのも、これに似た現象なので、海辺や大きな川のそばに住む人は用心が肝要である。

津波の勢いは、普通の高潮とは違うということを、今回被災した人々はよくわかっているが、十分心得ておきなさい。犠牲になられた方々のご冥福を祈り、つたない文章であるがここに記録しておくので、心ある人は時々碑文が読みやすいよう墨を入れ、伝えていってほしい。

安政二年(1855)七月建立

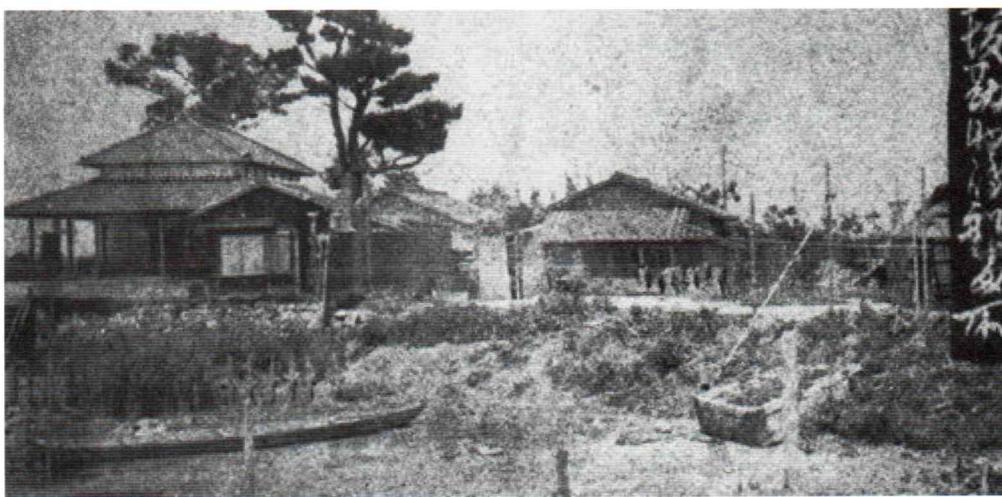


木津川は大坂の経済を支える大動脈として諸国の船の出入りで賑わいました。当地は、昔、「姫島」と呼ばれておりましたが、義民として名高い中村(木津)勘助が、慶長 15 年(1610 年)に豊臣家のために軍船係船所の建設や船着場の整備等を行い、その功により「勘助島」と名付けられました。

江戸時代になって、幕府は宝永 5 年(1708 年)に「木津川口遠見番所」を現在地に設けました。また、西方には幕府の官船等を収容する「御船蔵」(岩崎橋公園附近)がありました。

大阪の島と言われた当地と都心をつなぐルートとして、大正 4 年(1915 年)市電開通とともに架けられた大正橋は、当時わが国最長のアーチ橋で、当区名の由来ともなっています。新橋が昭和 49 年に完成、下流側の高欄には、ベートーベンの交響曲第 9 番「歓喜の歌」の楽譜がデザインされています。

なお橋の東側にある「安政津波遭難者供養碑」は、安政元年(1854 年)に木津川一帯を襲った安政の大津波の惨状を述べるとともに、最後に「後人の心得・・・願わくば心あらん人、年々文字読み安きよう墨を入れ給うべし」と記しており、大阪人の心情を表しています。



『大正区ホームページ』から転載

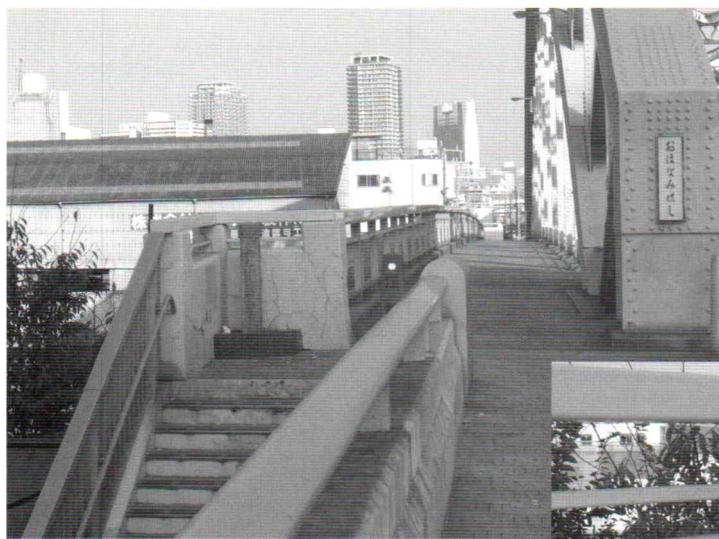


4

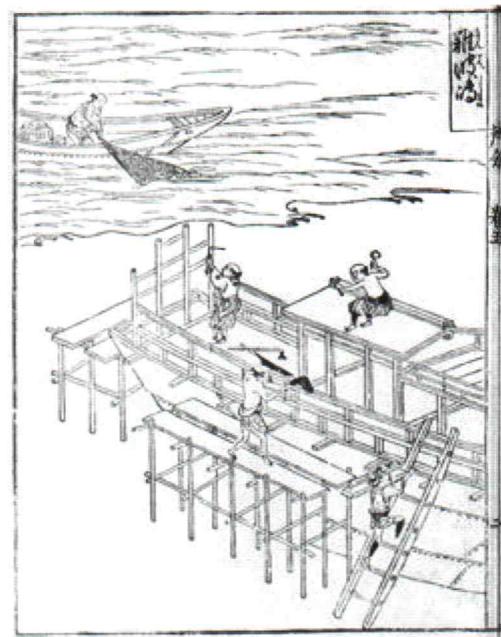
勘助島渡しの碑[大浪橋北西橋詰]

三軒家東 1-12

難波村（浪速区）と勘助島を結ぶ渡しは、文化3年（1806年）刊行の地図にも見える。



江戸初期の名所案内書である「芦分船(あしきわけぶね)」によれば、「(難波島は)難波につづきたる所也。昔日難波の住人ひらきし所なれば此島の名とするにや」とあり、挿絵として船造りの風景を載せています。その後、元禄 12 年(1699 年)に木津川の流路を一直線にするため河村瑞賢(かわむらずいけん)により島の中央部が開削され難波島は東西に分れ、東側を「月正島(がっしょうじま)」(浪速区)と呼び、西側を「難波島(なんばじま)」と言うようになりました。「摂津名所図会大成(せつつのめいしょずえたいせい)」には「此地船大工職多く常に海舶を作事す」とあります。木津川交通の要衝として発展し、当地にはかが加賀(現石川県)国等の船宿が見られ、北前船(きたまえぶね)が着船し、二十石積の上荷船(うわにぶね)が 86 艘あったとされます。



『大正区ホームページ』から転載

難波島の西側の三軒家川は一部埋め立てられ、百済橋(くだらばし)は廃橋になりましたが、橋の一部は隣に残されています。大正中期には造船所 15 社が集中し、現在も工場群となっています。島の南端には「木津川防潮水門」と「三軒家水門」があり、防災拠点となっています。



6	三軒家(近代紡績工業発祥の地)パネル [三軒家公園内]	三軒家東 2-12
---	--------------------------------	-----------

■三軒家(さんげんや)

延宝3年(1675年)に出された、大坂の名所案内書である「芦分船(あしきわけぶね)」によると家数の少なさから「三軒屋」と名付けられた当地も「次第に人家が満々(みちみち)、軒をならべ繁栄して、旅泊の船出入繁(しげ)く」としており、「芦分船」が発行される少し前の明暦3年(1657年)には当地での「川口遊里」が禁止されるまでになっています。

貞享元年(1684年)に天満組替地(てんまぐみかえち)となり、当地の一部は大坂三郷(さんごう)に入りました。幕府の「木津川口遠見番所(きづかわぐちとおみばんしょ)」や「御船蔵(おふなぐら)」が置かれ、摂津名所図会(せつつめいしょずえ)にも「千石・二千石の大船、水上に町小路を作りたる如く舳先(へさき)には船の名、家々の紋付けて其国をしらせ、風威の順不同・潮時の満干を考えて出帆あり着船あり」とし、薩摩(さつま)(現鹿児島県)・日向(ひゅうが)(現宮崎県)船の着船の記録も見えます。北国航路の和船係留地であった木津川には和船が1000艘以上にもなったので、明治14年(1881年)には三軒家川を開削、「船囲い場(ふながこいば)(178,000m²)」を現在の三軒家東3丁目に開設しました。その名残りが今もあります。

(江戸時代には「三軒家」は「三軒屋」と表記されることが多かった。)

■近代紡績発祥の地(大阪紡績)

明治16年7月に、東京・大阪の実業財界人渋沢栄一(しぶさわえいいち)や藤田伝三郎(ふじたでんざぶろう)らが出資した大阪紡績会社(通称:三軒家紡績)が、当地「三軒家村」で操業を始めました。この大阪紡績会社は大正区の近代工業を飛躍的に発展させ、大阪の紡績業を日本一に押し上げる原動力となりました。

三軒家村は古くから船着場としてにぎわい、石炭や原料の綿花の搬入や製品の運搬に便利なため選ばれたといわれています。

操業間もなく夜業を始めましたが、明治19年に発電機を購入し、初めてあかあかと電灯がともり工場全体が不夜城のように浮かびあがり、各地から電灯の見学者が殺到しました。工場はまたたく間に拡大発展し、業界に傑出した地歩を確立しました。

明治20年代には、当地を中心に数多くの紡績、繊維会社ができ、日清戦争から日露戦争時代にかけて大阪は「東洋のマン彻スター」と呼ばれるにふさわしい発展をとげました。

その後、大正3年、昭和6年に他社と合併して世界最大の紡績会社に発展しましたが、戦争激化とともに軍需工場に転換させられ、昭和20年3月の大空襲で焼失しました。



『大正区ホームページ』から転載



上の宮八坂神社 鎮座地：三軒家 2-7-18

上八坂神社といわれている。正保4年(1647)9月、三軒家の開発者「中村勘助(木津勘助)」が京都祇園の八坂神社の分霊を勧請い、素戔鳴尊を祭ったのが、起源であるという。社殿は三軒家東2丁目のほぼ中央にあたる丸島に建てられたが、宝永4年の大津波で水害を被ったため、正徳年間(1711~16)に富が岡と呼ばれる景勝の丘上に移った。これが現在の社地である。

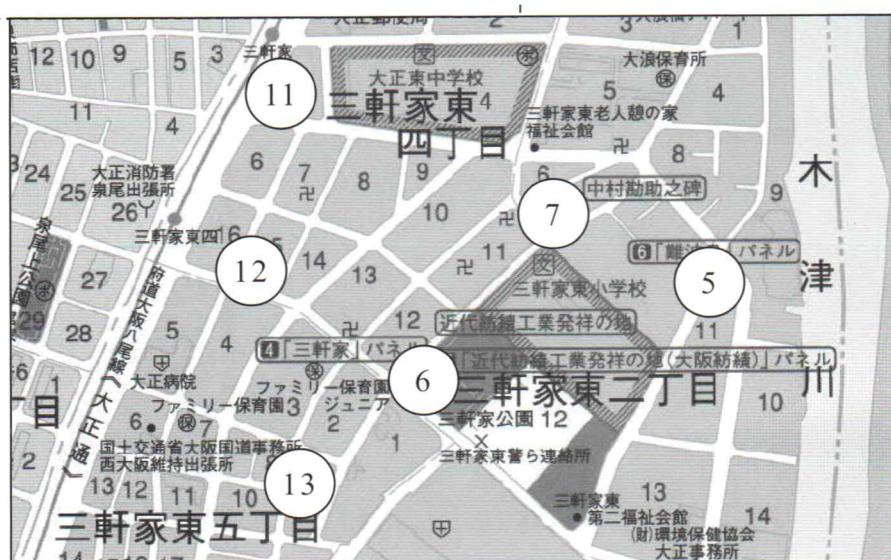
大正8年に「中村勘助彰徳会」を興し、境内に彰徳碑を建立した。昭和20年3月に戦災により社殿は焼失したが、その後昭和32年5月に再建され、平成8年11月御鎮座350年祭が盛大に斎行された。

中村勘助の碑

中村勘助源義久彰徳碑が八坂神社の社殿の傍らにあり、背面の刻文は、空襲で傷つけられたため全文の判読は困難だが、三軒家東小学校百周年記念誌に掲載されている碑文全文は次のとおりである。

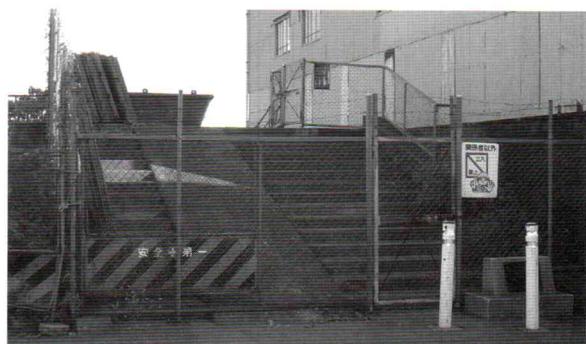
中村勘助、姓は源、諱は義久、新田義貞の末流にして資性剛直沈勇なり、其の木津村に住むの故を以て、時人之を木津勘助と呼ぶ。豊臣家撰海の要害を完備する為、姫島即ち今の三軒家北岸に軍船碇繫所を建設するに方り、勘助船舶安全の施設を以て大阪開発の要務なりとし、慶長十五年(1610)沿岸一帯に堤防周築の計を立て自ら奮って其工を起こす。爾来刻苦励精万難を排し、遂に之を完成し、此に倚て内田圃を開き、外風波を防ぎ船舶の碇泊始めて安きを得、豊臣家其の功績を賞し、此の地を勘助島と称せしむ。勘助又大阪市内船楫の便を増進せんと欲し、寛永七年(1630)木津川を浚渫す」と功績を紹介している。その勘助が「寛永十八年(1641)飢饉あり、餓孚道塗に満つ。而も幕府の处置其の宜しきを得ず。勘助憤慨惜く能はず。挺身之が救済を図りし可熱誠の激發するところ其の所為却て規制を逸し、為に罪を獲て斬に処せらる。時に万治三年(1660)十一月二十二日、年七十有五。惟ふに勘助は独り三軒屋村の開祖たるのみならず、亦大阪における水利の恩人なり。乃ち此に碑を立て其の功を勅し、以て後昆に傳ふ。

山口 真臣 識
清水 南岸 書



[難波島渡しの廃止]

渡しは、橋がかかり、道路整備が進んでマイカーやバイクの利用が増えるに連れて客足が遠のき、時代の波と共に消え去る運命にある。木津川筋の難波島渡しは、昭和 57 年 5 月 31 日限りで、安治川の富島渡しとともに廃止となり、市内の渡しは残り 10 箇所となった。最終便は午後 7 時 27 分、大正区三軒家 3 丁目の渡船場を全長 11 メートルの第 1 住吉丸が 5 人の客を乗せて出発、約 3 分後に対岸の浪速区木津川 2 丁目から 6 人を乗せて引き返し、運行を終えた。最後のこの日の利用者は 64 往復 119 人で、ビデオやカメラを持った地元の人が目立った。『大正区史』より抜粋

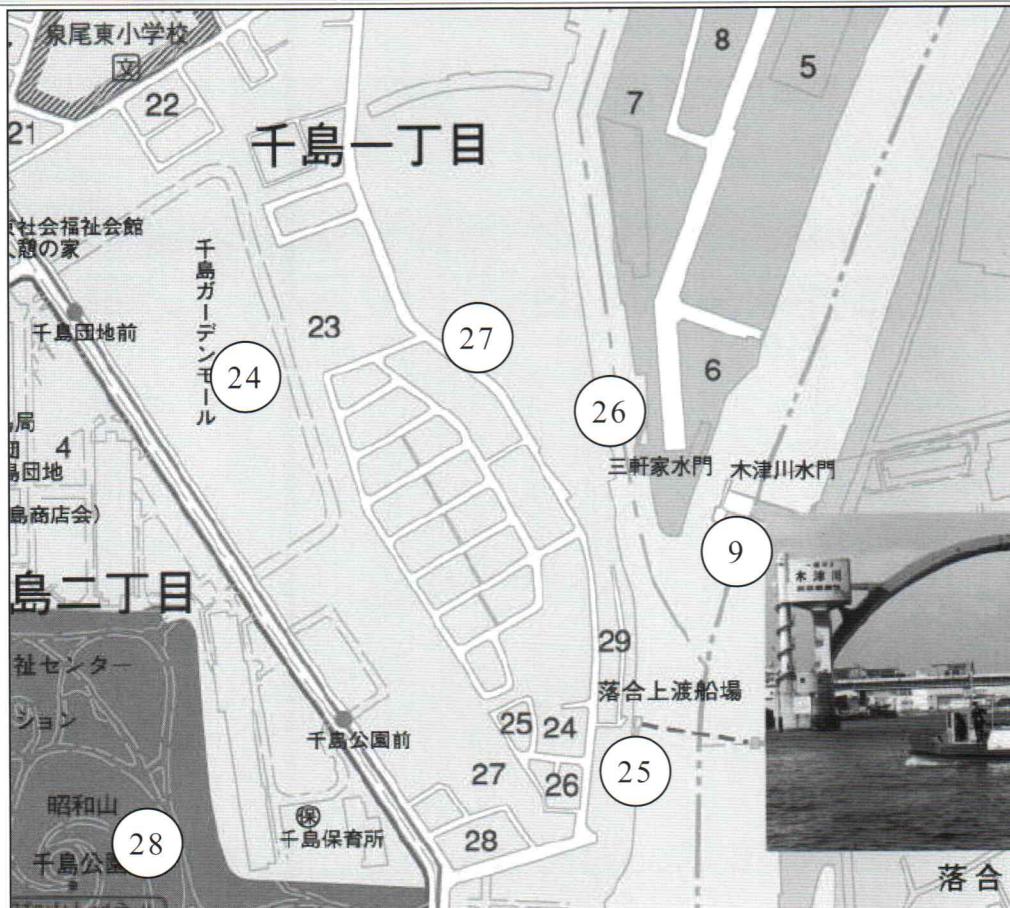


建設中の国道 43 号と難波島渡し
(大阪市建設局ホームページから転載)



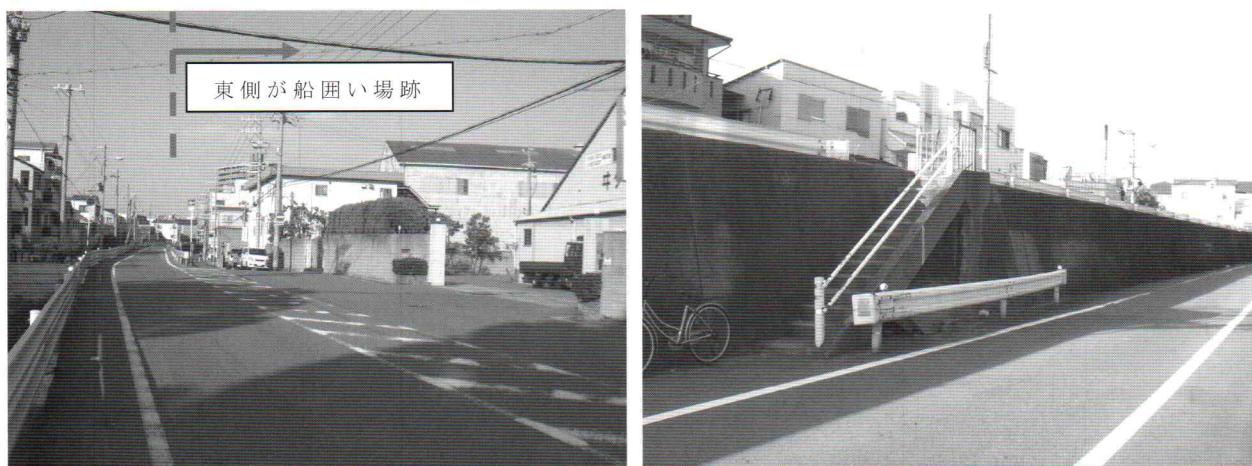
木津川水門は、造船所などがならぶ木津川にあるアーチ型水門です。台風などで押し寄せてくる大阪湾からの高潮をせき止めるはたらきをもっています。

概要(西大阪治水事務所ホームページから)		
所在地	大阪市大正区三軒家東 3 丁目 6-7	
	主水門	副水門
	アーチ型ゲート	スイングゲート
径間	57m	15m
有効幅員	55.4m	
敷居高さ	OP-4.5m	OP-4.0m
閉鎖時の天端高さ	OP+7.4m	
扉体の大きさ	幅 66.7m × 高さ 11.9m	幅 17.1m × 高さ 11.55m
扉体重量	530t	107t
操作時間	50分	
扉体を閉める所要時間	30分	10分
動力	電動機 60kW × 2基 ワイヤー巻取式	電動機 22kW × 2基 油圧式
発電機	ディーゼル式 600馬力	
完成年月日	昭和45年11月	



船囲い場跡

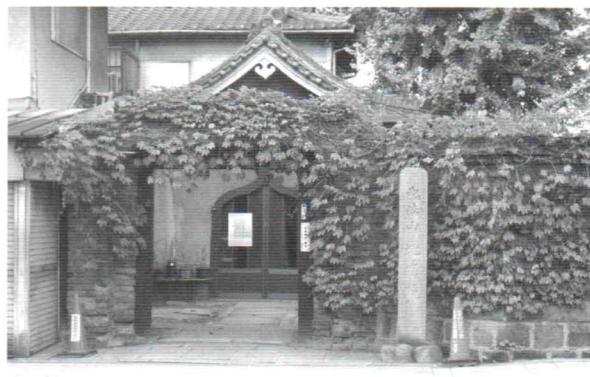
木津川、尻無川、安治川は船虫（カキ）を駆除するのに効果があるといわれ、毎年冬には北国航路の和船が休航、係留する習慣があった。とくに木津川は一千艘以上となり混雑したので、船だまりを造る必要があった。西区西長堀の長尾新兵衛が出願して、明治12年4月から、三軒家と難波島の間の三軒家川を開削する工事にかかったが、コレラの流行や請負業者との紛争で翌13年7月免許取り消しを願い出た。以後大阪府が事業を継承して14年末に完成させた。広さは53,940坪(178,000m²)あり、難波島町、今木、炭屋、千島、中口、上田、三軒家の各地が開削されたが、明治41年以降は港湾整備が進んで利用が減り、後には貯木池に利用された。



地蔵院 所在地：三軒家東 4-5-9

山号を弘法山と号し真言宗高野派南坊法案寺の坊末にして地蔵菩薩を本尊とし、摂津之国第31番霊場である。元禄元年(1688)「快圓」の開創で、寺はもと東成郡住吉村字大領にあったが、高野鉄道(今の南海鉄道高野線)建設の際立ち退きとなり、明治34年4月現在地に移転し、境内は400坪あまりを有していたが戦災に全焼し、後の区画整理で現在は160坪に縮小された。

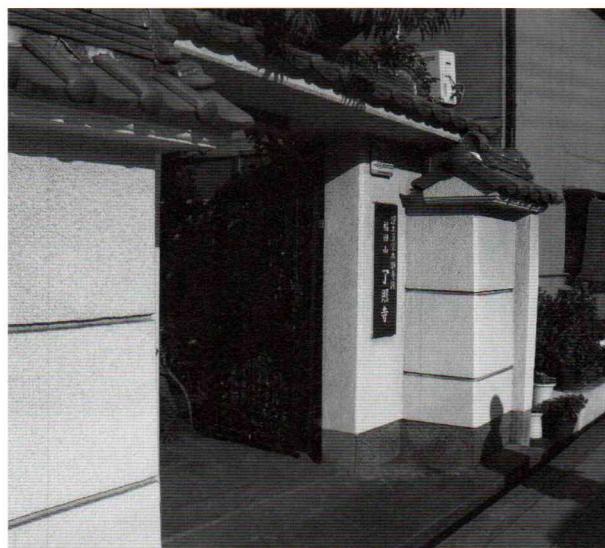
開祖の「快圓」は、厳格な人柄で多くの門人を育てたが、中でも江戸時代の国学者「契沖」の師で高野山修業時代に大きな影響を与えたと記録されている。境内には「快圓」の墓と大阪紡績大火の際の犠牲者の合同慰靈碑がある。また昭和に入り院内に幼稚園を設け子どもたちの健康と育成に尽力し戦後に閉園となつたが、飾り井戸が当時のおもかげを今に伝えている。



了照寺 所在地：三軒家東 4-15-7

元禄 11 年(1698)に泉州大鳥郡踞尾村(現在の堺市津久野町)の住人第四世北村六右衛門宗俊が、三軒家以南の湿地帯を干拓して新田開発に着手し、元禄 15 年(1702)に完成した。その新田は開発者の出身地の和泉国(泉州ともいう)の「泉」と踞尾の「尾」を取って、「泉尾新田」と名づけられた。

開発者の北村六右衛門は仏教の篤い信奉者だったので、新田の完成に際し、開発のために犠牲になった人夫や魚介類の菩提を弔い、庵寺を建立した。宝暦 13 年(1763)その寺名を六右衛門の法名「了貞」と妻の伊和の法名「照貞」から一文字ずつ取って「了照寺」と定めた。昭和 20 年 3 月の大空襲で本堂や庫裡とともに貴重な寺宝の大半を消失したが、元禄時代の本尊の阿弥陀如来像や北村六右衛門夫婦の木像は焼失をまぬがれ本堂に安置されている。



現在は、民家となっていますが、話によると「この建物は、元は大阪紡績会社(現東洋紡績)が建設したもので、今から100年以上前の明治時代に造られた区内に唯一現存する鉄筋造りの建物です。当時、大阪紡績では従業員のための米倉として使用していたと聞いています。現在は1棟だけになりましたが、阪神淡路大震災が起こるまでは、同様の建物が3棟ありました。地震で2棟は使用できなくなり取り壊してしまいました。」とのことです。



八阪神社 所在地：三軒家東 6-14-12

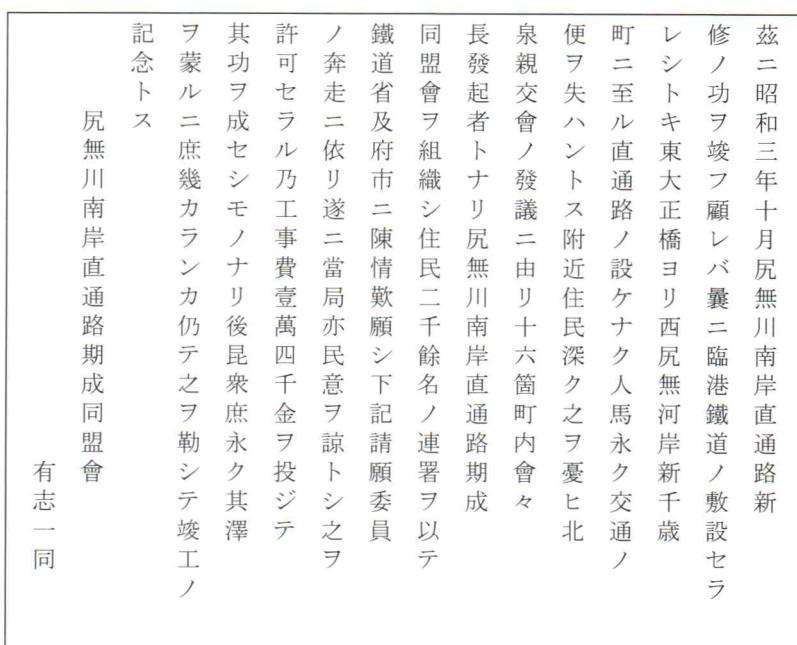
通称下八阪神社といい、寛永 2 年(1625)三軒
家地域の開拓者らが建立、素戔鳴尊
(天照大神の弟)を奉祭したのが起源と伝え
られる。安政 2 年(1855)社殿を改築、境内を拡
張整備した。明治 5 年村社となり、同 40 年か
ら 4 年間に新炭屋の高津宮(祭神仁徳天皇)、平
尾の八坂神社(祭神素戔鳴尊)、千島の天満宮
(祭神菅原道真)、北恩加島の天満宮(祭神菅原
道真)の村社六社を合祀し、同 44 年 5 月、国か
ら幣帛料を受ける神社に指定される。昭和 11
年 5 月社殿を改築したが戦災で焼失、同 21 年
3 月、仮社殿再建 24 年本殿、41 年幣殿と拝殿
が完成した。三軒家の地概況神徳で港町として
栄えた伝承により、同神社では、ささ付宝船を節分の夕方の参拝者に授ける習慣があり、
これをまくらの下に敷いて寝るとよいことがあるといわれている。



直通路の建設費は、大井伊助氏の全額による。



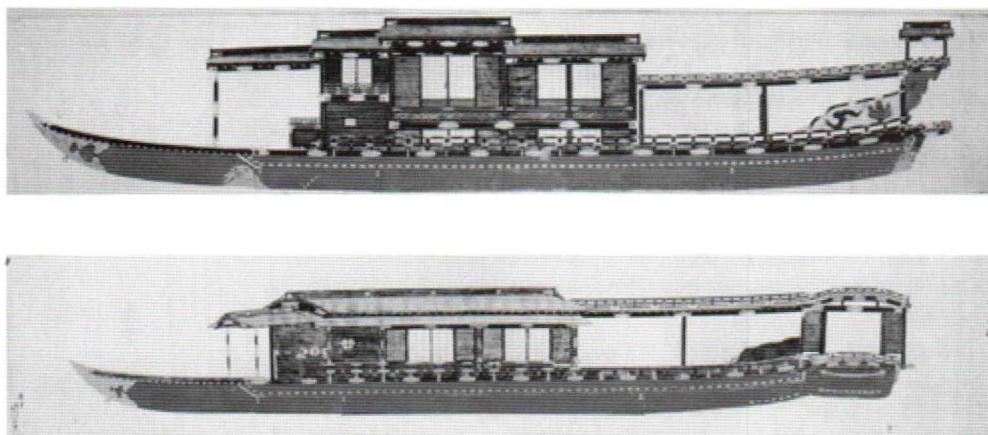
平成 6 年 尻無川南岸道路開通記念碑



三軒家地域は、豊臣時代から開発者の中村（木津）勘助の名前をとって、勘助島と呼ばっていました。江戸時代には「御船蔵」と「木津川口遠見番所」が設けられ、御船蔵は岩崎橋公園附近（現在地）、番所は大正橋公園附近（現在地の東方）にありました。

「御船蔵」は幕府の官船等を納める施設で、文書や地図にも記録されています。当地の御船蔵が蔵した官船名は明らかではありませんが、幕府の「川御座船」には紀伊国丸や土佐丸等の名前が見られ、漆塗りの屋形を持ち、金銅の金具をつけて豪華な装飾を施され、櫓と棹で航行する川船でした。明治23年発行の大坂実測図にも跡地に「字船屋舗」の文字が見えます。大正9年に開削された岩崎運河にも敷地の一部が取り込まれました。

なお、公園北側の環状線の擁壁面には、「昭和3年の道路開通記念碑」が埋め込まれています。



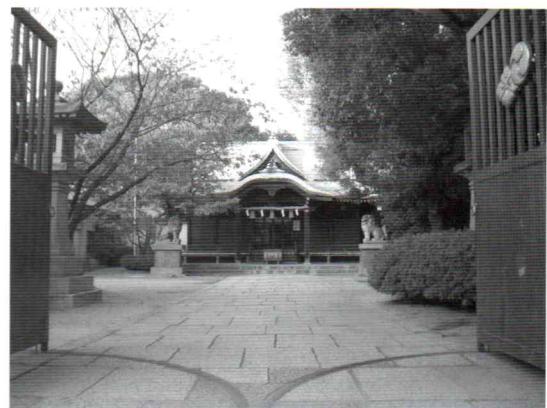
川御座船 (① 壱番御座船 ② 貳番御座船) 長谷川真通氏藏
『大正区ホームページ』から転載



泉尾神社 所在地：泉尾 2-17-8

元禄 11 年泉州踞尾の人北村六右衛門、公許を得て泉尾新田開拓にあたり、事業の成功・土地の繁栄を祈願するため三軒家東の地に産土神社を奉斎したのが創始である。平穏な農村の氏神として崇敬されていたが、明治 41 年村民の願いにより茨住吉神社(現：西区九条 1 丁目 1-17)に合祀された。大正 7・8 年諸産業の興隆に伴い泉尾も住民が激増、氏神信仰を生活の中心とした当時の風習として九条までの参拝は遠距離であり神社側も考究の末、昭和 11 年内務省異例の認承を受け現在地を買収、石垣を築き「飛地境内神社泉尾神社」が創祀され同 17 年壮麗な檜造の社殿が造営されたが戦災のため灰燼と帰した。

昭和 29 年敬神の念篤い氏子住民の奉賛により現在の総檜造りの社殿が造営され、逐次境内外も整備清新な景観を誇る境域に参詣者が絶えない社と発展する。平成 2 年茨住吉神社の寛大な容認により「宗教法人泉尾神社」として設立登記された。創祀以来、再度の変遷を経て 300 年余、泉尾の地の守護氏神として鎮座、氏子住民も泉尾地域の反映を招来せる神明の加護を敬仰、事業経営、土地開拓、寿命、安産、学問、交通安全、価値運の神として崇敬されている。祭神は住吉大神、大國主神、八幡大神である。



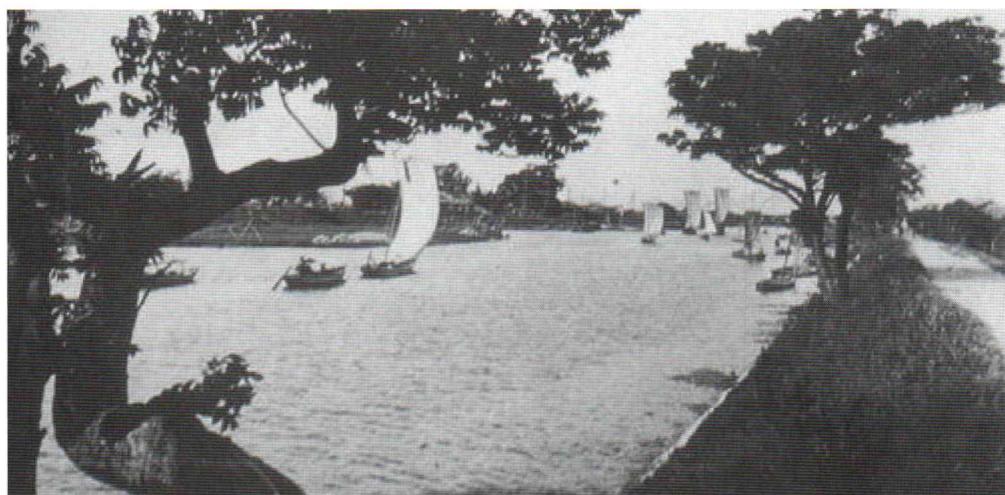
江戸時代、尻無川は今の大阪ドームの場所を通り、西区江之子島まで達していましたが、大坂市中の遊興の地であり、文久3年(1863年)の「浪華の賑ひ」によれば「此堤に黄櫨多く列なれり。紅葉の頃は錦色川水に映じせん望(遠く見渡すこと)又類ひなし。又春やよい弥生の潮干には蛤、蜆を取らんとして来る人おびただ夥し」とあります。

また、摂津名所図会にも鯛つり釣を楽しむ人々の姿が活き活きと描かれている絵があります。

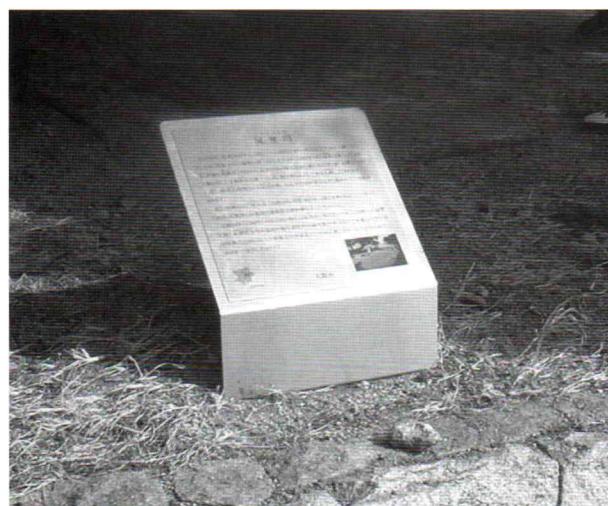
また、尻無川は、「唐人瀉」とも呼ばれ、朝鮮通信使の通る水路ともなっていました。これは、尻無川には幕府の御番所や御船蔵があったためです。

宝暦14年(1764年)の第11回^{*}の際には塩飽島(香川県)の水主3,500人の加勢を得て紀伊国丸等の幕府の船や諸侯の川御座船が黄金張りで華麗な屋形を設け尻無川の河口から上陸地点の北浜までの川筋を遡^{さかのぼ}る姿を、人々は川の両岸に詰めかけ見学したようです。

※ 江戸時代の朝鮮通信使来歴(全12回のうちの11回目、目的:将軍徳川家治襲封祝賀)



『大正区ホームページ』から転載



元禄 15 年(1702 年)に検地を受けた「泉尾新田」は和泉国^{つくの}踞尾村^{きたむら}の北村六右衛門が元禄 11 年(1698 年)に開発に着手し、もとは三軒家浦新田と称していましたが検地を受ける時に、北村氏の出身の国名と村名から一字づつをとり「泉尾新田」と名付けました。二重の堤をめぐらし、沖堤は尻無川と三軒家を結ぶ、高さ 9m の堤防で、現在の尻無川防潮水門から北村公園(一部、今でも堤跡の斜行道路が見られます)の北側を通り、千島バス停を越え、泉尾東小学校の南側を通っていました。中堤は泉尾工業高校の北側を通り泉尾東小学校まで、高さ 5.4m の堤防で、沖堤と中堤の間は水田、中堤の中は畑でした。

面積は、明治初期にはその後の開発も併せて 125 町の大新田となりました。新田内は「井路」と呼ばれる用水路が縦横にはりめぐらされ、かんがいや排水、舟運による運搬路となりました。

宅地は尻無川沿い(北泉尾)と三軒家村西側(南泉尾)の 2ヶ所 45 戸だけで、縹渺^{ひょうびょう}たる農地が広がっていました。作物は棉^{わた}と西瓜^{すいか}が良く獲れました。また、新田の事務を行うために、南泉尾(現在の三軒家東 5 丁目附近)に瓦葺^{かいしょく}の立派な「会所」を置きました。

明治時代になり北村六右衛門が破産処分を受け、負債償却を目的に設立された土地会社の所有になりました。



『大正区ホームページ』から転載



財団法人 皓養社

設立年月日 昭和21年10月11日

目 的 福祉、厚生、感恩報謝の高揚に関する事業の助成ならびにこれが顕現するよう図るのを目的とする。

活動状況 ○大正区内の経済的に恵まれない高校生に奨学金を支給
○大阪府下の母子家庭の高校生に奨学金を支給



なお、皓養社がある建物は、泉尾新田当時の農家建築として区内でも極めて数少ない貴重な建物である。



尻無川水門は、大阪ドームの南側から大正区に流れる尻無川にあるアーチ型水門です。台風などで押し寄せてくる大阪湾からの高潮をせき止めるはたらきをもっています。

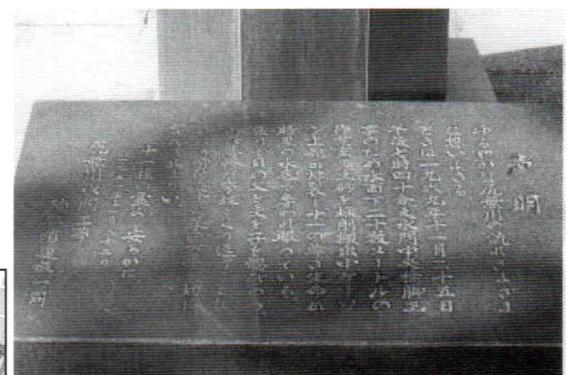


概要（西大阪治水事務所ホームページから）

所在地	大阪市大正区泉尾 7 丁目 5-30	
	主水門 アーチ型ゲート	副水門 スイングゲート
径間 有効幅員	57m 55.4m	15m
敷居高さ 閉鎖時の天端高さ	OP-4.5m OP+7.4m	OP-4.0m
扉体の大きさ	幅 66.7m×高さ 11.9m	幅 17.1m×高さ 11.55m
扉体重量	530 トン	107 トン
操作時間 扉体を閉める所要時間	50 分 30 分	10 分
動力	電動機 60kw×2 基 ワイヤー巻取式	電動機 22kw×2 基 油圧式
発電機	ガスタービン式 600 馬力	
完成年月日	昭和 45 年 11 月	

（尻無川水門工事殉職）

1969年(昭和44)11月25日午後7時40分、尻無川大水門の建設工事において中央ケーンのロックシャフト連結部の取付ボルトが破断し、その結果ケーンが1.8メートルも急激に沈降してその中で掘削作業中の11名の方々の尊い生命が奪われました。現在も、毎年追悼式が開かれています。



甚兵衛渡船場(じんべえとせんじょう)

～大阪市で利用者が一番多い渡船～

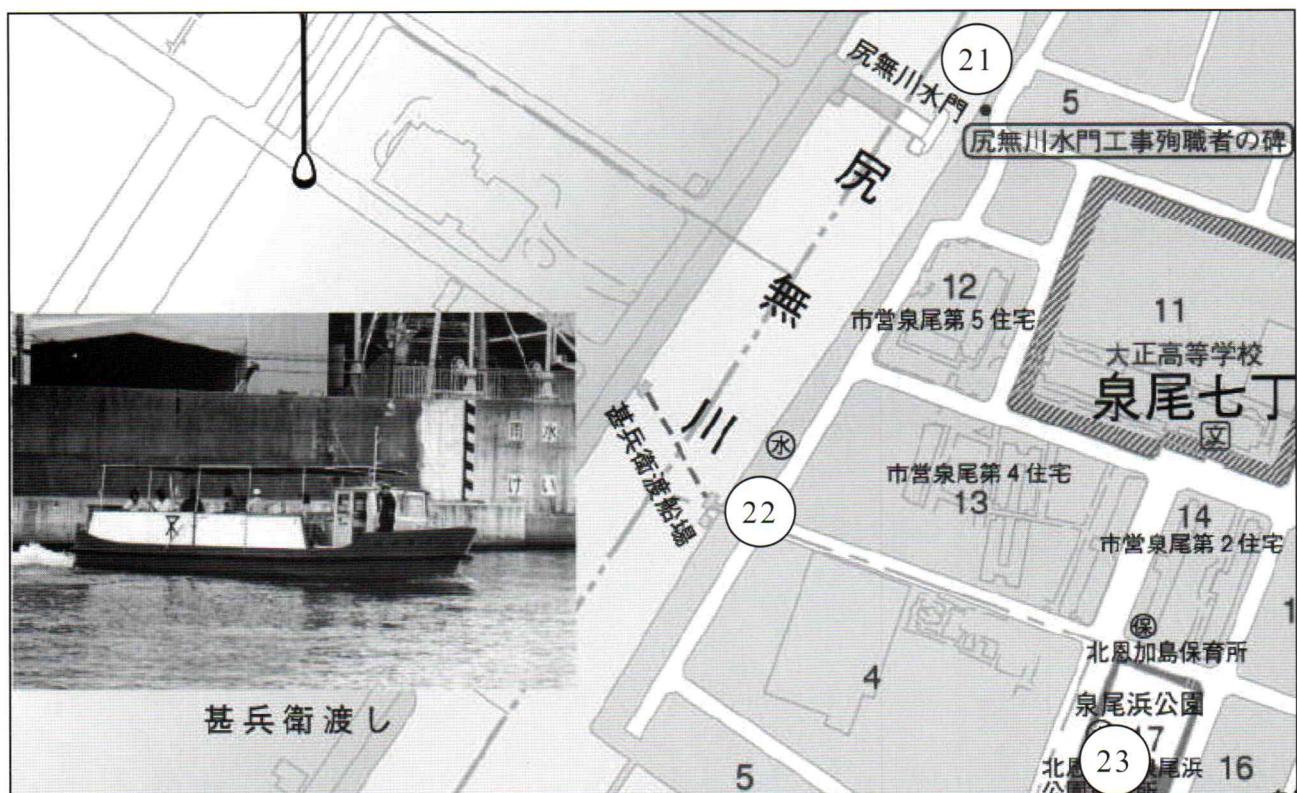
概要

尻無川の堤は昔、紅葉の名所でした。「摂津名所図会大成」に「この河の両堤に黄櫨の木を数千株うえ…紅葉の時節にいたりては川の両岸一円の紅にして川の面に映じて風景斜ならず河下に甚兵衛の小屋とて茶店あり年久しき茅屋にして世に名高し」とあります。この甚兵衛渡しの小屋は「蛤 小屋」と呼ばれて、名物のしじみ、はまぐりを賞味する人が絶えなかったそうです。大正区側の「泉尾」の町名は、元禄 15 年(1702 年)に開発された「泉尾新田」によりますが、その名称は開発者の出身地(和泉国踞尾村)に由来しています。(現堺市津久野町)



『大正区ホームページ』から転載

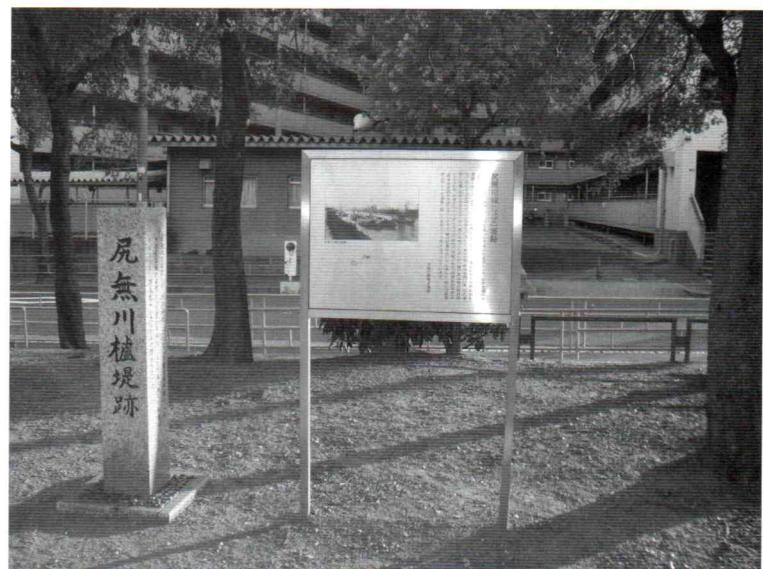
大正区泉尾 7 丁目と港区福崎 1 丁目を結び(岸壁間 94m)、朝のラッシュ時は学生の利用も多く、2 隻の船が運航しています。



もと両岸の堤防に櫛の木を植え、ロウの原料としてその実を取ったもので、晩秋のころは尻無川の櫛として風流を楽しむ見物客でにぎわった。

「摂津名所図会大成」には、河の両堤は数町の間、黄櫛の並樹にして、紅葉の頃は水に映じ“から紅ひに水くくる”と詠じたる龍田の川も及ばざる光景なりと書かれている。泉尾中堀にかかる紅葉橋に、その風情をとどめていたが、これも埋め立てられ廃橋となった。

昔は、川幅十間(18m)足らずで水深も深く、船の航行に不便であったので、大正3年から5年までの3カ年継続工事で改修工事を行い、新櫛橋から下流の川幅を三十六間(65.4m)に広げ川底を浚渫、さらに大正9年12月、岩崎運河を開削して、道頓堀川と直結させた。この工事のとき櫛橋が撤去されて新櫛橋が架けられ、北泉尾の堤防にあった民家は立ち退きとなり、岩崎橋付近の岩崎墓地と、紅葉橋付近の泉尾墓地は阿倍野へ移された。岩崎運河が開削されたあとの尻無川は、船の出入りが増えて一時は木津川を上回った。戦後、河口付近は内港化工事で様相を一変した。



千島ガーデンモール内には、建物の壁を利用して果物などを描いた壁画に加え、昭和 22 年当時の区画整理等が行われる以前の大正区の貴重な航空写真の壁画があります。

これらを設置された千島土地株式会社の渡辺さんにお聞きすると、「平成 13 年 1 月に設置したもので、ガーデンモールに来られるお客さま(区民の方)に何か貢献できるものはないかと色々と考えた結果、建物の壁に心を癒す果物の壁画や昔を懐かしんでもらうといったことから昭和 22 年当時の大正区の航空写真を壁画にしました。」とのお話しでした。



落合上渡船場(おちあいかみとせんじょう)

～木津川水門が真近に見れる渡船～

概要

落合上渡船は、大正区千島 1 丁目と西成区北津守 4 丁目を結んでいます（岩壁間 100m）。

大正区側は旧町名を「新炭屋町」と言い、宝暦 13 年（1763 年）に大坂瓦町居住の炭屋三郎兵衛によって開発された「炭屋新田」のあったところです。明治以降も鉄工所や造船所等の企業が立地するとともに、北方の三軒家方面へ道が延びていました。

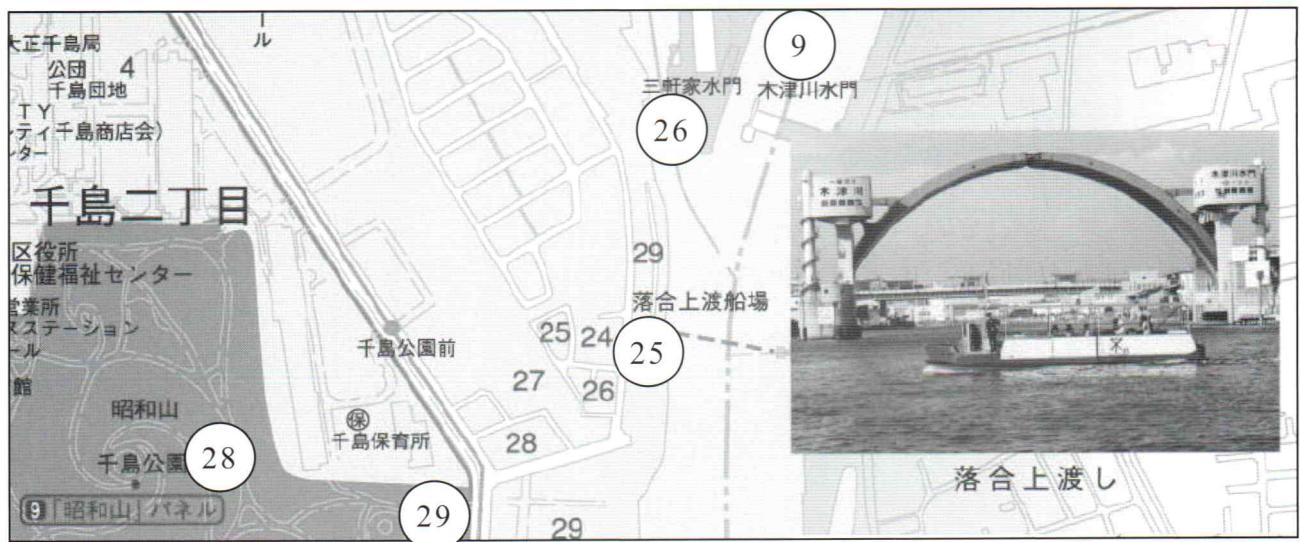
また、関西随一の木材市場を支えた「大正運河」（現在は埋め立てられ千島公園の下になっています）の木津川の入口は、この渡しの南側にありました。

上流にある木津川水門（防潮）は、常時開いているが、毎月 1 回程度開閉試験運転のため閉められます。



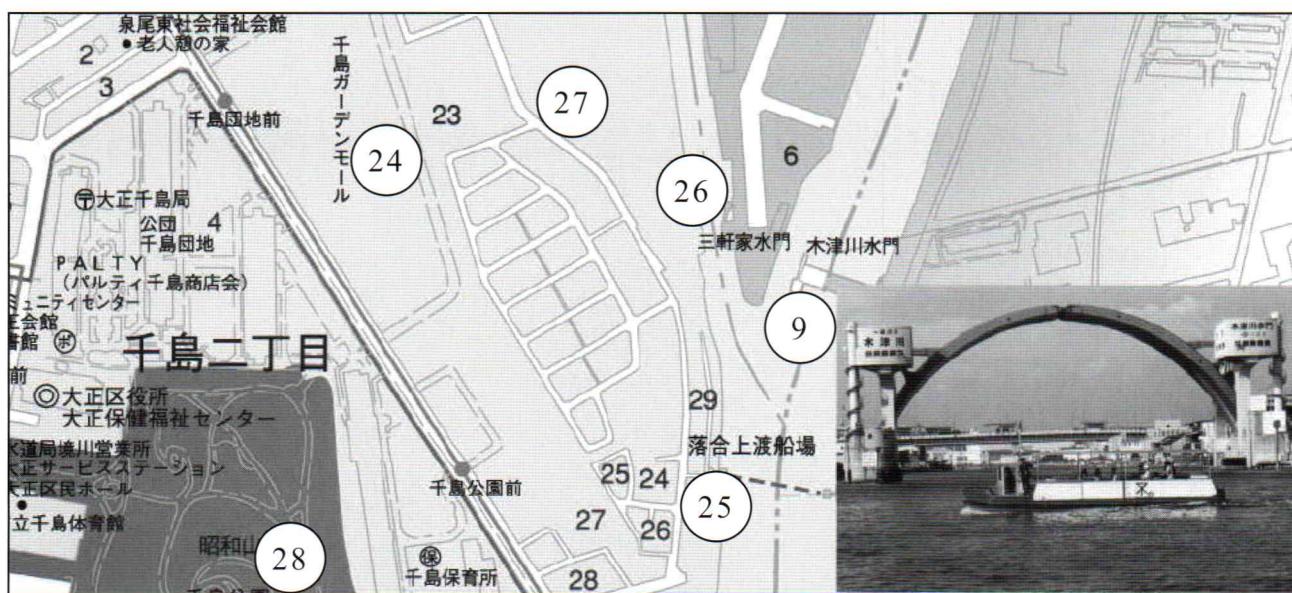
昭和40年ごろ

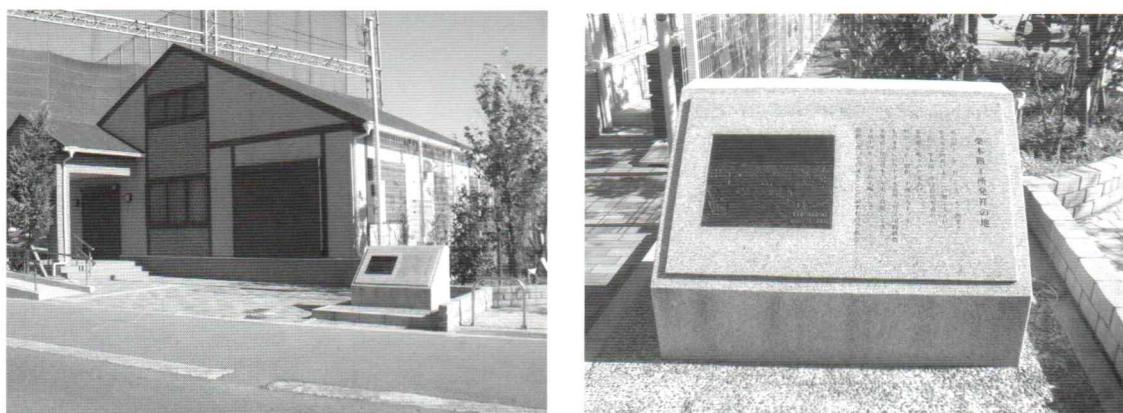
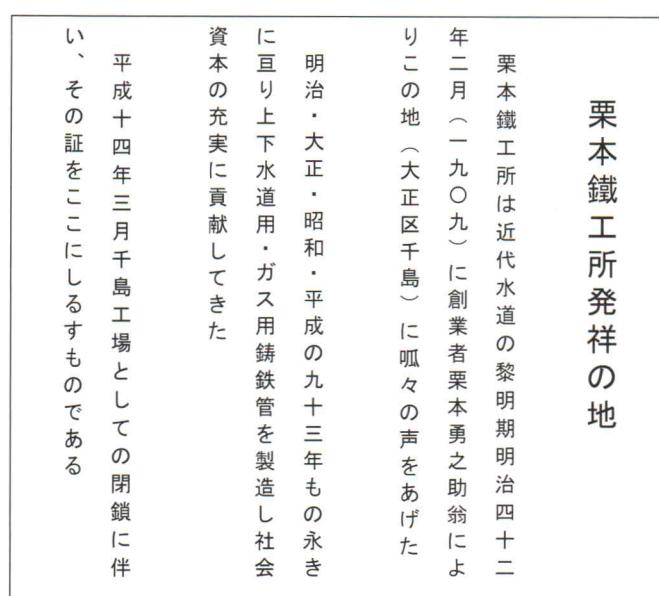
『わがまち大正』から転載



概要(西大阪治水事務所ホームページから)

所在地	大阪市大正区千島1丁目
形式	走行式スルースゲート
径間	14.6m
有効幅員	14.3m
敷居高さ	OP-2.8m
閉鎖時の天端高さ	OP+7.4m
扉体の大きさ	上段扉：幅 16.24m×高さ 5.70m 下段扉：幅 15.30m×高さ 4.98m
扉体重量	上段：38.8トン 下段：44.6トン
操作時間	30分
扉体を閉める所要時間	20分
動力	電動機 37kw 走行台車・ ワイヤー巻取式
発電機	ガスタービン式 240馬力
完成年月日	昭和43年7月



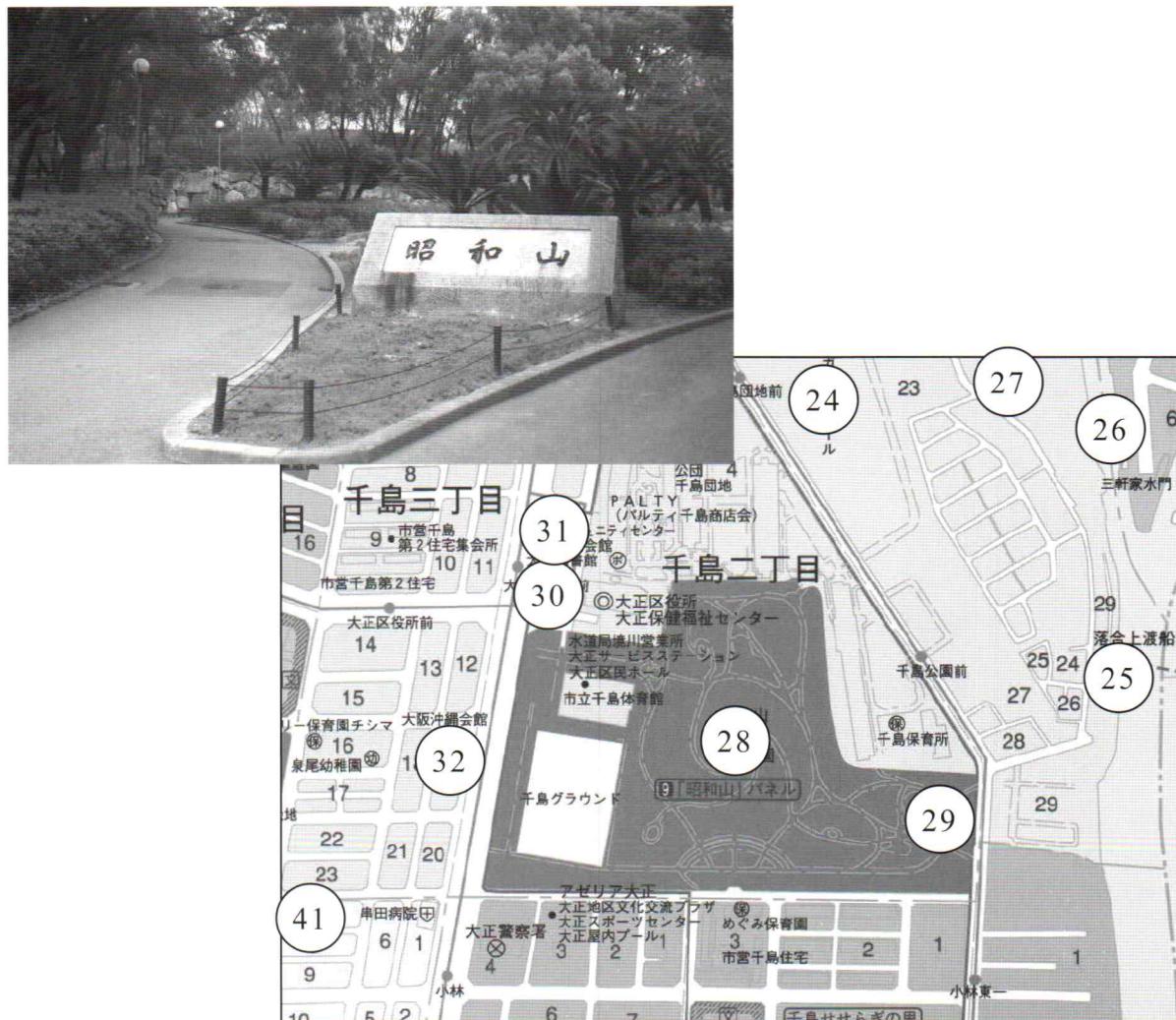


千島新田は、東成郡千林村（現旭区）の岡島嘉平次により、明和5年（1786年）から順次開発されました。地名は千林村の「千」と、岡島の姓の「島」をつなぎ合わせて「千島新田」と命名されました。

大正時代の千島町一帯は西区から移転してきた木材業者により、関西随一の木材市場となり、木材の集積のため、木津川と尻無川を結ぶ大正運河（延長1,963m・幅45m）が大正12年に完成しました。住之江区の平林貯木場へ移転するまで、この運河を中心に貯木池として利用されていました。

昭和44年9月に発表された「千島計画」は、区のほぼ中央、もと大正運河や貯木池のあった千島町一帯に「港の見える丘」を造るという大規模な計画でした。この人工の山は地下鉄工事の残土など、約170万立方メートル（ダンプカー57万台）の土砂で造られ、標高33mで「昭和山」と命名されました。

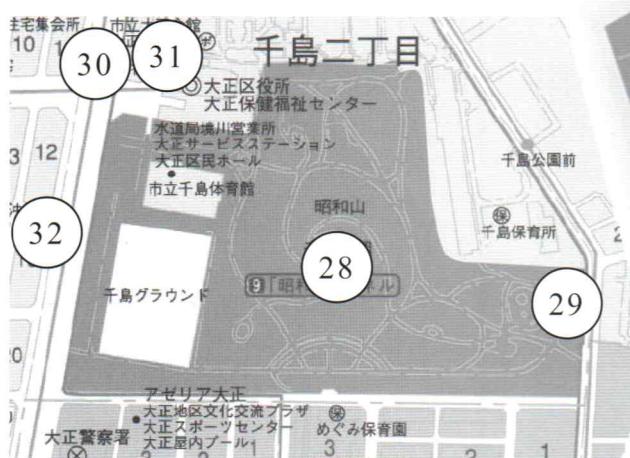
千島公園（11.2ha）の中心に位置するその頂上からは、六甲や二上、葛城、金剛、和泉の山並みとともに港大橋、なみはや大橋、千歳橋、新木津川大橋、千本松大橋などが眺められ、麓には「せせらぎ」も整備され、その恵まれた自然是区民の憩いの場となっています。



千島町から小林町、新千歳町へかけて土地を所有していた芝川一族の千島土地株式会社が、大阪木材市場土地株式会社と協力して、木津川と尻無川を結ぶ大正運河の開削を計画し、大正 8 年から岩田土地も加わって工事をはじめ、大正 12 年 6 月に完成。

その後の木材業の繁栄を歌い上げた大正運河も、昭和 45 年に埋立を完了し、47 年間の幕を閉じた。

その位置は千島公園の南部分から現在の大正内港第 1 突堤の北側（現在のはしけ桟橋あたり）を通っていた。



大正区コミュニティセンター前噴水広場の南側花壇に「財団法人大正区コミュニティ協会」設立20周年を記念し、平成17年12月に「江戸時代の大正区の風景」のパネルが設置されました。



浪花百景「しおなし 漆づみ甚兵衛の小家」(左側の図)

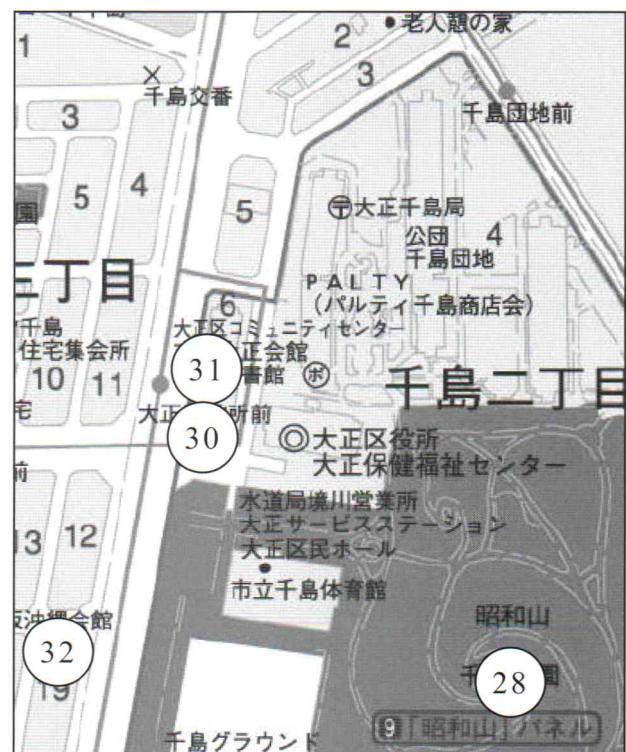
尻無川両岸に築かれた堤防には、黄櫨漆が植え連ねられ、秋には紅葉を愛でる多くの市民でにぎわった。また、甚兵衛渡しの小家(渡船待合所)では、蜆汁などが振舞われた。

「大坂大湊一覧」(中央の図)

江戸時代の大坂は、南木津川、北の安治川を湊として利用した。北前船を中心とする諸国廻船は、木津川筋を往来する一方、菱垣廻船などは、安治川筋を利用した。

浪花百景「木津川口千本松」(右側の図)

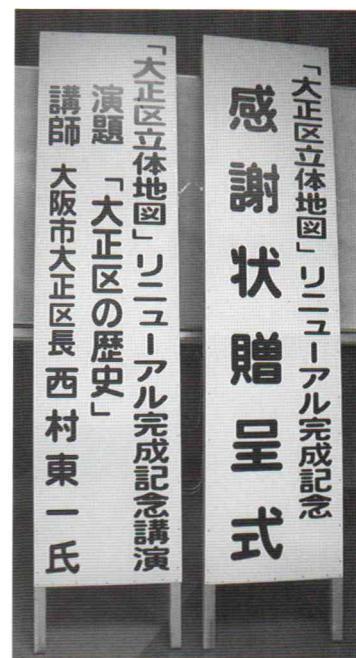
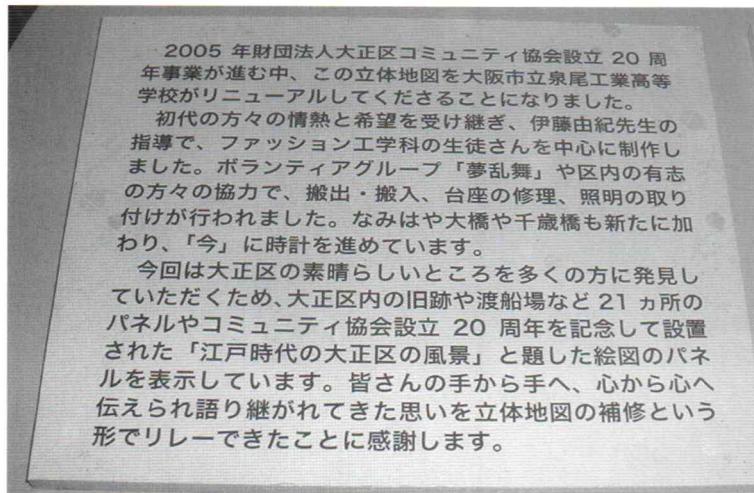
天保3年(1832)に行われた木津川の川浚えの時、幕府は河口南岸に石垣堤を築き、諸国廻船が入出帆しやすいうように湊を整備した。この堤には松並木が植えられ、千本松として知られた。



大正区コミュニティセンター1階に設置している『大正区立体地図』を大阪市立泉尾工業高等学校がリニューアルしました。

初代の方々の情熱と希望を受け継ぎ、ファッショ工学科の生徒の皆さんを中心に製作しました。ボランティアグループ「夢乱舞」や区内有志の方々の協力で、搬出・搬入、台座の修理、照明の取付けが行われました。

なみはや大橋や千歳橋も加わり、「今」に時計を進めています。



32	(32-1) 大阪沖縄会館 (32-2) 関西沖縄文庫	千島 3-19 小林東 3-13
----	--------------------------------	---------------------

大正区は沖縄県出身者が多いといわれる。その実数は定かではないが県人会員数によれば区民の1/4程度となる。

第1次世界大戦後の不況以後集住化が始まり、当初は北恩加島地域を中心であったが、その後区画整理事業等に伴い、他地域への分散が進んだ。

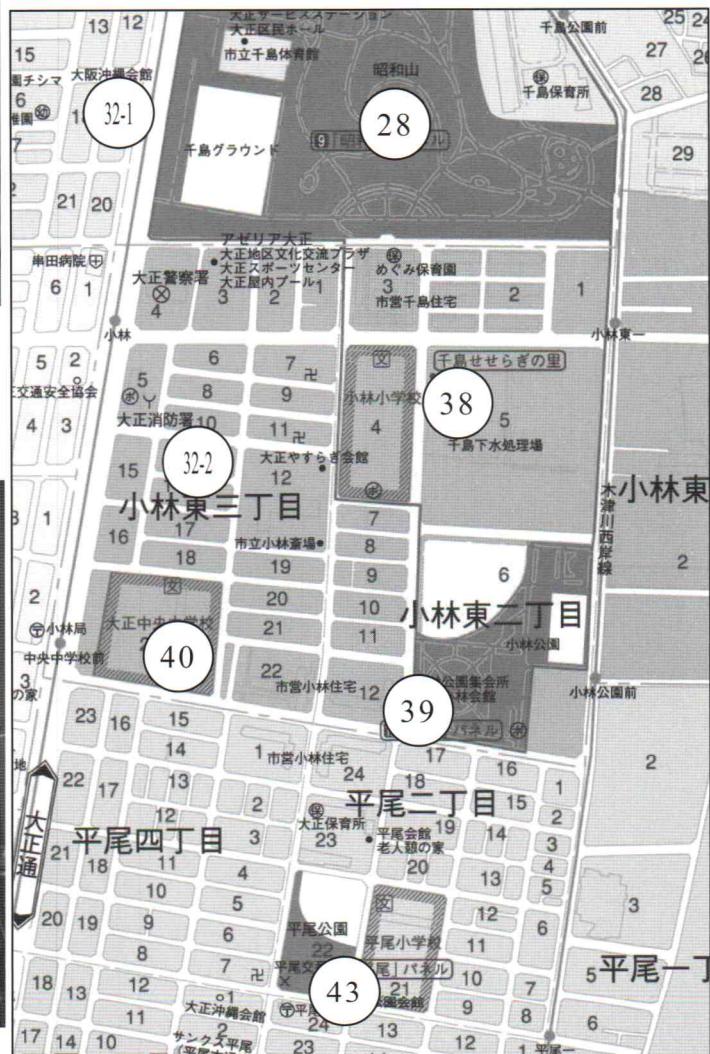
大阪沖縄会館は、大阪府沖縄県人会連合会の本部が置かれるとともに、沖縄ツーリストや民芸品店、琉舞民謡の会が入っている。関西沖縄文庫は沖縄関係の図書を約6,000冊所蔵するとともに、フィールドワーク、三線教室などが開かれている。



大阪沖縄会館



關西沖繩文庫



恩加島新田は、東成郡千林村（現旭区）の岡島嘉平次^{おかじまかへいじ}が、木津川と尻無川の間の浅州の干拓に着目し、文政12年（1829年）に検地を受けました。名称は当時の代官岸本武太夫の命で、「岡島」を「恩加島」と換用したものです。

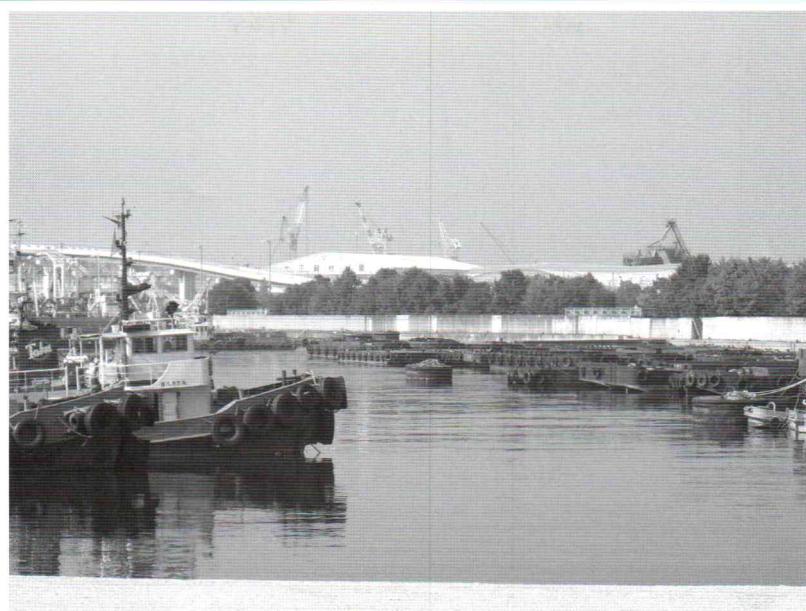
恩加島新田のうち北側が「北恩加島新田」、南側が「南恩加島新田」となりました。

北村公園の「北村」は、泉尾新田の開発者「北村六右衛門」に由来しています。

《大正区の思い出の橋》

大正区の区域は新田開発により成り立っているため、運河や用水路がいたるところに張り巡らされていましたが、区画整理事業などで、そのほとんどが消滅しました。区内中央部の運河周辺に特に多かったので、その昔の橋の名前だけでも残したいと右の図にその一部を紹介します





内港展望台からの大正内港

〔展望台〕



〔ギャラリー〕



(2004年9月に区民の方たちで制作しました)



**[高校総体]ソフトテニス選手 大正区に集う…
6日間で延べ4万人 マリンテニスパーク・北村**

全国47都道府県代表の選手が集まり、平成18年度全国高等学校総合体育大会「ソフトテニス」競技大会が、8月2日から8日までマリンテニスパーク・北村で開催され、6日間で延べ4万人を超える人たちが大正区を訪れました。

炎天下の下、日焼けした高校生の顔は、汗を流しながら鍛え上げた脚力と真剣なまなざしでボールを追い、俊敏にラケットを振る姿の頼もしさなどの選手も同じでした。試合を食い入るように見つめる応援者も、声援を送りながら共に戦っているようでした。会場は熱気に包まれ、赤、青、黄色のユニホームであふれ日焼けした顔に白い歯が美しく光りとても印象的でした。試合の合間に記念のTシャツやタオルを買い求める人びとで賑わい、記念写真コーナーでは試合を終えた選手も集まり、対戦時とは違うさわやかな笑顔があふれ、青春の1ページがこの夏深く刻まれているようでした。

選手たちに大阪のことを聞くと、まず「たこ焼きがおいしい」と食べ盛りの高校生らしい素直な答えが返り、大正区のことを聞くと、余り知られていない印象がぬぐえず少し残念。高校総体でマリンテニスパーク・北村を訪れたことをきっかけに、これから時代を担う高校生に大阪のまちは色々な雰囲気を持ち合わせていること、とりわけ大正区を知っていただけた良い機会でした。／広報担当

施設内容

○ 市内最大規模のコート数を有する施設

砂入り人工芝コート 25面

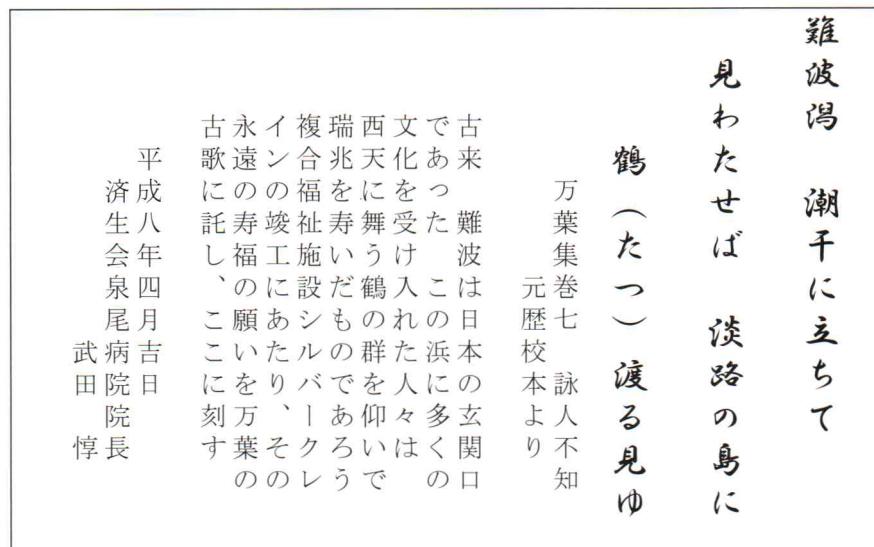
内センターコート 1面

(400名収容の観客席設置)

内ナイター照明設備 16面



昭和44年 地域の向こうに「大阪港鉄工共栄埠頭」の建物が見える



落合下渡船場(おちあいしもとせんじょう)

～ユリカモメと一緒に木津川を渡る～

概要

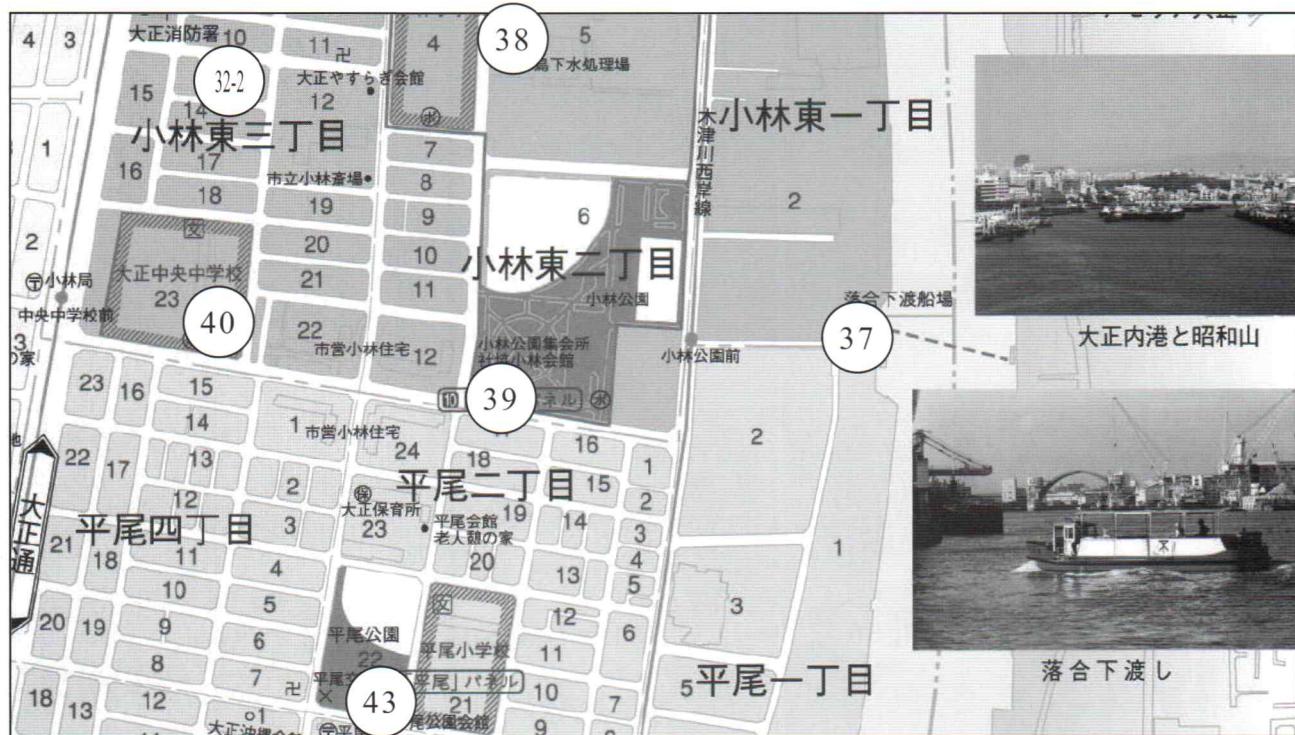
大正区平尾 1 丁目と西成区津守 2 丁目を結ぶ
(岸壁間 138m) 落合下渡線船は、開設時期は明確
ではないものの、天保 10 年(1839 年)の「おおさか
みなとぐちしんでんさいけんず大坂
湊口新田細見図」にも「ワタシ」の表示があります。



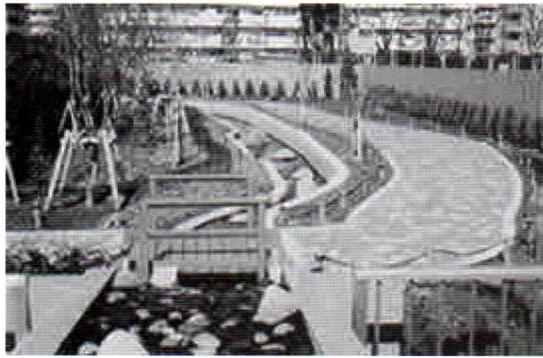
対岸の「津守」には、津守新田の産土神を祀
る、「津守神社」があります。津守の名称は古く「万葉集」にも見えます。

また、大正区側の「平尾」の町名は明和 8 年(1771 年)に開発された「平尾新田」に由来
します。

このあたりは、毎年 10 月から翌年 4 月にかけて、数百羽のユリカモメが飛来します。



千島せせらぎの里



修景池にはガチョウ、アイガモ、アヒルが楽しく泳ぎまわり、自然の小川をイメージして作られたせせらぎには鯉、メダカ、ドジョウなどが生息しています。

また、遊歩道には、千島下水処理場のシンボルツリーであるノムラモミジをはじめとして、40種以上の樹木や花が植えられ、緑豊かな景観の中、どなたでも楽しめる憩いの空間となっています。

平成 15 年(2003)4 月から一般開放



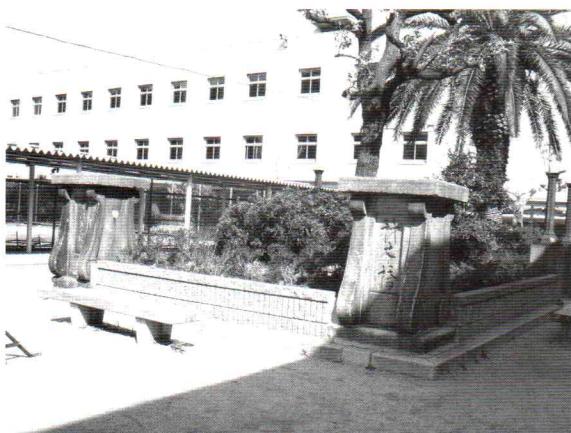
小林新田の由来は、東成郡千林村（現旭区）の「岡島嘉平次」が開発し、天保3年（1832年）に検地を受け、出身地の千林村の「林」をとって「小林」と名付けたものです。

戦前、当区にあった木材街は、西区の西道頓堀・西長堀等の木材業者が大正6年ごろに集団移転してきたもので、業者が連合して運河・貯木場などの工事を行い、小林町・千島町一帯は西日本有数の木材市場になりました。貯木池は大正運河を中心に広がり、その周辺に製材所、合板工場、貯木場、木材市場などが混在していました。木材関係者の面積は区域の約1割を占めていましたが、戦後の大坂港復興計画による大正内港化工事により、木材関係者は昭和27年から46年にかけて、平林貯木場（現住之江区）へ移転しました。

また、大正内港化工事により、尻無川左岸に近代的な鉄鋼埠頭が完成し、大正第一突堤は、内国貿易雑貨定期船の基地、第二突堤は小型船バースとなりました。また、第一突堤北側には、内港はしけ桟橋などが整備されました。

工事で発生した土砂は、区内の臨港地区とその背後に送られ全面盛土による区画整理が施工され、市街地の近代化に貢献しました。



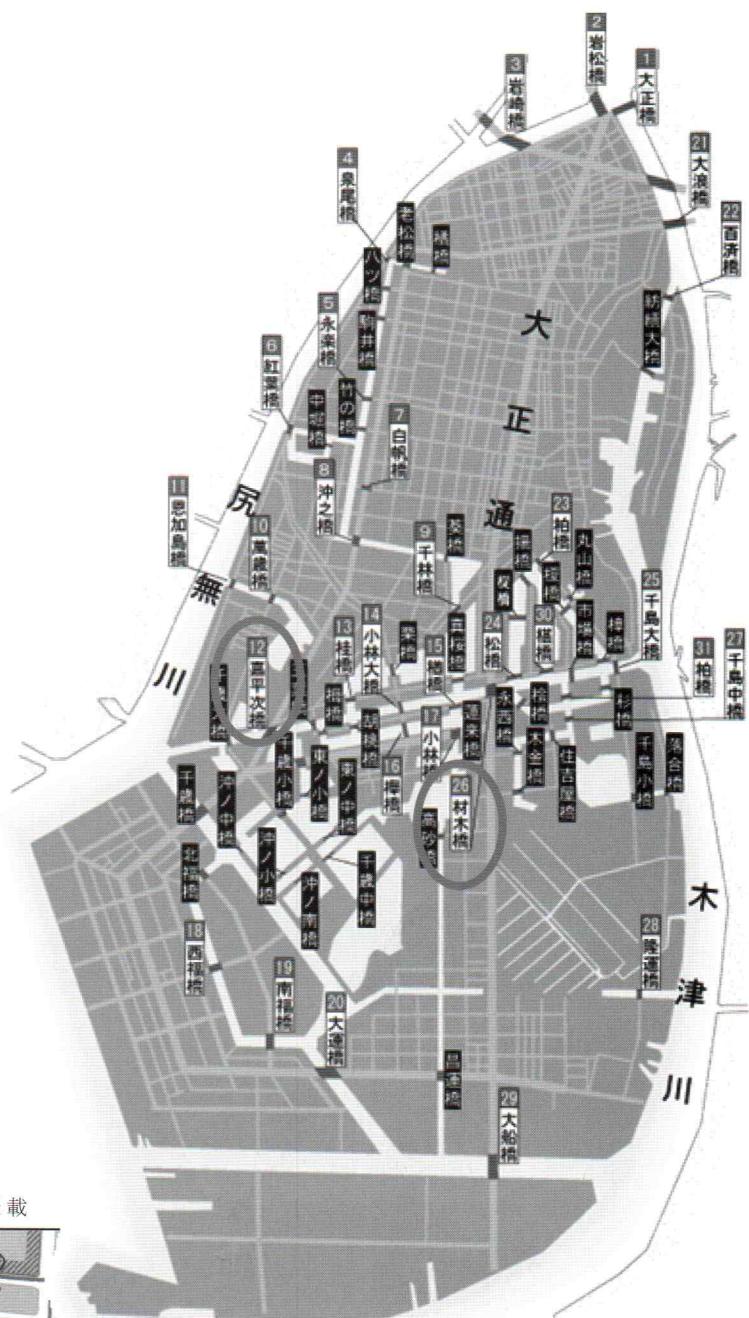


材木橋親柱



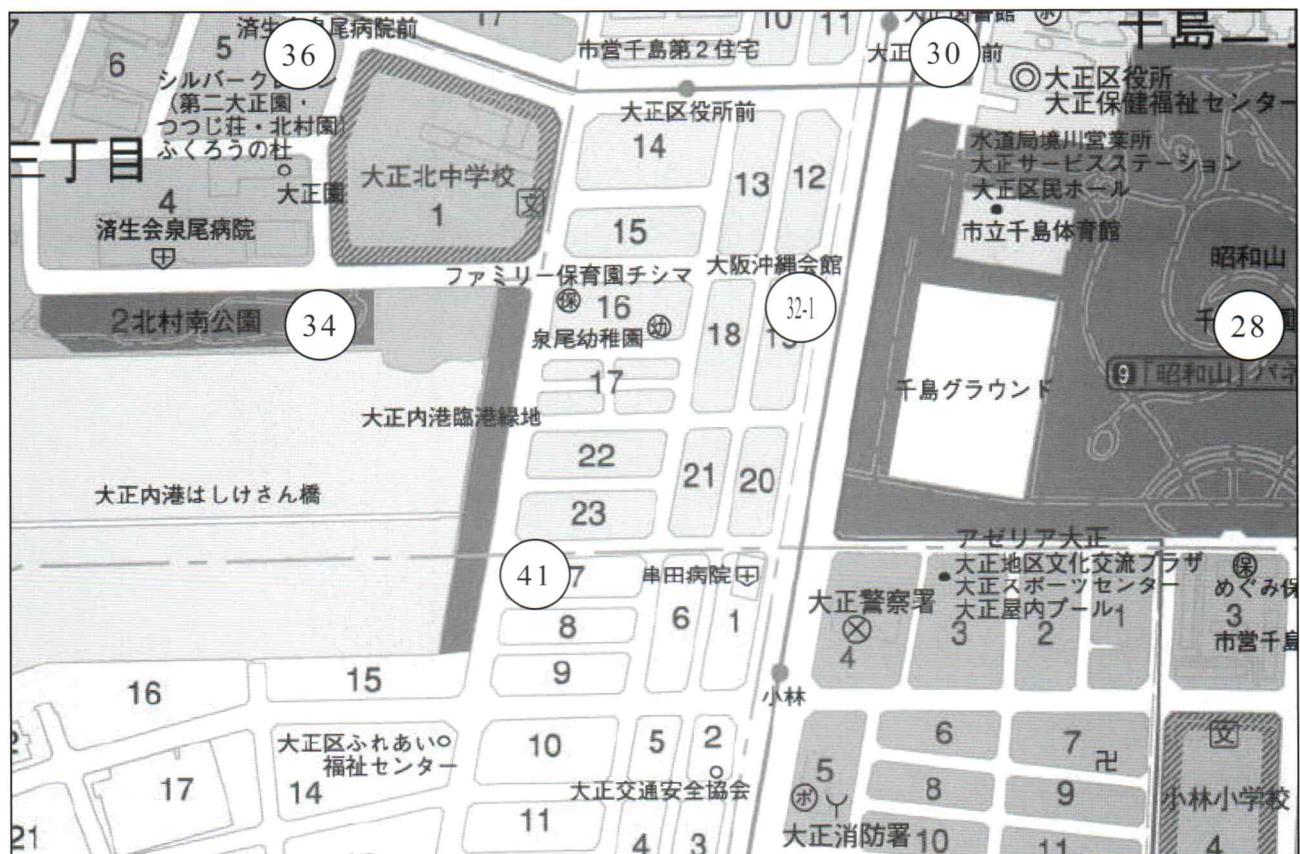
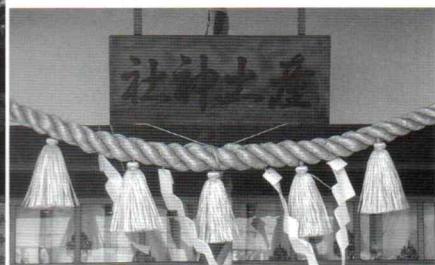
嘉平次橋親柱

『懐かしい大正区の風景』から転載



小林産土神社 鎮座地：小林西 1-7-13

天保 3 年(1832)の勧請で、天照皇大神、応神天皇、住吉大神を祭っている。江戸時代の初期より幕末に至る新田開発により開墾されてできた小林新田(京新田)、岡田新田による農民の守護神として創建され、祭神としての住吉大神の守護により土地の安全と豊作を祈願した。夏祭は南・北地区の太鼓みこし、獅子舞など町中を練り廻って賑わった。特に材木の町として栄えた大正、昭和の時代では賑わいの頂点であった。戦災で全焼したが復旧し、神事も継続され戦後の土地区画整理事業により現在地に遷宮された。



平尾新田は大坂江戸堀《現西区》の平尾与左衛門が開発し、明和 8 年(1771 年)に幕府の検知を受けました。その地域の中に「亥」の年に開発されたことに因み、「亥開」と呼ばれる所《現在の南恩加島抽水所あたり》がありました。この地名から名称を取ったこの「平尾亥開公園」の東側で木津川に面したところ《現在の南恩加島 1 丁目》に、明治 41 年(1908 年)にペスト患者隔離所が新設されましたが、その施設は、明治 42 年(1909 年)の北区の天満を火元とするいわゆる「北の大火」と呼ばれる火事で罹災した延べ約 22,000 人の市民を収容し、所内には小学校も開設されました。

その後、第一次世界大戦の結果、大正 3 年(1914 年)11 月、中国にいたドイツ兵などの捕虜収容所が、日本各地(12箇所)に設置された時、大阪においてはこの施設が「大阪俘虜収容所」として使用され、軍人など 760 人を収容いたしました。捕虜は収容所にあっては、毎日の生活として朝夕 2 回の点呼を受ける以外の労働は特になく、娯楽として、読書、絵画、演劇、音楽、あるいはテニスやフットボールおよび器械体操などのスポーツを楽しみました。その様子を撮影した写真も現存しています。大正 6 年(1917 年)2 月、大阪俘虜収容所は閉鎖され、似島《広島市南区》へ移転しました。



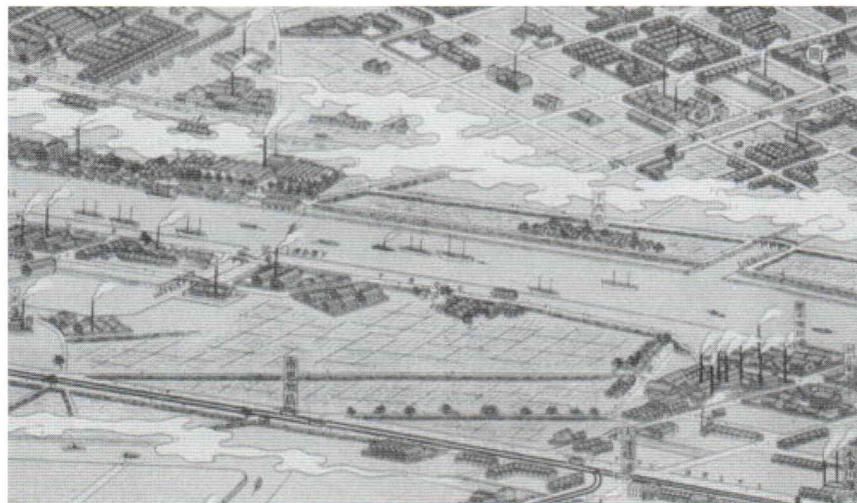
『懐かしい大正区の風景』から転載



平尾新田は、千島新田の南にあり、もと木津川河口の寄州でした。宝暦 7 年(1757 年)、岡島嘉平次が新田開発の許可を受けましたが、その一部を大坂江戸堀(現西区)の平尾与左衛門が譲り受け、明和 8 年(1771 年)検地を受けました。天保 10 年(1839 年)発行の大坂湊口新田細見図によると、所有者は三軒家町の堺屋藤兵衛となっています。

木津川は江戸時代から諸国の回船が多く集まり「木津川二十四浜」と称せられ、川口港化しておりました。各浜では諸国の大船から二十石積の上荷船等へ荷物を積み換え、市中の問屋へ運びました。二十四浜のうち大正区には、勘助島浜、三軒家浜、難波島浜、落合浜等があり、浜ごとに上荷船の所属は決まっていました。木津川口の「川口浚」は交易で賑わう大坂の街にとって不可欠なもので、大坂に入津する船から「石錢」を徴収し、「水尾浚」を度々行っていました。また、難破船救助の奨励を行っており、「シケ」の場合も高張提灯を掲げ、上荷船による救助を行えるよう手当等を与えていました。

大正時代になると木津川沿いには水運至便の地という恵まれた条件をいかして造船所が集中し、大小合わせて 50 社を数えました。現在でも三軒家東から船町にかけての木津川沿いには鉄鋼関係などの企業が林立しています。



『大正区ホームページ』から転載



千本松大橋

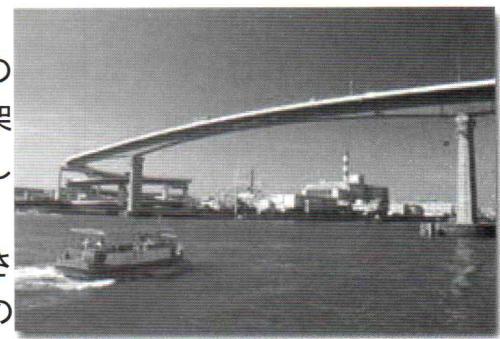
千本松大橋は、周辺地域の発展と市中央部の交通混雑の緩和を目指して、木津川の最下流にあった千本松渡し(架設設計画当時一日に8000人近い人と二輪車を運んでいました)の位置に建設されました。

この橋は大正区南恩加島と西成区南津守を結ぶ長さ323.5m、有効幅員9.75m(歩道幅員2.25m)の大橋では初の

「らせん橋」で、昭和48年10月に完成しました。橋の中央部の高さは36mで、水面からマストまでの高さ34mの船なら、楽に通行できます。橋の両サイドに坂路高架がつけられ、大正区側は長さ452.4m、有効幅員12.25m(歩道幅員2.5m)となっています。

この橋の完成で、南大阪から大正区の工業地帯へ直接車の乗り入れができるようになりました。これまでの市内経由の大回りが解消されました。

この橋に続いて臨港地帯には、港大橋(49年)、平林大橋、かもめ大橋(51年)などジャンボ橋群が形成されました。



(写真提供 (財)大阪市都市工学情報センター)

千本松渡船場(せんぼんまつとせんじょう)

～橋と共に存する渡船～

概要

このあたりは木津川の川尻に近く、江戸時代には「北前船」をはじめ諸国の船が盛んに出入りしました。幕府は舟運の安全のため、大阪市章のもとになった「瀝標」を数多く設置するとともに、防波堤として、



『大正区ホームページ』から転載

天保3年(1832年)には長さ1.58kmに及ぶ大規模な石の堤が築かれました。

千本松の名の由来は、この堤防に植えられた松並木によっていて「摂津名所図会大成」に「洋々たる蒼海に築出せし松原の風景は彼の名に高き天橋立、三保の松原なども外ならずと覚ゆ…」とあります。

昭和48年(1973年)に千本松大橋が完成しましたが、現在、渡船は通学の貴重な交通手段として大正区南恩加島1丁目と西成区南津守2丁目を結び(岸壁間230m)、運航されています。

大正区側の「南恩加島」の町名は文政12年(1829年)に開発された「南恩加島新田」に由来しています。



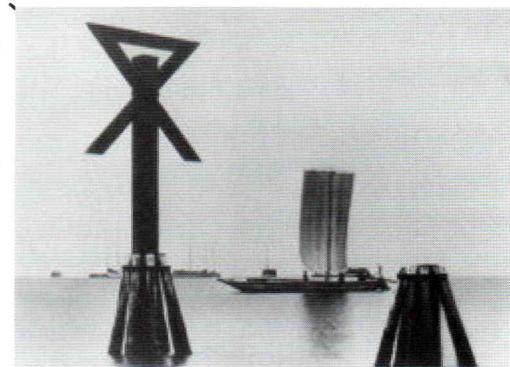
恩加島新田は、もと木津川河口の寄州よりすでしたが、
ひがしなり 東成郡千林村(現旭区)の岡島嘉平次おかじま かへいじが開発を始
め、文政 12 年(1829 年)に検地を受けました。名称は当時の代官岸本武太夫の命で「岡島」を「恩
加島」と換用したものです。

恩加島新田のうち、北側が「北恩加島新田」、
南側が「南恩加島新田」となりました。

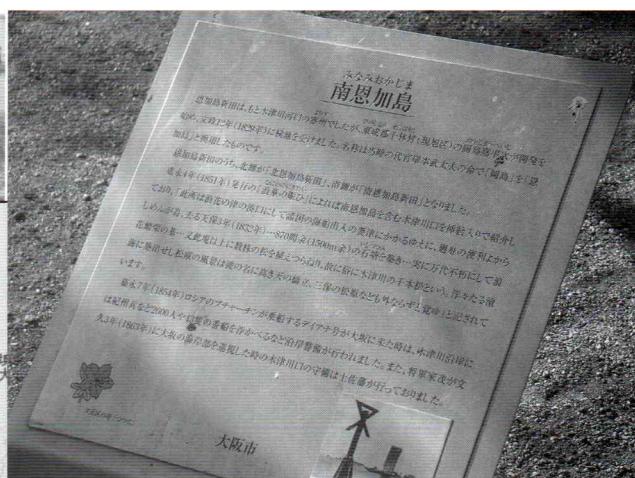
嘉永 4 年(1851 年)発行の「浪華の賑ひ」によ

れば南恩加島を含む木津川口を挿絵入りで紹介しており、「此所は浪花の津の
湊口にして諸国の海舶出入の要津にかかるゆえに、廻舟の便利よからしめん
が為、去る天保 3 年(1832 年)…870 間余(1500m 余)の石塘いしづみを築き…實に万代不
朽にして浪花繁栄の基…又此堤は上に数株の松を植えつらねり、故に俗に木
津川の千本松という。洋々たる滄海に築出せし松原の風景は彼の名に高き天
の橋立、三保の松原なども外ならずと覚ゆ」と記されています。

嘉永 7 年(1854 年)ロシアのプチャーチンが乗船するディアナ号が大坂に來
た時は、木津川沿岸には紀州兵など 2600 人や 43 隻の番船を浮かべるなど沿
岸警備が行われました。また、將軍家茂が文久 3 年(1863 年)に大坂の海岸部
を巡視した時の木津川口の守備は土佐藩が行っておりました。



『大正区ホームページ』から転載



天満宮 所在地：南恩加島 1-13-41

天保 7 年(1836)、南恩加島の開拓者三代目岡島嘉平次が道明寺天神(祭神は菅原道真)の分霊を産土神として、平尾町に近い木津川沿岸に奉斎したのが起源といわれる。明治 43 年 11 月、下八阪神社に合祀されたが、氏子の反対で社殿はそのまま存続、戦災で炎上したのにも屈せず再建し、戦後独立の神社となった。昭和 33 年 4 月、都市計画により現在地に移った。



昭和 19 年に徳島県美馬郡貞光町真光寺へ集団疎開した南恩加島小学校の生徒(29 名)が、翌 20 年 1 月 29 日午後 9 時ごろ疎開先で火災のため 16 名が死亡しました。

平成 15 年 1 月に児童の要望で南恩加島小学校に「十六地蔵記念モニュメント」が設置され、台座には 16 人の遺影と名前を刻んだ銅板をはめ、中には当日渡された卒業証書が収められました。



徳島県貞光町(現:つるぎ町)の真光寺には、貞光町の人々や徳島県全県の学校で取り組まれた募金でお地蔵さんがつくられ、1946(昭和 21)年 5 月 29 日開眼供養が行われました。像の高さ約 1.5m、台座の正面には「為疎開学童頓成菩提也」と刻まれ、横には町長の碑文と子どもたちの名前が刻まれています。



GM History in Japan

日本における歴史

1927 大阪に日本ゼネラルモーターズ株式会社を設立（資本金 800 万円）、シボレー車の組立開始（エンジン工場、車体工場、塗装工場、最終組立工場からなるこの組立工場の生産能力は、月産 2,000 ~ 2,500 台。生産第 1 号車は、シボレー 1 トン / 1.5 トントラックとシボレー 4 ドアセダン。以後、ビュイック、オークランド、ポンティアック、オールズモービル、オペル・コーチ、ブリッツ・トラック、ボグゾール、ベッドフォードと続いた。1941 年までの累計販売台数は 150,000 台。）

1941 第二次世界大戦により操業中止

日本 GM ホームページより抜粋



大正区における自動車産業の歴史

（株）クボタも自動車の草創期を大正区内で担っていた。（（株）クボタの 100 年史『クボタ 100 年』から）

大正 8 年 (1919)	「実用自動車製造株」設立 社長：久保田権四郎氏（クボタの創始者） 工場：大阪市西区南恩加島町（当時）
大正 9 年 (1920)	「ゴルハム式三輪自動車」の製造開始 (翌年 10 月までに約 150 台生産)
大正 10 年 (1921)	四輪自動車の製造開始
大正 12 年 (1923)	小型四輪車・リラー号開発 (大正 15 年までに約 200 台生産)
大正 15 年 (1926)	「ダット自動車製造株」設立 (実用自動車製造株とダット自動車商会の合併) (昭和 2 年 (1927) ~ 5 年に貨物自動車を 362 台生産)
昭和 5 年 (1930)	水冷式 4 気筒 500cc 小型自動車を試作
昭和 6 年 (1931)	大阪・東京間のノンストップ運行試験を完走 【ダットソシ※と名づけて販売（日産自動車のダットサンの原型）】 ダット自動車製造株の株式を戸畠鑄物株（日産自動車の前身） へ譲渡（9 月）

*ダットソン (DATSON) : ダットはダット自動車商会の前身「快進社（日本初の国産自動車メーカー）」の設立に関わった 3 名の方の頭文字 (D A T) であり、大正 4 年 (1915) に製造された「D A T 自動車（脱兎号）」を受継ぎ、息子としてのソン (S O N) と掛け合わせ命名。のちのダットサンは、S O N が「損」に通じるとして「S U N (太陽)」に変更し命名。

鶴町地域は、市の築港計画(明治30年～昭和3年)による埋め立てによって造成され、大正8年3月、「鶴町」「鶴浜通」「福町」という新しい町として誕生しました。

鶴町の町名は聖武天皇の「難波宮」の近くの光景を「田辺福麻呂」



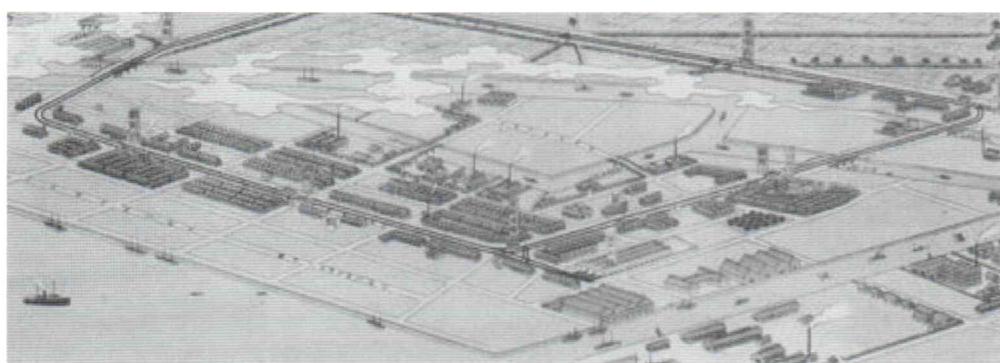
が詠んだ「潮干れば葦辺に騒ぐ白鶴(百鶴とも)の妻よぶ声は宮もとどろに」(万葉集卷6-1064)から「鶴」を、また福町は、この詠者の「福」からとられたものです。

昭和51年の住居表示により、鶴浜通は鶴町1～4丁目に、福町は現在の鶴町5丁目となりました。

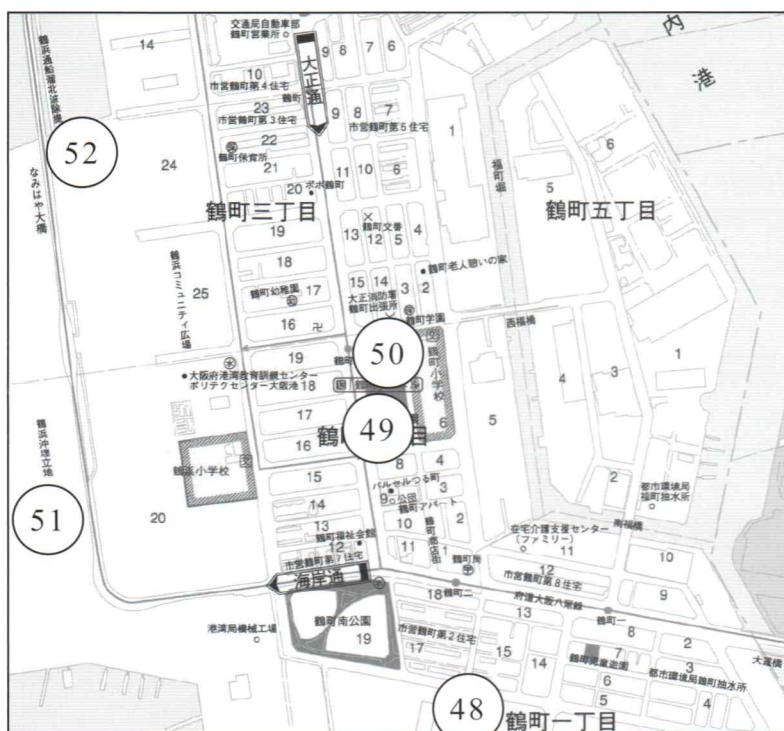
鶴町地域は運河や内港に面していることから、外資系自動車工場や日本とアメリカの間に海底ケーブルを敷設した会社や橋梁会社等の工場や倉庫が立ち並ぶ臨海工業地帯として、また職場と住宅が近接した地域として発展してきました。

鶴町には、昭和5年から11年まで中央気象台大阪支台が設置され、昭和9年の室戸台風も観測していました。

昭和25年のジェーン台風以降に港湾事業や土地区画整理事業が並行して進められ、現在のような防潮堤に囲まれた地域となっています。



『大正区ホームページ』から転載



神明神社 所在地：鶴町 2-7-29

御祭神は天照皇大神・八幡大神・春日大神であり、初め後陽成天皇の御代に京都の西院に祀られたが、元和 2 年(1616)初代大坂城代松平忠明により大坂城・町中の守護神として大坂に移された。以後内平野町に在り、朝日の神明^{※1}・夕日の神明^{※2}と共に大坂三神明のひとつに数えられ日中の神明又は照日の神明と称せられた。

忠明が立てた大坂夏の陣の軍功は、西院に屯した折の祈願の靈験によるものと大坂に移され、爾後大坂の祈祷所と呼ばれ、特に勝運に靈験あらたかな神様として、北浜堂島の相場師や船場井池の商人の崇敬をうけた。また毎月 16 日の夜は参詣客が群れをなし、屋台商人が列をなし大変賑わい、これが大坂の夜店の発祥といわれている。大正 13 年松屋町筋拡張工事のため社地狭小となる折、特に鶴町住民の熱烈な誘致により、鶴町・船町の氏神として当地に遷座している。



※1 朝日の神明

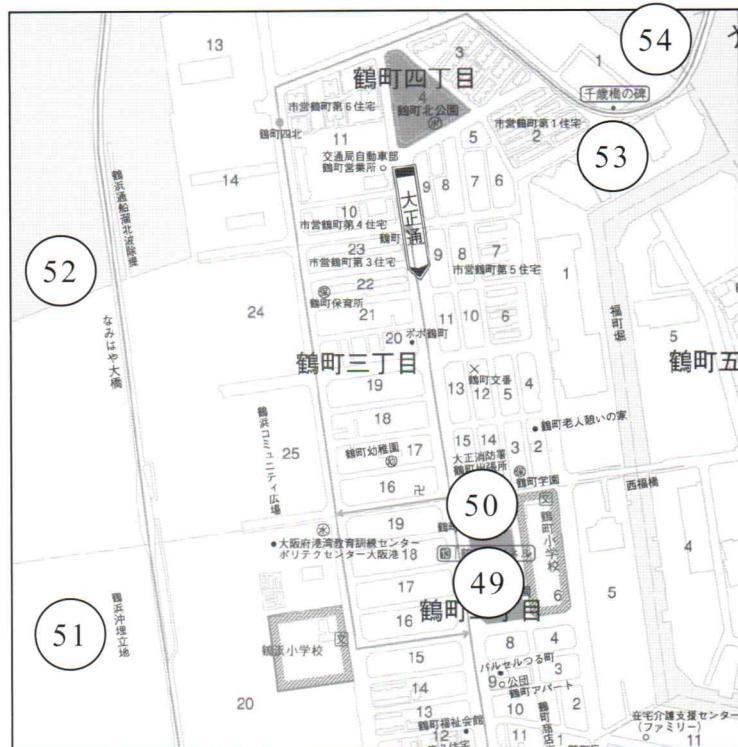
中央区(旧東区)神崎町にあった朝日神明宮。

現在は、此花区春日出中の「朝日神明社」に合祀。

※2 夕日の神明

北区天満にあった夕日神明宮。

現在は、北区曾根崎の「露天神社」に合祀。



● 鶴浜沖埋立地の有効利用

平成13年7月に埋め立てが完了した鶴浜沖埋立地の活用は、区の活性化及び経済・文化の振興に多大な影響を及ぼすものであり、整備計画については、恵まれたウォーターフロントを活かした、人が住み、働き、集う、商工業の共生が図られるような「住・職・遊」のバランスのとれた複合的な空間であることが望まれている。



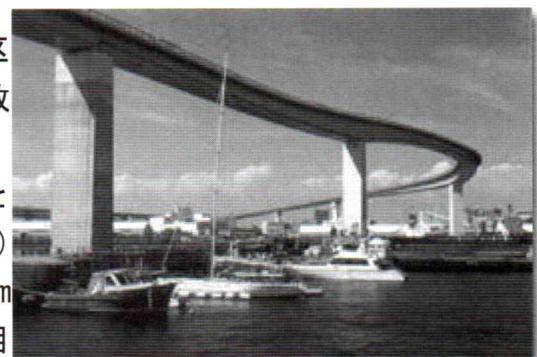
鶴浜沖埋立地



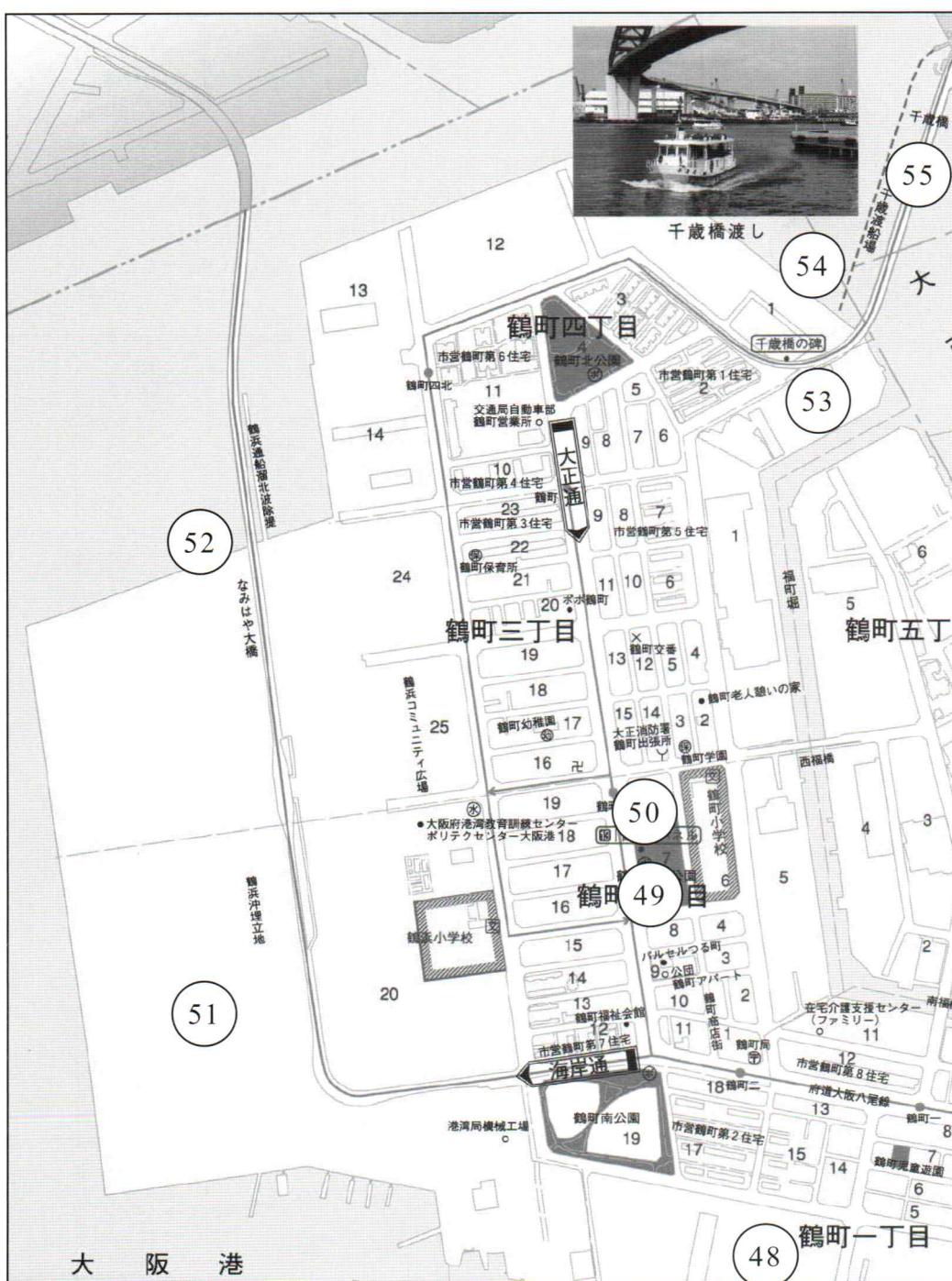
なみはや大橋

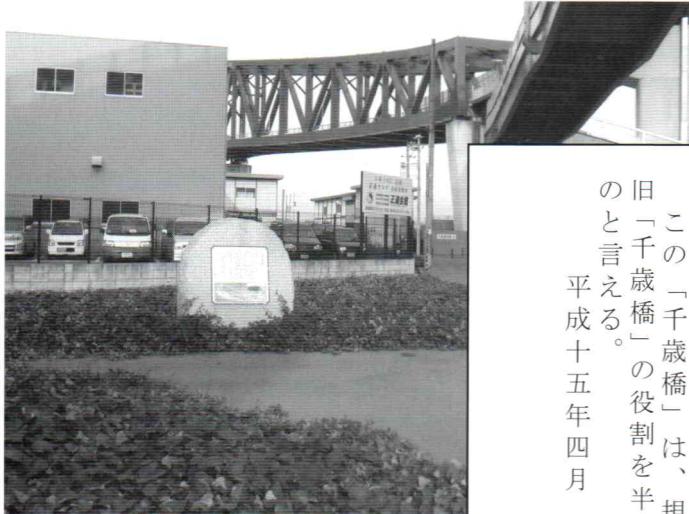
なみはや大橋は、尻無川の河口部において大正区と港区の放射状道路を連絡し、港湾地域の災害時の避難路及び救援路としての役割も担っています。

本橋は、諸条件により、渡河部平面線形が変則的な曲線となった長大橋(長さ 580m 幅員 11m)で中央支間長(250m)は国内最大で、大正区側の高架部分は長さ 500m 幅員 11m です。なお、このなみはや大橋は、大阪市としては 2 番目の「有料道路橋」です。



(写真提供 (財)大阪市都市工学情報センター)





この「千歳橋」は、規模や形こそ異なるが、旧「千歳橋」の役割を半世紀ぶりに復活したもと言える。

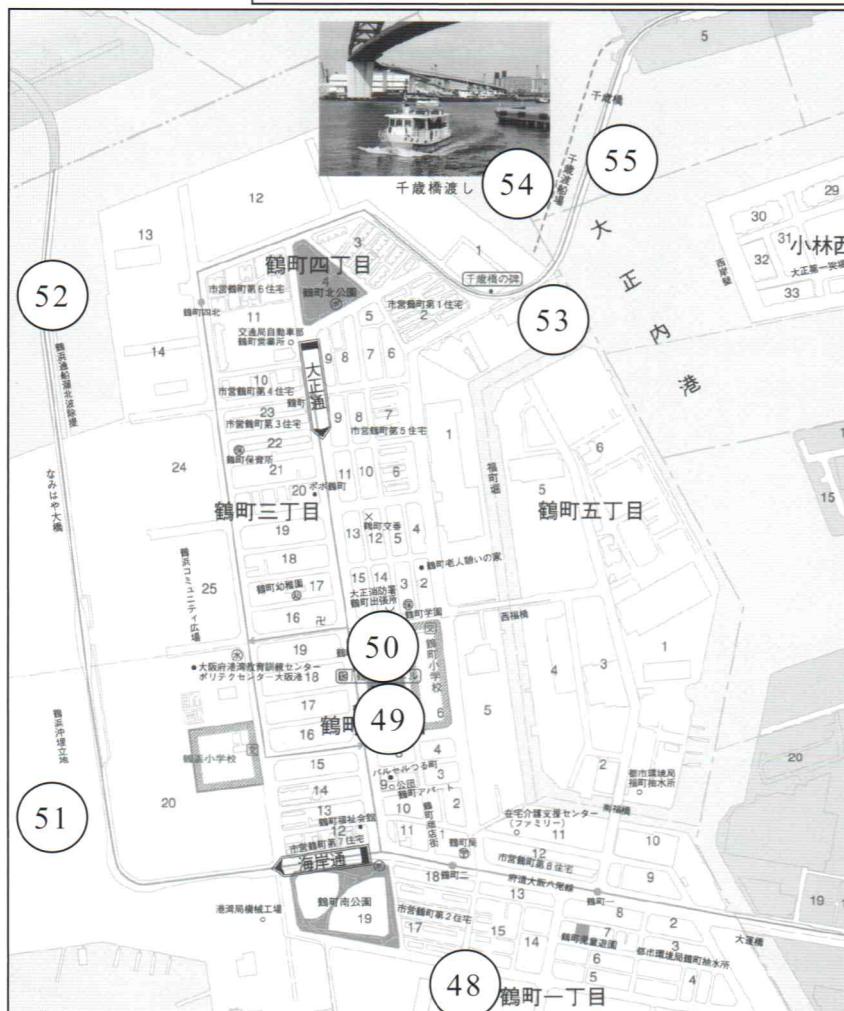
平成十五年四月

大阪市

戦後、大正区においても復興事業が進められ、大正内港が整備されるに伴って、この橋は昭和三十二年に撤去されたが、地域における交通路の必要性は高く、架橋が待たれていた。しかし、市電も通つて重要な交通路を担つていた。当初は木橋であつたが、昭和十五年には鉄いかけ橋に架けかえられている。

千歳の名は、江戸時代、弘化二年（一八四五）から開発された千歳新田に因む。

千歳橋（ちとせばし）



千歳渡船場(ちとせとせんじょう)

～大正区内で航路が一番長い渡船～

概要

鶴町地域は、大阪市の築港計画(明治 30 年～昭和 3 年)によって埋め立てられ、大正 8 年には万葉集の歌(巻 6-1064)に因み「鶴町」と名づけられました。当地と対岸にあった千歳新田(現在は大部分が大正内港となっています)を結ぶ橋として、大正 11 年に旧千歳橋が架けられ市電も運行されていましたが、大正内港工事のため昭和 32 年に橋は撤去されこの渡船場が設けられました。



『大正区ホームページ』から転載

渡船は大正区鶴町 4 丁目と同区北恩加島 2 丁目を結んでいます(岸壁間 371m)。

鶴町側からは、多くの船が浮かぶ大正内港のかなたに、昭和山(標高 33m)や千島団地等が眺められ、尻無川の広々とした河口風景ともあいまって、ウォーターフロントの美しい景観となっています。

平成 15 年 4 月には、この渡しの上を全長 1,064m、海面からの高さ 28m の新「千歳橋」が完成し大正区の新たなランドマークとなっています。

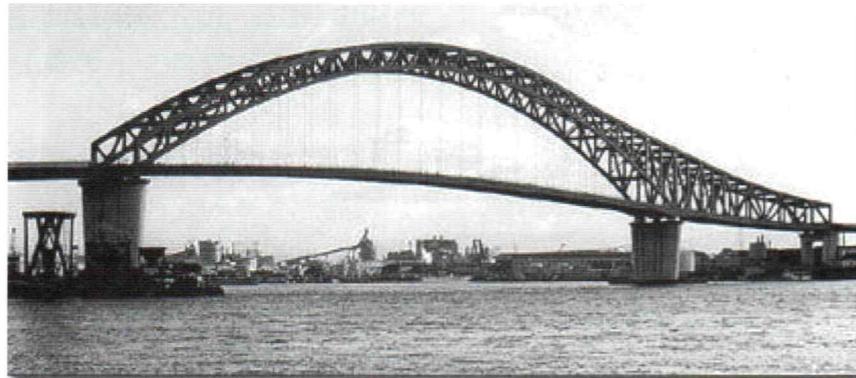


千歳橋

千歳橋は平成 15 年 4 月大正内港(鶴町～北恩加島)への架橋により、大正区内の環状道路を形成して地域交通を円滑化するとともに、大正通りの交通混雑を緩和するものです。

橋長 365m、車道幅員 7.0～8.8m、歩道幅員 3.0m で緊急時には、広域非難場所への避難路としての役割も担っています。主橋梁部はアーチ橋とトラス橋が融合する 2 径間連続ブリースドリブアーチ橋です。(※ブリースドリブアーチとは棒部材を組み合わせて構成した骨組構造をトラスといい、アーチ部をトラス構造とした形式)

鮮やかなブルーを基調とした千歳橋は近隣の赤の港大橋、ライトブルーのみはや大橋と並んで景観にも配慮したシンボル性の高いもので、大正区の新しいランドマークとなっています。



『大正区ホームページ』から転載



飛行場熱の高まりから大正 9 年逓信省に新設された航空局は、大正区船町の 231,000 m²(軍用地と市有地)を飛行場用地に内定した。大正 15 年から拡張整備にかかり昭和 3 年 3 月、389,400 m²の整備を終わり、昭和 4 年 4 月から公共の木津川飛行場として供用を開始した。

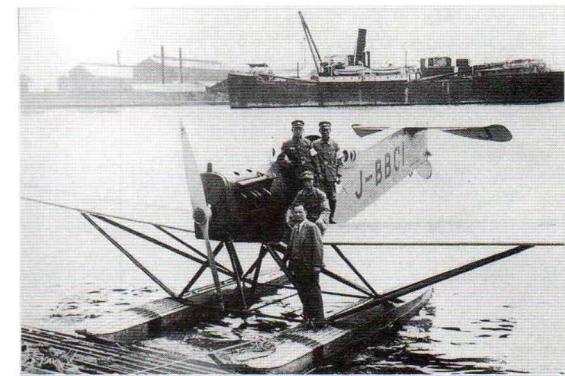
日本航空輸送会社が大阪と名古屋、福岡間に毎日 2 往復、日本航空輸送研究所が大阪と高松、白浜間に週末一往復運行、旅客、貨物、郵便の輸送にあたった。次々増便し昭和 13 年の年間発着は定期 5,107 回、不定期 3,676 回、旅客 10,124 人、取扱貨物 38,700 余 kg、郵便 97,700 余 kg で、国内でトップクラスにあった。



しかし都心から遠いうえ周辺工場の煙霧に悩まされ、さらに沖合に南港ができると飛行場としての機能が低下するとの航空局の申し入れで大阪市は昭和 6 年 9 月、南港に飛行場を内定し、南港計画を練り直した。南港につくられる国際空港(大和川国際飛行場計画といわれていた)の用地 590,000 m²が予定されていたが、その後海軍当局から「狭すぎる」とクレームがついたほか、離着陸に不適当との声もあり、そのうち戦局の激化で逓信省は昭和 17 年 5 月、同計画の白紙還元を決め、南港の国際航空化は幻に終わった。この間逓信省は、予備飛行場を昭和 14 年 1 月兵庫県伊丹市に開設、次第に国際飛行場として発展するにつれ、木津川飛行場は衰退した。

なお、木津川飛行場では陸上機が就航する以前に、大正 12 年 7 月から日本航空会社が川崎機械製作所から施設を譲り受け、水上機を大阪～別府間に就航させていた。

現在飛行場の面影はなく新木津川大橋の上り口に碑が建っている。



『懐かしい大正区の風景』から転載



『わがまち大正』から転載

株式会社中山製鋼所

大正 12 年木津川河口の埋立地に(株)中山悦治商店を設立。

昭和 9 年に(株)中山製鋼所に社名変更をした。現在も船町に本社と工場を有し、平成 14 年に高炉を休止した折の「大阪の火が消える」という新聞見出しある記憶に新しい。「微細粒熱延鋼板」により「大河内記念技術賞」を受賞したことは、鉄の未来を追い続ける姿勢の現われともいえる。

また、大正区内の最大の企業である。



『懐かしい大正区の風景』から転載

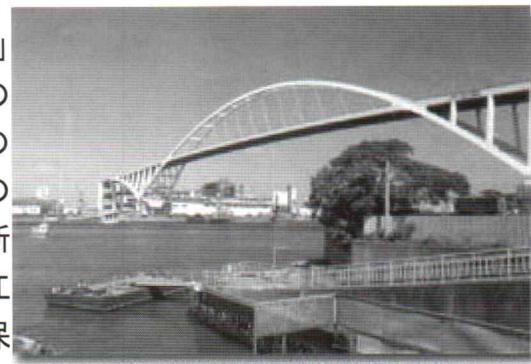


新木津川大橋

新木津川大橋は、大阪港一帯の「テクノポート大阪」計画のもとに文化、スポーツ、レクリエーション、居住のためのエリアと施設を盛り込んだ複合的な都市機能の拡充が図られ、臨港地区に環状道路網をつくり、物流の充実と周辺道路の混雑緩和を目的に架けられました。新木津川大橋は、木津川の河口に位置し、大正区と住之江区とを結ぶ橋で、河川内の航路(幅 150m、高さ 46m)確保のため、全長 2.4km におよんでいます。本橋は川を渡る主橋梁(長さ 495m 幅員 11.25m)と両岸のアプローチ橋で構成され、主橋梁の形式は経済性と施工性に加えて景観面も考慮してつくられました。大正区側のアプローチ部(長さ 880.96m 幅員 12.75m)は、用地の制約から 3 層ループ形式が採用されました。

現在、この形式としては日本最大で、大阪港を代表する橋の一つとなっており、平成 6 年に土木学会の「田中賞」を受賞しています。

本橋は、車道と歩道に分かれており、歩道部は人も自転車も利用できます。



(写真提供 (財)大阪市都市工学情報センター)

木津川渡船場(きづがわとせんじょう)

～カーフェリーボートから変身した渡船～

概要

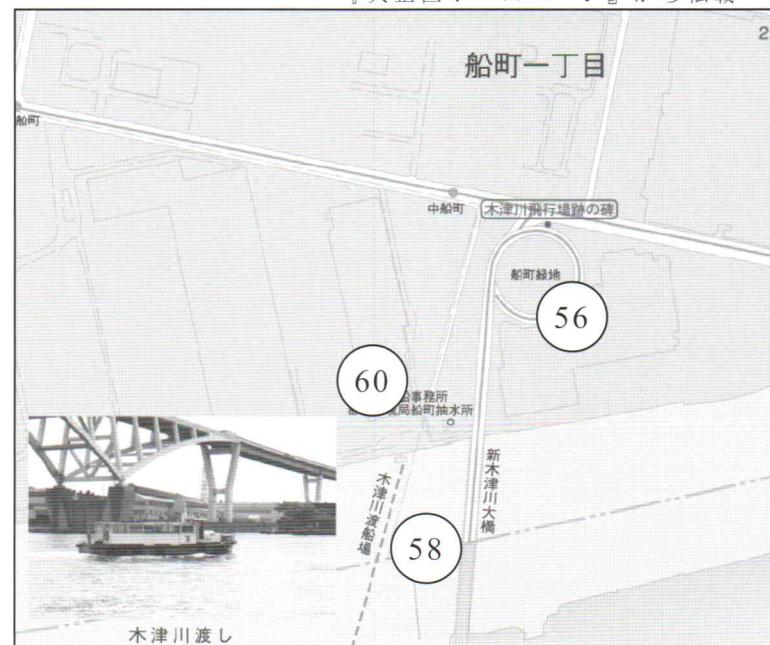
大正区船町 1 丁目と住之江区平林北 1 丁目を結んでいます(岸壁間 238m)。昭和 30 年からカーフェリーを運航し乗用車から大型トラックまで運搬し得る能力を持っていましたが、上流部に千本松大橋が開通し、今は人と自転車のみを運ぶ渡船となっています。大正区戦災復興事業によって、区内にあった木材関連施設を住吉区(現住之江区)平林へ移転することになり、これに伴い利用者の便に供するため渡船の運航を始めました。

水が綺麗になったためか、渡り鳥が飛来し、毎年 10 月から翌年 4 月にかけて魚をとる姿がみられます。

なお、大正区側の「船町(ふなまち)」の町名は難波宮(なにわのみや)贊美の歌「あり通ふ難波の宮は海近み海人をとめらが乗れる船見ゆ」(巻 6-1063)に由来しています。



『大正区ホームページ』から転載



船町渡船場(ふなまちとせんじょう)

～住宅地と工業地を結ぶ渡船～

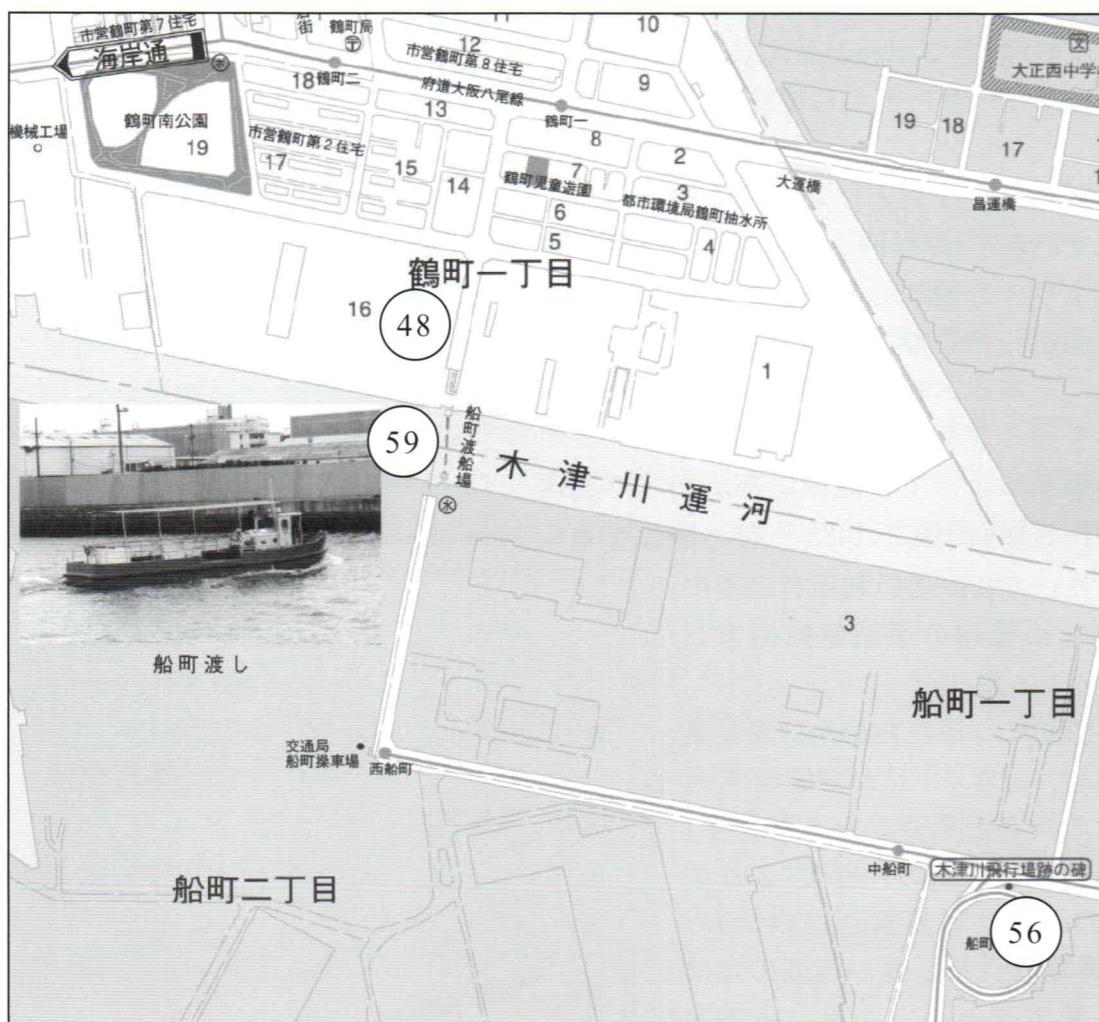
概要

船町渡船は、大正区鶴町1丁目と同区船町1丁目を結んでいます。(岸壁間 75m)。「木津川運河(きづがわうんが)」は対岸との距離が短いため、渡船の運航方法は他の渡船と違い、円を描いて戻ってくる航路をとっています。大阪港の第1次修築工事(明治30年～昭和3年)による埋立地として「町(ふくまち)」が造成されたのと合わせて、木津設されました。

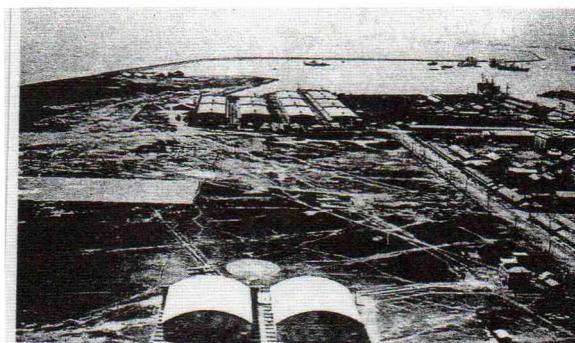


『大正区ホームページ』から転載

昭和初期には、渡船の北岸の「鶴町」には、市電鶴町車庫や外資系の自動車工場等があり、南岸の「船町」には伊丹空港の前身である木津川飛行場や造船所等がありました。

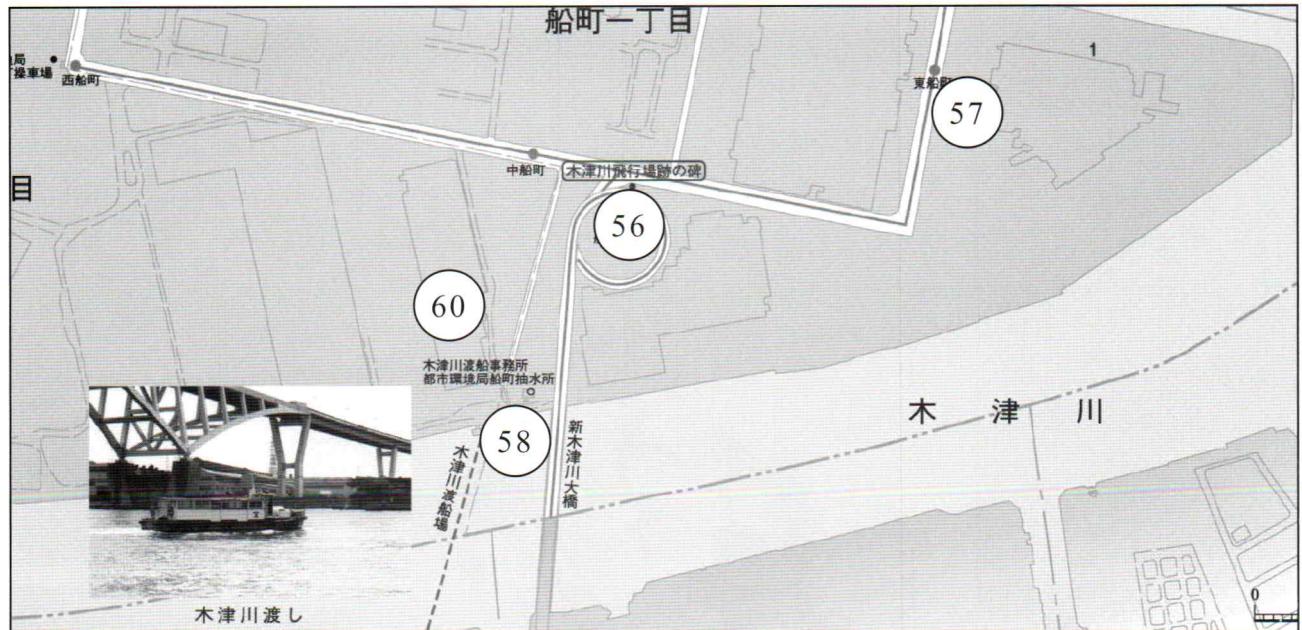


中船町のバス停から木津川渡船場へと向かうと、道路右側、中山製鋼所の一角にかまぼこ型の建物が見える。これが水上飛行機の格納庫だったものといわれている。



昭和4年ごろ

『わがまち大正』から転載



II. 大正区の基礎データ

1. 大正区の概要

① 概要

大正区は、昔、姫島（今の三軒家地域）と呼ばれていましたが、この島に港などの整備を行った中村勘助にちなんで、豊臣家より「勘助島」という名が与えられました。江戸時代には泉尾新田や恩加島新田などの町人請負新田が開発され、明治時代以降も大阪築港計画による鶴町や船町などの埋め立てが行われました。そして大正末期頃、現在の区域がほぼ確定しました。区の周りを流れる木津川は、江戸時代、大阪の経済を支える大動脈として諸国の船で賑わい、明治時代以降は紡績工場や造船所などがつぎつぎと建設され、阪神工業地帯の中核地域として発展しました。大阪市の第一次市域拡張時（明治30年）に市域に編入され、西区、港区を経て、昭和7年10月1日大正区が発足しました。この当時の市域はJR環状線内と大正区を含む港湾地域に限られ、面積も現在の1/4程度でした。戦前は、西日本を代表する木材市場もありましたが、戦後は48年間にわたる土地区画整理事業が平成6年に完了して、都市基盤が充実しました。

区の中心部には、区のシンボルである標高33mの港の見える丘「昭和山」を中心とした千島公園（11ha）があり、四季折々の花と緑に囲まれ、多くの小鳥のさえずりも聞こえ、春には区の花「つつじ」や桜が公園一帯に咲き誇ります。そのふもとには区総合庁舎・体育館・多目的グランド・コミュニティセンター・図書館などの公共施設が配置されています。公園南側の複合施設「アゼリア大正」は、音楽ホール・スポーツセンター・温水プールなどを備えています。区西部の北村地区には、総合医療施設、身体障害者・高齢者療護施設や知的障害者更生施設などが建設され、高齢者や障害者などに対応した医療・福祉ゾーンとなっています。また、隣接場所に、テニス場「マリンテニスパーク・北村」があり、全天候型コート25面とナイター設備が完備されています。高齢社会に向けた施設として、区内には在宅福祉・総合相談窓口の拠点としての「大正区ふれあい福祉センター」と3カ所の在宅サービスステーションも整い、在宅介護の支援に大きな役割を果たしています。

交通網は、JR「大正駅」は昭和36年に設置され、地下鉄「長堀鶴見緑地線」が平成9年に「大正駅」まで延伸されました。隣接区との連絡橋として長大橋の「千本松大橋」「新木津川大橋」「なみはや大橋」、さらに区内連絡橋として大正内港に架かる「千歳橋」が平成15年に完成し、スムーズな交通の循環が図られています。また、市内に8カ所ある渡船のうち7カ所が当区にあり「動く橋」として運航され、区内に愛され親しまれています。

区名は区の北端にある「大正橋」にちなんでいます。

② 大正区の花 「つつじ」

昭和62年の第13回区民まつりにおいて、区の花『つつじ』が制定されました。

制定にあたって、区民へ公募し、『つつじ』が区のシンボルともいえる昭和山一帯に咲き誇ることから、選定されました。その他の応募のなかには、「桜」や、大正区になじみの深い「櫨(はぜ)」・「綿」などもありました。

花言葉：愛の喜び（赤）、初恋（白）、節制（全体）



2. 大正区の概況

① 大正区の地勢

位置： 大阪市の南西部に位置し、大阪湾に面し、区の三方を木津川（一級河川）、尻無川（一級河川）、岩崎運河に囲まれている。

面積： 9.43km² （市内 9 位）

参考： 大正区役所：大正区千島 2-7-95

（東経・135 度 28 分 31.9 秒 北緯・34 度 38 分 49.1 秒）

② 大正区の河川

		延長	面積	始点	終点
木津川	一級河川	8,657m	1,462,035 m ²	土佐堀川からの分派点	大阪港
尻無川	一級河川	3,919m	419,444 m ²	木津川からの分派点	大阪港
三軒家川		865m	29,405 m ²	三軒家東 3 丁目	木津川合流点

③ 大正区の運河

運河名	開発者	区間	延長	竣工年	
千歳	大阪港修築事業	尻無川～木津川運河	1,900m	大正 3 年	廃止
木津川	大阪港修築事業	尻無川～木津川	1,832m	大正 5 年	
岩崎	河川改修事業	木津川～尻無川	510m	大正 9 年	
大正	千島・岩田・大阪木材市場 (土地会社)	木津川～尻無川	1,980m	大正 12 年	廃止

④ 大正区の橋 合計：14 橋

名称	長さ (m)	幅員 (m)	完成時期	備考
大正橋	79.96	41.0	大正 4 年 8 月	昭和 49 年 3 月架替
岩崎橋	75.6	19.3	大正 9 年 6 月	
岩松橋	66.5	35.0	大正 11 年 7 月	平成 9 年 3 月拡幅
大浪橋	81.5	21.7	昭和 12 年 3 月	
千本松大橋	323.5	9.75	昭和 48 年 10 月	
木津川橋	770.0	38.1	昭和 45 年 3 月	(国道 43 号線)
新木津川大橋	495.0	11.25	平成 6 年 9 月	
なみはや大橋	580.0	11.0	平成 7 年 2 月	
大運橋	57.0	18.0	大正 9 年 12 月	昭和 33 年 3 月架替
大船橋	113.30	15.56	昭和 11 年 5 月	昭和 53 年 3 月架替
南福橋	35.2	14.0	昭和 38 年 3 月	平成 3 年 3 月架替
西福橋	38.5	10.0	昭和 38 年 3 月	平成 7 年 10 月架替
千歳橋	365.0	10.0	平成 15 年 4 月	
尻無川橋	738.0	35.7	昭和 45 年 3 月	(国道 43 号線)

⑤ 大正内港

昭和 22 年 6 月に策定された「復興計画」により、内港化の方針が打ち出され、昭和 22 年から昭和 31 年に至る 10 カ年計画により大正内港化工事が進められた。

大工事は、尻無川左岸一帯、千歳堀東岸および西岸の一部を拡幅、しゅんせつして約 80 万 m² (在来運河時期を含む計画水面積) の泊地を造成、新水際線にふ頭施設を建設し、主として内向貿易港区に整備した。これによって廃止される在来貯木池と木材関連工場を、住吉区(現住之江区)平林町に建設する貯木場に移転した。内港化工事で発生する土砂は、在来ふ頭区である鶴町、福町のほか、大正本土の臨港地区とその背後地に送って全面盛土をし、区画整理を行って地区全体を災害のない近代市街に整備するものであった。

工事は、当初大阪港修築事業で進められたが、ジェーン台風(昭和 25 年 9 月)後、防災事業に切り替えられた。昭和 38 年度で防災事業、土地区画整理事業ともに国の補助が打ち切りとなつたので残りの工事は保留地処分金を財源とする港湾地区区画整理事業として続けられた。

大正内港は鉄鋼や雑貨を扱う西日本の国内貿易基地として昭和 41 年から機能を開始し、平成 16 年度では、年間取扱高は 125 万トン、大正区全体の港湾施設では 371 万トンに達し、大阪港全体の内貿取扱高の 6%余りを占めている。

⑥ 大正区の主な道路

	区間	区内道路延長	幅員
国道 43 号線 ・阪神高速 17 号西大阪線	三軒家東～泉尾	約 1.6 km	約 15m
府道大阪八尾線【大正通】	鶴町～岩松橋	約 5.9 km	約 30～40m
府道大阪港八尾線 [鶴町南公園以西海岸通]	千本橋～なみはや橋	約 3.4 km	約 15m
市道浪速鶴町線【大浪通】	大浪橋～鶴町	約 3.8 km	約 22～30m
市道難波境川線【千日前通】	大正橋～岩崎橋	約 0.4 km	約 50m

※ 道路幅員は標準的な幅員を表示している

⑦ 大正区の公園

	大阪市営公園面積			住民 1 人※ あたりの面積 (m ²)		行政面積に 対する公園面積 (%)
	数	面積 (m ²)	順位	面積 (m ²)	順位	
大正区	23	295,042	11 位	3.97	7 位	3.13
市全体	951	9,189,010	-	3.00	-	3.56

※ 平成 17 年 3 月 31 日現在

※ 住民 1 人あたりの面積は平成 17 年 2 月 1 日現在の大坂市計画調整局調べ
「大阪市の推計人口」(大正区 74,268 人) から算出

大阪市営公園：大正区内 23ヶ所

三軒家公園	泉尾公園	北村南公園	平尾公園	鶴町北公園
大正橋公園	泉尾 2 公園	千島公園	平尾亥開公園	鶴町中央公園
岩崎橋公園	泉尾浜公園	南泉尾公園	小林南公園	鶴町南公園
泉尾上公園	北村公園	泉尾東公園	南恩加島公園	
泉尾中公園	千林橋公園	小林公園	南恩加島西公園	

⑧ 大正区の防災

防潮堤

防潮堤総延長	25,836m
高さ	5,05～7,00m
防潮扉数	103 (公道11・私道92)

室戸台風(昭和9年9月21日)後に築造した堤防に加え、ジェーン台風(昭和25年9月3日)以降、高潮防御対策事業が進み、昭和34年3月に完成(昭和36年の第2室戸台風で実証済み)

水門

尻無川水門	昭和45年11月完成	アーチ型ゲート
木津川水門	扉体重量 530t	扉体閉時間 30分
三軒家水門	昭和43年7月完成	走行式複葉ローラーゲート
	扉体重量 83t	扉体閉時間 20分

地盤高については地下水のくみ上げ規制がかかった昭和37年以降は、例えば泉尾での沈下量が数cmにしか過ぎない。

⑨ 大正区の防犯・防火

	大正区	市内順位	市全体
刑法犯認知件数	1,856件	23位	106,729件
火災発生件数	32件	22位	1,407件
救急発生件数	4,588件	22位	202,468件

平成17年度実績

⑩ 大正区の土地利用状況

(平成12年度土地利用現況調査、単位：100m²)

	総面積	建物用途 合計	建物用途							
			住居 施設	商業 施設	文教 施設	医療厚生 施設	工業 施設	供給処理 施設	運輸通信 施設	
大正区	94,651 (9位)	48,685 (11位)	10,796 (18位)	5,232 (23位)	3,274 (19位)	464 (21位)	21,276 (2位)	719 (12位)	6,040 (5位)	
市全体	2,208,565	1,186,857	469,588	211,312	123,339	19,473	171,444	37,023	129,684	

	建物用途		非建物用途 合計							
	官公署 施設	その他 施設		道路	軌道敷	公園 緑地	農地	河川 水面	青空 駐車場	空き地
大正区	595 (10位)	289 (19位)	45,966 (8位)	14,929 (16位)	58 (23位)	3,508 (13位)	9 (18位)	17,016 (4位)	2,550 (16位)	7,896 (6位)
市全体	13,589	11,405	1,021,708	429,376	28,872	120,014	14,993	185,541	94,389	148,523

3. 大正区の環境整備

① 区画整理事業

名称：大正地区復興土地区画整理事業

事業期間：昭和 21 年～平成 6 年（約 48 年）

工区名	位 置	面 積	備 考
難波島工区	難波島付近	15.2ha	
三軒家工区	三軒家町付近	60.1ha	
南部工区	南部(鶴町、小林町付近)	431.0ha	(住之江区を含めると 636.9ha)
合 計		506.3ha	

② 住宅地区改良事業

低層密集木造住宅地域に、新たに中高層住宅を建設して、地域の生活環境向上に貢献した。

	区域面積(m ²)	建設戸数	指定年度	事業終了年度
鶴町	25,960	100	昭和 39 年度	昭和 39 年度
小林	75,666	692	昭和 44 年度	昭和 53 年度
南恩加島	6,373	49	昭和 50 年度	昭和 53 年度
泉尾	5,665	25	昭和 57 年度	昭和 62 年度
合計	113,664	866	—	—

③ 千島計画

昭和 44 年 9 月、大阪市が大正地区南部工区で施行している土地区画整理事業の一環として発表した構想。

計画区域は、大正運河、および貯木池が広がっていた千島町一帯 17.7ha。

基本設計は、計画区域内に「港の見える丘」を配置し、その周囲に区役所・区民ホールなどを収容する区合同庁舎、体育館、サッカー競技ができるグラウンド、住宅・都市整備公団の高層住宅 5 棟・2,272 戸、大正区コミュニティセンターを整備するものであった。

地下鉄工事の残土など、約 170 万 m³ (ダンプカー 57 万台分) の土砂を盛り上げる人工山造成工事は昭和 44 年度から開始、昭和 45 年 11 月には山の中腹で植樹式が行われ、「昭和山」と命名、本格的な造園工事が進められた。この「昭和山(33m)」は、大阪市では、鶴見区鶴見緑地の鶴見新山(標高 40m)に次ぐ高い山。

区合同庁舎は昭和 47 年 11 月に、昭和山を中心とした千島公園は昭和 51 年 4 月に完成して千島計画が完了、住宅・都市整備公団の千島市街地住宅も、昭和 52 年 12 月までに全棟が完成。

千島計画はこうして、職住近接・防災拠点の構想を取り入れながら、花と緑の「昭和山」を巡る、区役所・レクリエーション施設・住宅の総合的なセンターを形成した

昭和 43 年 9 月	大正運河埋立
昭和 44 年 9 月	千島計画構想発表
昭和 45 年 11 月	植樹祭 昭和山命名
昭和 47 年 11 月	区総合庁舎完成
昭和 51 年 4 月	公園完成 千島計画完了
昭和 52 年 12 月	公団住宅完成

住宅・都市整備公団千島市街地住宅

敷地	標高	事業費	計画人口
6 ha	7 m	約 103 億円	7,300 人

④ 北村計画

土地区画整理事業との合併施行による小林住宅地区改良事業の完成に伴って、北村 3 丁目に 9.5ha の空地を確保し、この用地を利用して、昭和 55 年に、住宅、福祉・医療、スポーツ・グリーンゾーンの総合整備構想が浮上、土地区画整理審議会と「21 世紀まちづくり計画推進会議(大正区協力会内)」を中心とする区民運動の柱として、盛り上がりを見せた。

そしてこのうち、市住宅供給公社が建設する住宅ゾーン、特別養護老人ホームと済生会泉尾病院の福祉・医療ゾーンが昭和 63 年 9 月までに完成、残る 6.2ha のうち 5.2ha については、次の施設を整備した。

テニスコート 25 面(うち、ナイター照明設置コート 15 面)

クラブハウス 1 棟 駐車場 140 台収容 ジョギングロード

工事は平成 2 年 9 月から着手、平成 3 年 4 月 26 日に「マリンテニスパーク・北村」としてオープンした。

4. 人口・交通体系

① 大正区の人口

平成 17 年 10 月国勢調査時データ(確定値)

総 数 73,207 人 (市内 18 位) 世帯数 30,924 世帯 (市内 21 位)
男 36,144 人 (市内 18 位)
女 37,063 人 (市内 19 位)

人口の推移

	総数	男	女	世帯数
昭和 7	110,500	61,300	49,200	25,200
10	131,037	74,349	56,688	28,169
15	137,931	76,883	61,048	30,183
20	27,637	15,582	12,055	8,542
25	59,784	32,078	27,706	15,176
30	78,012	41,200	36,812	18,006
35	93,377	50,024	43,353	22,985
40	95,509	50,198	45,311	25,528

	総数	男	女	世帯数
昭和 45	88,954	46,085	42,869	25,343
50	88,485	45,163	43,322	27,077
55	84,041	42,524	41,517	27,899
60	82,330	41,585	40,745	28,517
平成 2	81,272	40,953	40,319	29,809
7	78,372	39,303	39,069	30,432
12	75,042	37,414	37,628	30,943
17	73,207	36,144	37,063	30,924

65 歳以上の高齢者 15,121 人(H17.6.1) 人口比率 20.6%(市内 9 位)(市全体の比率 19.6%)

100 歳以上 11 人 (男性 2 人 女性 9 人)

最高齢 106 歳 (女性)

② 大正区の交通

鉄道：JR・大正駅 乗車人数 23,105 人/日(平成 16 年度. 環状線 19 駅中 10 位)

発着本数 環状線外回り 172 本 内回り 174 本

地下鉄・大正駅 乗車 4,955 人/日 降車 3,767 人/日(平成 10 年度)

発着本数 183 本/日(平日)

バス：市バス 23 路線(うち赤バス 2 路線) 乗降客数 63,420 人/日

参考 バス停ごとの発着本数(平日)

大正橋 575 本/日 北恩加島 105 本/日

大正区役所前 523 本/日 鶴町 4 丁目 437 本/日

渡船 :

渡船場	船着場	船着場	岸壁間 (m)	運行 回数	一日 平均利用
甚兵衛 (じんべえ)	大正区泉尾七丁目	港区福崎一丁目	94	162	1,818 人
千歳 (ちとせ)	大正区鶴町三丁目	大正区北恩加島二丁目	371	92	996 人
落合上 (おちあいかみ)	大正区千島一丁目	西成区北津守四丁目	100	136	683 人
落合下 (おちあいしも)	大正区平尾一丁目	西成区津守二丁目	138	116	453 人
千本松 (せんぼんまつ)	大正区南恩加島一丁目	西成区南津守二丁目	230	138	1,310 人
船町 (ふなまち)	大正区鶴町一丁目	大正区船町一丁目	75	136	288 人
木津川 (きづがわ)	大正区船町一丁目	住之江区平林北一丁目	238	34	204 人

※一日平均利用は大阪市統計書平成17年度版のデータ

木津川は港湾局、その他は建設局渡船事務所管理

5. 大正区の産業

① 大正区の産業大分類別事業所・従業者数

産業大分類別事業所・就業者

(平成13年10月1日現在大阪市統計書から)

(単位 : 件) (単位 : 人)

参考 市全体

事業大分類	事業所数		従業者数		事業所	従業者
	%	数	%	数		
◆ 農業		0		0		%
◆ 林業		0		0	(-)	(-)
◆ 漁業		0		0	(-)	(-)
◆ 鉱業		0		0	(-)	(-)
◆ 建設業	(7.4)	336	(11.5)	4,126	(5.1)	(6.6)
◆ 製造業	(14.9)	675	(24.1)	8,653	(12.8)	(14.8)
◆ 電気・ガス・熱供給・水道業	(-)	3	(0.1)	22	(-)	(0.6)
◆ 運輸・通信業	(6.7)	301	(12.8)	4,582	(3.0)	(6.5)
◆ 卸売・小売業・飲食店	(44.9)	2,027	(25.8)	9,266	(45.9)	(34.7)
◆ 金融・保険業	(0.9)	41	(1.1)	408	(1.6)	(3.9)
◆ 不動産業	(4.1)	185	(1.6)	558	(6.2)	(2.6)
◆ サービス業	(21.0)	947	(21.9)	7,850	(25.2)	(28.2)
◆ 公務(他に分類されないもの)	(0.1)	3	(1.2)	447	(0.1)	(1.9)
総 数	(100.0)	4,518	(100.0)	35,912	(100.0)	(100.0)

(2) 大正区の工業 工業統計調査：大阪市における工業の概況

区名産業分類 (従業者4人以上の事業所分類別概況)	事業所数	従業者数	製造品等出荷額 % 万円	市全体 %
食料品製造業	3	319	(5.6) 1,260,609	5.9
飲料・たばこ・飼料製造業	-	-	-	0.9
繊維工業(衣服、その他の繊維製品を除く)	-	-	-	0.4
衣服・その他の繊維製品製造業	1	9	X	2.2
木材・木製品製造業(家具を除く)	8	69	(0.5) 110,332	0.7
家具・装備品製造業	12	96	(0.5) 105,584	0.7
パルプ・紙・紙加工品製造業	2	17	X	2.8
印刷・同関連業	8	119	(0.9) 198,030	10.5
化学工業	8	366	(7.7) 1,726,156	26.7
石油製品・石炭製品製造業	1	4	X	0.2
プラスチック製品製造業(別掲を除く)	5	133	(0.5) 114,418	3.8
ゴム製品製造業	2	31	X	0.9
なめし革・同製品・毛皮製造業	-	-	-	0.8
窯業・土石製品製造業	4	96	(1.3) 281,749	1.2
鉄鋼業	31	1,975	(63.1) 14,126,077	8.9
非鉄金属製造業	3	23	(0.1) 22,193	2.7
金属製品製造業	57	870	(9.6) 2,144,511	9.4
一般機械器具製造業	48	681	(5.0) 1,120,697	10.0
電気機械器具製造業	10	353	(3.2) 725,953	4.2
情報通信機械器具製造業	-	-	-	1.1
電子部品・デバイス製造業	-	-	-	0.6
輸送用機械器具製造業	8	80	(0.4) 86,189	3.1
精密機械器具製造業	2	20	X	0.9
その他の製造業	9	123	(0.8) 186,678	1.6
合計	(14位) 222	(13位) 5,384	(8位) 22,376,205	-

(注)Xは未公表分で、合計額には含まれる。

(3) 大正区の商業

卸売業：商業統計調査(分類別概況) (単位：金額1万円)

分類	総数	従業者数	年間商品販売額
各種商品卸売業	2	3	X
繊維品卸売業(衣服、身の回り品を除く)	2	23	X
衣服・身の回り品卸売業	8	64	192,046
農畜産物・水産物卸売業	10	78	468,484
食料・飲料卸売業	18	170	3,076,211
建築材料卸売業	42	228	803,998
化学製品卸売業	9	43	906,818
鉱物・金属材料卸売業	54	441	3,657,362
再生資源卸売業	34	228	2,341,548
一般機械器具卸売業	35	196	843,266
自動車卸売業	10	114	913,030
電気機械器具卸売業	5	20	97,800
その他の機械器具卸売業	12	58	125,671
家具・建具・じゅう器等卸売業	13	58	436,269
医薬品・化粧品等卸売業	5	42	857,111
他に分類されない卸売業	29	149	374,526
卸売業合計	288	1,915	15,224,206
市内順位	22位	23位	20位

(注)Xは未公表分で、合計額には含まれる。

小売業：商業統計調査（産業小分類別概況）

(単位：金額 1 万円)

分類	店数	従業者数	年間商品販売額
各種商品小売業	2	132	X
百貨店、総合スーパー	1	129	X
その他の各種商品小売業（従業者が當時 50 人未満のもの）	1	3	X
織物・衣服・身の回り品小売業	121	342	323,073
呉服・服地・寝具小売業	12	36	34,338
男子服小売業	22	59	99,019
婦人・子供服小売業	49	104	66,757
靴・履物小売業	12	35	34,076
その他の織物・衣服・身の回り品小売業	26	108	88,883
飲食料品小売業	350	2,055	3,109,954
各種飲食料品小売業	18	524	1,256,944
酒小売業	52	175	301,907
食肉小売業	19	58	86,797
鮮魚小売業	14	33	26,276
野菜・果実小売業	15	34	26,663
菓子・パン小売業	62	239	116,997
米穀類小売業	29	66	59,193
その他の飲食料品小売業	141	926	1,235,177
自動車・自転車小売業	36	101	121,605
自動車小売業	24	82	112,629
自転車小売業	12	19	8,976
家具・じゅう器・機械器具小売業	79	200	210,803
家具・建具・畳小売業	15	36	27,567
機械器具小売業	41	110	138,180
その他のじゅう器小売業	23	54	45,056
その他小売業	255	962	X
医薬品・化粧品小売業	53	179	316,156
農耕用品小売業	1	2	X
燃料小売業	23	131	492,870
書籍・文房具小売業	47	338	249,363
スポーツ用品・がん具・娯楽用品・楽器小売業	14	31	20,817
写真機・写真材料小売業	5	14	6,970
時計・眼鏡・光学機械小売業	16	39	31,240
他に分類されない小売業	96	228	270,187
小売業	843	3,792	5,380,776
市内順位	20 位	23 位	23 位

(注)X は未公表分で、合計額には含まれる。

6. 教育

※高等学校から小学校の人数は平成18年度学校現況調査(平成18年5月1日現在)

① 高等学校 : 3校

名称		1年	2年	3年	総数
市立	泉尾工業	335	246	244	825
府立	泉尾	232	184	159	575
府立	大正	239	211	201	651
合計		806	641	604	2,051

② 中学校 : 4校(市立)

名称	1年	2年	3年	総数
大正東	205	176	195	576
大正中央	112	123	112	347
大正西	126	119	163	408
大正北	132	140	127	399
合計	575	558	597	1,730

③ 小学校 : 11校(市立)

名称	1年	2年	3年	4年	5年	6年	総数
三軒家西	29	23	32	27	29	27	167
泉尾東	64	94	61	72	81	65	437
中泉尾	72	74	68	56	71	74	415
北恩加島	52	62	78	55	82	51	380
南恩加島	77	81	69	71	60	55	413
鶴町	35	45	57	51	50	56	294
泉尾北	59	53	49	54	66	54	335
平尾	49	69	70	74	64	56	382
三軒家東	66	72	58	70	61	56	383
小林	53	53	58	54	58	52	328
鶴浜	31	28	32	25	27	23	166
合計	587	654	632	609	649	569	3,700

④ 幼稚園 : 7ヶ所

※人数は平成17年度学校基本調査

大阪市立 : 2 (人数 161人)

三軒家西	泉尾
------	----

私立 : 5 (人数 454人)

昭和	昭光	北恩加島
南恩加島	鶴町	

⑤ 保育所等 : 13ヶ所

※人数は平成17年度学校基本調査

大阪市立 : 7施設 (人数 590人)

大正南	大浪	大正
大正北	千島	鶴町
北恩加島		

私立 : 5施設 (人数 786人)

鶴町学園	ファミリー保育園
めぐみ保育園	ファミリー保育園ジュニア
	ファミリー保育園チシマ

育児施設 : 1施設 泉尾ベビーセンター

7. 医療・福祉等

① 大正区の医療機関

病院	5
診療所	70
歯科診療所	44
歯科技工所	10
助産所	8
施術所	107

② 大正区の福祉施設

泉尾特別養護老人ホーム「大正園」	身体障害者療護施設「北村園」
泉尾特別養護老人ホーム「第2大正園」	知的障害者更生施設「ふくろうの杜」
特別養護老人ホーム「ビーナスホーム千島園」	介護老人保健施設「エバーグリーン」
介護老人保健施設「つるまち」	

平成18年4月現在

③ 大正区の地域施設

三軒家西会館	アクティブ中泉尾会館	平尾公園会館
三軒家東福祉会館	北恩加島会館	南恩加島会館
三軒家東第二福祉会館	北恩加島泉尾浜公園集会所	南恩加島公園集会所
泉尾東福祉会館	小林会館	鶴町福祉会館
泉尾北会館	平尾会館	鶴町第二福祉会館

8. その他

① 大正区の史跡スポット

御船蔵跡(岩崎橋公園)	難波島(三軒家東2丁目)
木津川口遠見番所跡(大正橋公園)	鶴町(鶴町中央公園)
近代紡績工業発祥の地(大阪紡績)(三軒家公園)	尻無川櫨(はぜ)堤跡(泉尾浜公園)
三軒家(三軒家公園)	木津川飛行場(新木津川大橋北詰)
尻無川(泉尾2公園)	江戸時代の大正区の風景(コミュニティセンター前)
泉尾新田(泉尾公園)	平尾亥開公園と大阪俘虜収容所(平尾亥開公園)
北恩加島(北村公園)	栗本鐵工所発祥の地(泉尾東公園)
昭和山(千島公園)	千歳橋の碑(千歳橋南詰)
小林(小林公園)	十六地蔵記念碑(南恩加島小学校)
平尾(平尾公園)	材木橋嘉平次橋親柱(大正中央中学校)
南恩加島(南恩加島公園)	計21ヶ所

② 大正区の地名 (財)大阪市コミュニティ協会ホームページから

三軒家(旧三軒家村) : かつて木津川尻の小島であったこの地を、木津村の中村勘助が開発しました。その当時に、三軒の民家が建てられたからだといわれています。

泉尾(泉尾新田) : この地は、和泉国大鳥郡踞尾村の北村六右衛門が開墾しました。開発者の北村六右衛門の国名(和泉)と村名(踞尾)から一文字づつを採り命名したといわれています。

北村(泉尾新田) : 泉尾新田の開発者である北村六右衛門の苗字から命名したものといわれています。

千島(千島新田) : 千島新田は、東成郡千林村(現旭区)の岡島嘉平次により、明和5年(1786年)から順次開発されました。地名は千林村の「千」と、姓の岡島の「島」をつなぎ合わせて「千島新田」と命名されたことに由来しています。

小林(小林新田・岡田新田) : 東成郡千林村の岡島嘉平次が開墾した小林新田から命名され、小林は千林村から一文字採った呼称であることに由来しています。

平尾(平尾新田) : 大阪江戸堀の平尾与左衛門が開拓しました。与左衛門の姓をとって平尾新田と命名されたといわれています。

南恩加島(南恩加島新田) : 南恩加島新田は、2代・3代岡島嘉平次によって開墾され、恩加島新田と称しました。この名称は名前の岡島を恩加島と換用したものですが、開墾者の恩を忘れぬようにしたいという意味もあったようです。

北恩加島(北恩加島新田) : 恩加島新田を2分したときに、南恩加島と北恩加島に分けられました。

鶴町・船町・福町 : 「鶴町」は万葉集卷六の田辺福麻呂がよんだ「潮干れば葦辺に騒く白鶴(あしたづ)の妻よぶ声は宮もとどろに」の鶴と、「船町」は同じく「あり通う難波の宮は海近み海女(あま)娘子(をとめ)らが乗れる船見ゆ」の船と、「福町」は詠者の名前からとったものです。

(4) 大正区の高層建築物

31m を超える建物・・28棟 (平成 18 年 6 月現在)

最も高い建築物・・48m(キングスクエア ヴィルジア大阪)

最高階数・・15 階(6 棟)

(5) 大正区の映画ロケ地

映画名	俳優	制作	ロケ地
「男はつらいよ」第 27 作 浪花の恋の寅次郎	松坂慶子・渥美清	平成 5 年(1993 年)	尻無川
「緋牡丹博徒」第 4 作 二代目襲名	藤純子・天知茂	昭和 44 年(1969 年)	尻無川
「君の名は」	岸恵子	昭和 28 年(1953 年)	大正橋
「三百六十五夜」	山根寿子・佐分利信	昭和 23 年(1948 年)	大正橋
「顔」	藤山直美	平成 12 年(2000 年)	大正橋
「ブラックレイン」	松田優作・高倉健 マイケルダグラス	平成元年(1989 年)	船町
「仁義なき戦い」	高倉健・松方弘樹	昭和 48 年～ (1973 年～)	泉尾
「ひばり十八番お嬢吉三」	美空ひばり	昭和 35 年(1960 年)	小林

区の一日	出生 1.60 人	死亡 2.11 人
婚姻 1.20 組	離婚 0.58 組	異動人口(発生件数) 17.08 件
水道(使用水量) 27.625 m ³	普通ごみ 43.87 トン	図書館(貸出冊数) 579.9 冊
市バス(乗降客数) 63,420 人	J R 大正駅(乗車人員) 23,105 人	犯罪(少年犯罪を除く) 5.08 件
交通事故(発生件数) 1.03 件	救急(出動件数) 12.57 件	火災(発生件数) 0.088 件

平成 17 年度「大阪市統計書」より

III. 大正区の歴史概要

大正区の歴史と言っても、大阪市への編入は明治 30 年(1897 年)、区としては昭和 7 年(1932 年)に港区から分離独立した区である。しかし、大正区の土地は難波潟に位置し、往古より日本の歴史の表舞台に極めて近く、主に豊臣時代以降、歴史の表舞台に登場してくる。

1. 大坂本願寺

浄土真宗の蓮如が明応 5 年(1496 年)に東成郡生玉荘内鳴森に御坊を建立した。その時の書状の中の「大坂」の地名が歴史上の初見である。当時本願寺の本拠は山科にあったが、現在の大坂城の地に新たな拠点を設けたのは炯眼であった。天文 2 年(1533 年)には大坂本願寺となり、周囲は堀がめぐらされ城郭のような寺内町であったという。元亀元年(1570 年)に織田信長は一向宗の総本山の本願寺の退去を宗主頼如に求めたが、これを本願寺が断った。これから天正 8 年(1580 年)の本願寺退去までいわゆる石山合戦が続いた。その中で天正 4 年(1576 年)毛利水軍を主力とする一向宗門徒が木津川河口を守る織田方の水軍を撃破し、本願寺への兵糧米の搬入を果たしている。しかし信長は 2 年後九鬼嘉隆らに命じて鉄板張りの大型軍船「大安宅船」(6 艘、一艘につき大砲 3 門、兵員 300 人)を建造させ、海上封鎖を行い、木津川河口で毛利水軍 600 艘を壊滅させ、この結果本願寺の大坂退去につながった。

この木津川河口の海戦の場所が現在の大正区の場所であったことが推定される。

2. 豊臣時代

天正 11 年(1583 年)に大坂城が建設され始め、本丸は天正 13 年、惣構堀は慶長元年(1596 年)完成。天守閣は 5 層であった。惣構堀は、西は東横堀川、北は大川、南は空堀、東は平野川であった。

元和元年(1615 年)大坂夏の陣により豊臣家は滅亡。現在の大坂城は豊臣のそれを盛り土で完全に覆い、新たに堀を作ったもので徳川秀忠の命により幕府の威信をかけて作られ、秀吉のそれよりも規模も凌駕する。船場の町もこのときに造られた。

大正区史や西成郡史によれば慶長 15 年(1610 年)中村(木津)勘助が木津川尻姫島の豊臣家の軍船係船所建設に従事し、さらに堤防を築いて新田を開発したので豊臣家より「勘助島」の名を与えられたとある。(ただし、旧市史によれば開発時期は上の八坂神社の勧請時期から正保 4 年(1647 年)説を採っているが、新市史では西成郡史の紹介とともに、元和元年(1615 年)以降、船場の開発が進み、それにあわせ元和 5 年(1619 年)頃の勘助島東側の三軒屋地子(三軒家町)の成立も記している。また当時の絵図も紹介している。)

大阪濫觴書(元禄 12 年刊)では元和 5 年(1619 年)には上難波村や西高津村、九条村と並んで「勘助島」にも町家が立ち並んでいたことが判る。また慶長 10 年(1605 年)の摂津国絵図にも勘助島と見られる記述がある。延宝 3 年(1675 年)刊の大坂案内書である「蘆分船」に言う「三軒屋」は勘助島のことである。

また、勘助は寛永 7 年(1630 年)には木津川を浚渫し、幕府から入津料の特権を得ている。

3. 德川時代

①勘助島

勘助島は江戸時代になっても一層重要性を増した。船奉行である「大坂船手」は当初 1 人(小浜民部光隆が元和 6 年(1620 年)に初任)で屋敷は九条島の北端にあったが、寛文 5 年(1665 年)2 人となり、その 1 人(大番組頭高林直重)は勘助島に屋敷を構え、船番所も勘助島に設けられた。元禄年間には番所の西側に「御船蔵」が設けられた。その後安治川と同じように宝永 5 年(1708 年)に「木津川口遠見番所」が設けられ、出入り船舶の便宜と検査を受け持ち幕末まで続いた。この間、河村瑞賢による九条島開削工事(1684 年)や難波島開削工事(1699 年)などの河川整備が行われ、天下の台所としての大坂の基盤整備となった。また貞享元年(1684 年)には大川の改修による替地が当地に与えられ船津町、川本町、臼井町となり大坂三郷の天満組に属した。今の三軒家東 1 丁目に当る。

②木津川

大阪歴史博物館所蔵の華麗な「川口遊里図屏風」はこの当時の三軒家の繁栄ぶりを見事に表しているが、明暦 3 年(1657 年)に幕府の集傭政策で新町に統合された。しかし木津川(当初は船場表川と呼ばれた)が北前船などの玄関口として物資の大動脈であったことは徳川時代を通じて変わらず、その水路確保のため「川浚え」を幾度となく実施した。(宝永、享保、天明、天保など)

木津川は特に北前船や渡海船を中心とした川筋で、上荷船の浜が 24 あったとされ、そのうち大正区には勘助島上の浜、同中の浜、同下の浜、今木浜、三軒家浜、難波島浜、瀬の浜、落合浜などがあったが、勘助島には薩摩や日向の船が、難波島には北前船が着船していた記録がある。木津川の様子はシーポルトの「江戸参府紀行」にも紹介されている。

③朝鮮通信使

朝鮮通信使や琉球使節も木津川などを遡っていることが数は少ないものの難波島や勘助島などの名称が記録されており明らかである。朝鮮通信使は將軍の代替わりのときの慶賀使で、前半は伝法口を利用していたが、後半は木津川口を利用するようになり、特に尻無川河口に大船を停泊させ、川御座船に乗り換え、途中本願寺を宿舎とし、京都まで船で行ったようで、群集が堤防を埋め尽くした記録がある。宝暦の通信使の随行員(金漢重)の墓が西区九条の竹林寺にあるとともに松島公園の一画に「朝鮮通信使の碑」もある。

④河口風景

木津川(尻無川も含めて)は「鯨(はぜ)つり」で有名(摂津名所図会等)で、落語(「骨つり」)の舞台にもなっている。「櫛(はぜ)」の紅葉で有名だった尻無川や木津川の河口風景と江戸時代の難波の港の絵図が大正区コミュニティ協会前の広場に平成 17 年末設置された。ところで、嘉永 4 年(1851 年)発行の「浪華の賑ひ」によれば、木津川口を「此所は浪花の津の湊口にして諸国の海舶出入の要津にかかるゆえに、廻舟の便利よからしめんが為、去る天保 3 年(1832 年)・・・870 間(1500m 余)の石塘(石堤)を築き・・・實に万代不朽にして浪花繁栄の基・・・又此堤は上に數株の松を植えつらねり、故

に俗に木津川の千本松という。洋々たる滄海に築出せし松原は彼の名に高き天橋立、三保の松原なども外ならずと覚ゆ」と挿絵入りで紹介されている。

⑤幕末時期

幕末の嘉永 7 年(1854 年)にはロシアのプチャーチン率いるディアナ号が大阪湾へ来航し、安治川口や木津川口は物々しい警備となつた。この時尻無川や木津川には紀州藩や郡山藩の兵 2600 人が集まるとともに、尻無川河口に 30 艘、木津川河口に 43 艘の番船を配備した記録がある。

文久 3 年(1863 年)には將軍家茂が大阪湾巡視を行い諸侯に沿岸警備の命令を発している。木津川口は土佐の山内家に、木津川船手番所は美濃の遠山家となつていていた。これを遡ること 7 年前には安治川口や木津川口に砲台を築くための調査命令も出されていた。

⑥安政大地震

嘉永 7 年(11 月 27 日で改元し安政となる)年は安政の大地震がおき、特に 11 月 5 日には地震被害とともに、津波が押し寄せ、大正区だけでなく安治川筋や木津川筋の広範囲な地域が大災害を蒙つた。このことは大正橋東詰めの「両川口津浪記」の石碑に詳しい。

⑦新田開発

大正区はある意味では全て新田である。勘助島に始まり千歳新田まで 15 箇所石高にして、2000 石程度である。新田は大坂町人や豪農が幕府から許可を得て開発する「町人請負新田」で、当然幕府領となる。

大正区の中では泉尾新田の北村六右衛門と千島新田や恩加島新田などの岡島嘉平次が有名であるが、特に北村家の御子孫は区内で健在である。

泉尾新田(当初三軒屋浦新田と呼ばれた)の場合を見てみると、泉州踞尾村の豪農北村六右衛門は地元の新田開発も行いながら幾度となく開発の名乗りを上げた結果、元禄 15 年(1702 年)に検地を受けるにいたつた。石高 703 石で江戸時代の大坂湾岸の新田としては規模が大きく、その後の開発もあわせると 125 町歩の広さがあった。2 重の堤防に囲まれ、沖堤は高さ 9m、中堤は 5.4m で中堤の中は畑、その外は水田で、「井路」と呼ばれる水路が縦横に走っていたという。農家数 45 戸、会所は南泉尾(三軒家東 5 丁目付近)にあった。開発許可を受けるにあたっては 3 年間の年貢免除と千石につき金 3500 両の上納金を約した。これらの新田は江戸時代を通じて漂渺たる田園地帯のままであった。大正区の新田は泉尾が五箇組にその他の新田は木津川組に属した。

4. 明治時代以降

①行政区画

明治時代当初、行政区画は頻繁に変更された。

大正区の場合、明治元年(1868 年)大阪府西成郡、同 2 年 1 月には攝津県西成郡、2 カ月後大阪府、同 5 年大阪府西成郡第 2 区 2 番組、4 番組、同 8 年大阪府第 6 区 2 小区、同 11 年大阪府西成郡、明治 22 年市制・町村制の施行により、大阪府西成郡三軒家村および川南村の一部(大阪市発足)、明治 30

年大阪市編入(西区)。

明治 33 年、町名設定、ほぼ新田名継承。

大正 14 年、西区から港区として分区。

昭和 7 年、10 月 1 日港区から分区し、大正区成立。

②人口と産業の発展

明治 9 年	(1876 年)	4,078 人	1881 年三軒家「船囲い場」
明治 22 年	(1889 年)	6,303 人	1883 年大阪紡績 1885 年藤永田造船所
明治 32 年	(1899 年)	12,920 人	1903 年泉尾土地設立、原田造船所 1912 年千島土地 1914 年(～17 年) 大阪俘虜収容所設置 1915 年大正橋架設、大阪セメント、大阪製鐵 1917 年クボタ恩加島工場 1918 年市電大正橋—木津川運河、大阪木材土地創立 (西区から木材業者集団移転) 1919 年大正運河開削開始、この頃難波島に造船所 15 社、 尻無川北恩加島、船町も少し
大正 9 年	(1920 年)	62,046 人	1920 年岩崎運河開削、市電鶴町 4 丁目延伸 1922 年市電小林・鶴町開通 1923 年中山製鋼所、この頃沖縄県出身者の来区進む
大正 14 年	(1925 年)	81,710 人	1925 年西区から港区分区。松尾橋梁 1926 年片山鉄工所、藤永田船町造船所 1927 年日本 GM 鶴町開業 1929 年大阪飛行場(木津川)(日本初の公共用空港)開設
昭和 5 年	(1930 年)	100,933 人	1932 年(昭和 7 年) 大正区が港区から分区
昭和 10 年	(1935 年)	131,037 人	1935 年工業生産高市内 2 位 1936 年大船橋(可動橋)・1937 年大浪橋
昭和 15 年	(1940 年)	137,931 人	1939 年中山製鋼所新溶鉱炉

③戦前の港湾修築事業

<第 1 次> 明治 30 年(1897 年)～昭和 4 年(1929 年)

運河	木津川運河	大 2 年(1913 年)	～大 5 年	延長 1,832m
	千歳運河	大 3 年(1914 年)		1,909m
	福町堀	大 7 年(1918 年)	～大 8 年	1,054m
埋立	木津川右岸先端	明 31 年(1898 年)	～明 32 年	8 万 4288 m ²
	船町	明 30 年(1897 年)	～大 15 年	93 万 2446 m ²
	鶴町・福町	明 38 年(1905 年)	～大 3 年	116 万 0335 m ²
	南恩加島・平尾	明 42 年(1909 年)	～大 12 年	29 万 4100 m ²

防波堤	鶴浜通地先	昭3年(1928年)	～昭4年	延長455m
船だまり	同上	同上		4万1250m ²
<第2次>昭4～21 ほぼ港区の中央突堤地区に集中				

④戦災

大正区の空襲は全7回。

特に3月13日、6月1日、6月15日の空襲による被害が大きかった。

- ・3月13日は難波島、三軒家東、泉尾中央部。
- ・6月1日は船町西部、鶴町、福町、新千歳町、北恩加島。
- ・6月15日は残存部。

殊に3月13日の被災は死者261人、被災者3万5210人、大正区全体の家屋の40%が被災。

昭和19年1月の人口10万5721人のうち疎開2万7006人、被災5万4932人。

終戦時人口9,970人。昭和20年10月は2万8493人。

⑤戦後の港湾整備事業

大正内港化工事・・尻無川左岸一帯、千歳堀一部拡幅、浚渫して80haの泊地造成、埠頭施設建設、内国貿易港区整備

大正鋼材埠頭岸壁	水深9m	昭和34～37年
第1突堤、第2突堤物揚場	水深3～4m	昭和30～44年
大正内港はしけ桟橋	水深4m	昭和50年(近年再整備)
上屋建設		昭和39～47年
貯木場移転		昭和27～46年

大正運河を中心に製材所、合板工場、貯木場、木材市場があり、業者261社、水面約41万m²、陸地約41万m²合計82万m²で(区域の約1割)昭和27年から住之江区平林へ移転開始、昭和46年移転完了。

⑥高潮対策事業

新田の堤防は堅牢であったが治水事業と工業化の中で堤防が低くされた。

昭和9年9月の室戸台風全域冠水 → 昭和14年OP3.5m堤防完成

昭和25年9月ジェーン台風ほぼ全域冠水 → 昭和34年OP4.0m堤防完成 (西大阪総合高潮対策事業)

その後も鶴町、福町や木津川左岸や尻無川右岸で嵩上げ実施

新高潮対策事業・・防潮水門の建設

木津川水門、尻無川水門 昭和45年11月完成 (水門内OP4.3m 水門外OP6.6m基準)

地下水の汲み上げ規制のかかった昭和37年以降は地盤沈下がほぼ収束

⑦ 土地区画整理事業等(大正区分)

・ 難波島工区	15ha	昭和 23 年仮換地指定	昭和 36 年換地処分公告
・ 三軒家工区	60ha	昭和 26 年仮換地指定	昭和 62 年換地処分公告
・ 南部工区	431ha	昭和 31 年仮換地指定	平成 6 年換地処分公告
合計	506ha (大正区全面積の 54%)		

住宅地区改良事業(小林、南恩加島、鶴町、泉尾)も昭和 39 年度以降、主に区画整理事業と合併施行の形で 4 地区 11ha、866 戸の住宅を建設した。

<南部工区> 昭和 21 年都市計画決定

木材業者の移転先としての住之江区の平林地区を含めれば 636ha。

全面盛土のため飛び換地方式。盛土量は浚渫送砂土量 316 万 m³一般土砂 259 万 m³合計 575 万 m³である。高さは鶴町地区が OP4.3m、本土地区が OP4.5~6.7m。家屋の移転は北恩加島町から始まり移転先は泉尾北村町続いて昭和 30 年以降は南恩加島町(今の平尾)であった。大正運河の埋め立ては昭和 43 年に始まり 45 年に完了。木材業者 261 社の平林地区への移転完了は昭和 46 年。千島計画(17.7ha)北村計画(9.5ha)はともにこの南部工区の中で生み出された土地を利用したもので詳細は大正区のデータ参照。

⑧ 小学校の変遷

明治 8 年	(1875 年)	4 月 泉尾東小学校	泉尾新田内了照寺境内で創立
明治 8 年	(1875 年)	7 月 三軒家東小学校	三軒家町で創立
大正 3 年	(1914 年)	4 月 泉尾北小学校	泉尾東小学校から分離独立
大正 5 年	(1916 年)	3 月 三軒家西小学校	三軒家東小学校から分離独立
大正 10 年	(1921 年)	4 月 鶴町小学校	泉尾北小学校から分離独立
大正 11 年	(1922 年)	7 月 北恩加島小学校	泉尾東、泉尾北小学校から独立
大正 13 年	(1924 年)	11 月 南恩加島小学校	鶴町、泉尾東小学校から独立
大正 13 年	(1924 年)	12 月 中泉尾小学校	泉尾北、北恩加島小学校から独立
昭和 30 年	(1955 年)	9 月 平尾小学校	北恩加島小学校から分離独立
昭和 45 年	(1970 年)	10 月 小林小学校	平尾小学校から分離独立
昭和 55 年	(1980 年)	4 月 鶴浜小学校	鶴町小学校から分離独立

※戦前にあった三軒家南、大正、新千歳、港南小学校は現存しない。

参考

「大正区からみた大阪の歴史(～室町時代まで)」

1. 古代の難波

上町台地(標高 25m)は生駒山(標高 642m)とは大きさこそ違うもののよく似た山形を持つ。ともに両山系が西側に断層を伴う隆起帯であり、その東西は沈降帯となっている。つまり上町台地の東は河内平野であり、西側が大阪湾となっている。この中途半端ともいえる小丘陵地形こそが大阪の今日の地位を生み出している。河内平野には淀川と大和川(江戸時代までは大阪城の東あたりが河口)の 2 大河川が流れ込み、港機能と肥沃なデルタ地帯を形成して行った。1 万 5000 年前からの縄文海進と呼ばれる縄文早期・前期には河内湾であったものが、3000 年前には河内潟と呼ばれる地形となり、1500 年前には河内湖となっていた。これは海面の低下と土砂の堆積が進んだためで、上町台地の存在が極めて大きい。最初に大阪市民となったであろう人の住み始めた時期は明確ではないが、森之宮遺跡に人骨が見られる。

日本書紀によれば仁徳 11 年(5 世紀)には「難波の堀江」の開削が記されている。「(高津の)宮の北の郊原を掘りて、南の水を引きて西の海に入る。因りてその水を号けて堀江といふ。」これは現在の旧淀川・大川だと考えられている。その後この大川が淀川本流となって下流に木津川などが出来てくる。

西暦 538 年(552 年とも)に伝來した仏教を巡って蘇我氏と物部氏が確執を深め、古来より外来文化の受け入れ地であった難波の堀江に物部氏が仏像を投げ捨てたとされる。(後にその仏像が長野善光寺の本尊になった話は有名)その後物部守屋を滅ぼした後、聖徳太子によって四天王寺が創建されたのは西暦 593 年のことだった。(当初は玉造に造られたが 6 年後に現在地に移設された。)

古代より難波には多くの「宮」が存在した。仁徳天皇の「高津宮」、欽明天皇の「祝津宮」、孝徳天皇の「難波長柄豊崎宮」、天武、文武、聖武天皇などの「難波宮」などがあった。ところで天皇の即位の後の儀式として「八十島祭り」があった。(琴の演奏の下で新天皇の衣装を入れた箱を振り靈力を付与した)記録では嘉祥 3 年(850 年)から元仁元年(1224 年)まで 22 回開催されたが、もともと河内王朝以来の儀式であるらしい。古は天皇の直接の参加の下で行われていたようであり、記録では難波津の「熊河尻」で行われたとされ、その位置は不明であるが、現在の大阪城のところにあった生国魂神社が関与していたらしい。長暦元年(1037 年)以降は住吉神社の近くの「代家浜」で行われた。そのほか、伊勢神宮の斎王が京に帰る際は大山崎の河陽宮からわざわざ難波津の 3 箇所の浜(三津浜下方、三津浜、安曇口)に参らなければならなかったという。

万葉集について言えば、大正区に關係する歌として「鶴町」と「船町」の由来となった田辺福麻呂の「潮干ればあしへに騒ぐあし鶴の妻呼ぶ声に宮もとどろに」と「あり通う難波の宮は海近みあまおとめらが乗れる船見ゆ」があるが、もう一つ興味深い歌がある。万葉集卷 2-228 「妹が名は千代に流れむ姫島の子松がうれに苔むすまでに」(河辺宮人が難波潟の姫島の松原で詠んだ)。

この歌の舞台の「姫島」は、所在地不明とされ、西淀川区の姫島神社付近をあてている説があるが、その当時の海岸線や難波宮からの距離から見て疑問である。「行基年譜」にある「比売島」が西成郡津

守村にあると明記されていることや、「浪花往古図」では、「姫島」が「江小島」「くじょう島」の南に表示され、また区内の専称寺の山号が「姫島山」とされるなど当区との関係も浅からずあると言える。(なおこの歌を本歌取りして古今集の「賀の歌」の「我が君は千代にましませさざれ石の巖となりて苦の生すまで」が生まれ、のち和漢朗詠集に採用され、さらに薩摩藩琵琶歌に取り入れられ、明治になって「君が代」となったと言われている。)

歌の話としては小野小町のおじいさんの参議小野篁の「わたの原八十島かけてこぎ出でぬと人には告げよ海人のつり舟」(小倉百人一首)は大正区あたりの 1150 年前の風景を彷彿とさせてくれるものではないだろうか。

万葉集も含めて難波を詠んだ歌は数多い。

「難波門を漕ぎ出でて見れば神さぶる生駒高嶺に雲そたなびく」	防人の歌
「八十国は難波に集ひ舟飾り我がせむ日ろを見も人もがも」	防人の歌
「堀江漕ぐ伊豆手の舟の楫つくめ音しば立ちぬ水脈速みかも」	大伴家持
「いざ子ども早く日本へ大伴の三津の浜松待ち恋ひぬらむ」	山上憶良
「大伴の御津の松原かき掃きてわれ立ち待たむ早帰りませ」	山上憶良
「難波津に咲くやこの花冬ごもり今を春べと咲くやこの花」	古今集序・王仁
「津の国の難波の春は夢なれやあしの枯葉に風わたるなり」	新古今集・西行

2. 平安時代の難波

長岡京への遷都に際しては難波宮の資材を運ぶとともに、延暦 4 年(785 年)には神崎川(三国川)と淀川を結ぶ水路が開削され、瀬戸内から京へはこの水路を利用することになって、一層難波の地位低下を招いた。(江口(東淀川)や川尻(尼崎)近くの加島や神崎には遊女もいて、江口には道長や頼通、西行なども訪れた。)

延暦 12 年には攝津職が廃止され、摂津国が置かれた。古代に比べて地味な時代と言える。しかし、荘園は次々と開発され、西成郡(中島郡とも言う)は広大な面積を擁するようになった。

瀬戸内海からも神崎川を経由して今の天満橋あたりの「渡辺津」に物資が集まり、摂津の国府も津の近くに置かれた。渡辺津は熊野詣の陸路の出発点にもなった。摂津多田源氏の「渡辺党」が活躍し、大江御厨の惣官も兼ねた。源平の時代に活躍した源頼政も渡辺党であり、熊野水軍と並んで活躍したのも渡辺党だった。

また、住吉神社が次第に社格を上げた。「八十祭り」を執り行うとともに、航海守護とともに天候祈願の神の役割や和歌の神の役割も行うようになった。これには神主の津守氏の果たした役割が大きい。

一方で、四天王寺信仰(太子信仰)が盛んになり、熊野詣の途中参詣も多かった。さらに浄土に往生するために夕陽を拝むことが盛んになり、貴族の藤原家隆も「契りあれば難波の里にやどりきて波の入日を拝みつるかな」と辞世の歌を残した。

3. 鎌倉時代と室町時代の難波

摂津の国では守護は承久の乱(1221年)以降しか任命されず、地頭は貴族や寺の反対で市内域では置かれなかった。渡辺の惣官職は渡辺氏や一族の遠藤氏が占めた。

四天王寺は当初東寺系(真言密教)の僧が別当となつたが、後に天台系に代わつた。しかし山門(延暦寺)と寺門(圓城寺)間での抗争が激しかつた。愚管抄で有名な慈円も別当職のまま没している。別当職を支える執行職は渡辺党の渡辺氏と遠藤氏で争つた。有名な忍性も別当職につき、石鳥居を築造し、悲田院も再興した。また、四天王寺と住吉神社が阿倍野の領有を巡り4度にわたり抗争した。

鎌倉末期には四天王寺に立てこもつた六波羅軍と渡辺党を含む楠木正成が戦つた。南北朝時代は渡辺家や住吉神社の津守家および四天王寺も南朝方だつた。渡辺党の渡辺照は後醍醐天皇から難波荘の地頭職に任命された。応安2年(1369年)には難波荘と木津浦が境界争いしている。南北朝の関係などで摂津は戦略的に重要なため、守護は郡単位で任命が行われ、西成郡は赤松氏や畠山氏および細川氏が領有したが、南朝が支配する時期もあり、変動が著しかつた。(西成郡は中島郡一北・中・南一と呼ばれ、東成、住吉、百済郡は欠郡と呼ばれるようになった。)

応仁の乱では大内政弘(西軍)が中島郡を支配した。その後細川氏の内部抗争で備前の浦上氏や阿波の三好氏も絡んで木津、今宮、天王寺、野田、福島、勝間が戦場になつた。最終的には三好長慶が勝利し、永禄7年(1564年)までの15年間は平和が保たれた。

大正区年表

年号	年	西暦	大阪・一般	大正区
推古	元	592	四天王寺建立	
大化	2	646	大化の改新詔・難波子代宮	
白雉	2	651	孝徳帝、難波長柄豊崎宮遷都	
天平	16	744	聖武帝、難波宮を皇都とする	
天祐	4	754	唐僧鑑真、難波へ来着	
延暦	13	794	平安京遷都	
嘉祥	3	850	八十島祭初見	
延喜	元	901	菅原道真、大宰府左遷	
治安	3	1023	藤原道長、四天王寺参詣	
大治	2	1127	白河上皇、四天王寺参詣	
保元	元	1156	渡辺党、源頼政軍へ参加	
建久	元	1190	源頼朝、四天王寺参詣	
元仁	元	1224	八十島祭最終見	
嘉禎	3	1237	藤原家隆、四天王寺にて没	
暦応	元	1338	北畠顕家、足利幕府軍と摂津の渡辺・天王寺で戦闘	
応安	2	1369	摂津難波荘・木津浦と境相論	
応仁	元	1467	応仁の乱	
明応	5	1496	蓮如、生玉荘に石山御坊建立	
	6	1497	蓮如の消息に地名「大坂」が初見	
嘉禄	3	1530	細川高国、摂津の勝間・天王寺・今宮・木津・難波に陣構え	
元亀	元	1570	石山本願寺、織田軍を攻撃	
天正	4	1576		毛利水軍、織田軍の兵船を木津川口で破り、石山本願寺内に兵糧を運ぶ
	6	1578		織田方・九鬼水軍の安宅船が大坂を海上封鎖し、毛利水軍を木津川沖で擊破
	8	1580	教如大坂退去	
	11	1583	秀吉はじめて大坂入り	
	13	1585	大坂城本丸完成	
慶長	元	1596	大坂城惣構堀工事完了	
	3	1598	秀吉没	
	8	1603	家康征夷大將軍就任	
	15	1610		中村勘助、木津川尻の姫島に豊臣家の軍船係船所を建設、堤防を築いて田畠を開発。豊臣家より「勘助島」の名が与えられる(現在の三軒家)
	19	1614	大坂冬の陣	三軒屋、大坂防護軍守衛地となる
元和	元	1615	大坂夏の陣、豊臣家滅亡	松平忠明によって神明社(日中の神明社)が京都西院より中央区内平野町へ遷座される
	2	1616	大坂城下の町割が進み、船場を北組南組に分立	
	5	1619	大坂船手に小濱光隆を任命	
	6	1620	大坂城再築第1期工事完了	
寛永	2	1625		下の八坂神社勧請
	5	1628		三軒屋に真宗大谷派の専称寺建立
	7	1630	住友家大坂で銅商開店	中村勘助、木津川を浚渫。幕府より入津料・白米5合の収得を許される
正保	4	1647		勘助、上の八坂神社勧請
明暦	3	1657		川口三軒屋の遊郭禁止。新町遊郭に纏め
万治	2	1659		本願寺派万福寺を専称寺の北側に建立
寛文	5	1665	幕府、淀川・木津川・大和川を巡視 【大坂三郷人口 26万人余】	大坂船手2員制 大番組頭・高林直重、勘助島に居住。船番所は勘助島にあり(～1683年まで)

大正区年表

年号	年	西暦	大阪・一般	大正区
寛文	12	1672		呑海寺建立
延宝	3	1675		この年発行の『芦分船』によれば三軒屋は「次第に人家が満ち満ち軒を並べて繁栄して、旅泊の船出入り繁く」とある
貞享	元	1684	河村瑞賢、九条島を開削工事。1698年に竣工し安治川と命名 竹本義太夫、道頓堀で竹本座創設	大川改修で天満の替地を三軒屋に設定。舟津町・川本町・臼井町として大坂三郷に編入
元禄	12	1699		河村瑞賢、難波島を開削工事。木津川の水流を改良し、西側を難波島・東側を月正島と称す 泉尾神社創建
	15	1702		泉国踞尾村・北村六右衛門、泉尾新田を開発 泉尾新田検地
宝永	4	1707	宝永の大地震 M8.4	開発に伴う慰靈のため、了照寺建立
	5	1708	鴻池新田完成	泉尾新田堤防決壊 安治川・木津川の川口浚え(沖浚え)実施 木津川に遠見番所設置。 お船藏は元禄年間、既に番所の西にあり
享保	2	1717		木津川・大和川の浚渫決定
	15	1730		安治川・木津川の川口浚え
宝曆	13	1763		炭屋三郎兵衛、炭屋新田を開発
	14	1764		第11回朝鮮通信使、尻無川遡上
明和	5	1768		岡島嘉平次、数回に渡り千島新田を開発
	8	1771	摺河泉にお蔭参りが流行	平尾与左衛門、平尾新田を開発
安永	3	1774	京坂大風雨	川口で多数の船転覆。1200人余水死
天明	元	1781		両川口の川浚え実施
文政	12	1829		岡島嘉平次、南恩加島新田を開発
天保	2	1831	安治川お救い大浚え	岡島嘉平次、北恩加島新田を開発
	3	1832	天保山完成	岡島嘉平次、小林・岡田新田を開発 舟運のため、木津川口に870間の石堤を築き、松を植える(千本松) 木津川口お救い大浚え 産土神社(在:小林)創建
	7	1836		天満宮(在:南恩加島)創建
弘化	2	1845		岡島嘉平次ら、千歳新田を開発
安政	元	1854	安政の大地震 M8.4 ロシア軍艦ディアナ号大坂来航	道頓堀・木津川の被害甚大 大正橋東詰に『大地震両川口津波記』の石碑建立 木津川口は40艘余の番船、木津川沿岸には紀州兵など2600人で警戒
	3	1856		幕府、大坂城代・土屋寅直に安治川口・木津川口への台場建設を指示
	4	1857		幕府、高松藩に木津川口台場の警備命令
文久	3	1863	將軍家茂が大坂入り。34諸侯に大坂警備を命じる	土佐山内藩が木津川口を、美濃苗木藩が木津川船手番所を警備
元治	元	1864	大坂船手廃止	
慶応	元	1865	將軍家茂、征長のために大坂入り	
	2	1866	將軍家茂、大坂城で没す	
	3	1867	將軍慶喜、大政奉還	
明治	元	1868	鳥羽伏見の戦い 大坂城炎上 醍醐忠順、初代大阪府知事に就任 川口居留地競売・大阪港開港 廢藩置県	
	4	1871		

大正区年表

年号	年	西暦	大阪・一般	大正区
明治	4	1871	藏屋敷廃止	
	5	1872	庄屋・年寄を廃止し区長戸長制度実施	当区は西成郡第2区、北部は2番組・南部は4番組となる 泉尾小学校・三軒家小学校開校
	8	1875		尻無川下流に遊泳場を設置。小学生水泳訓練
	11	1878		大阪府、三軒家に倉庫10棟を持つ「船曳い場」(178000 m ²)を開設
	14	1881	板垣退助、戎座で政談演説会	
	16	1883	造幣局、桜の通り抜け始まる	渋沢栄一らが三軒家に大阪紡績(後の東洋紡績)開業、『東洋のマン彻スター』の基礎を作る
	18	1885	淀川堤防大決壊	藤永田造船所が千島に開業。以後、木津川を中心に工場が続々と開業(栗本鉄工所 etc...)
	22	1889	大阪市発足。市政特例により市長は不在	当地は三軒家村と川南村の一部となる 曾根崎警察署三軒家分署設置
	27	1894	日清戦争	
	30	1897	大阪市第1次市域拡張 大阪市築港工事開始(～昭和3年まで大阪港第1次修築工事)	大阪市編入。西区に属する 鶴町・福町(明治38～大正3)、船町(明治38～大正15)を中心埋立(247万m ²)
	31	1898	田村太兵衛、初代市長に就任	
	33	1900	町名大改正	三軒家は2町、他はほぼ新田名どおり設定
	35	1902	大阪ガス論争(民営か公営か)	
	36	1903	市内河川巡航船開業	泉尾土地設立(北村銀行破産による)
	37	1904	日露戦争開戦	
	38	1905	大阪ガス供給開始	
	42	1909	北の大火	大火の罹災市民延べ22000人、南恩加島の施設に収容
	44	1911		西大阪最初の問屋市場「三泉市場」開設
	45	1912		千島土地設立
大正	2	1913	東海道本線全線複線化	小林斎場開設
	3	1914	第一次世界大戦勃発	大戦ドイツ捕虜760名、大阪俘虜收容所(北の大戦同一施設)に収容(大正6年広島へ移動) 木津川焼却場開設
	4	1915	天王寺動物園開園	泉尾第2(北)小学校開校 千歳運河開削 大正橋架橋
	5	1916	【大阪市人口150万人】	市電、岩崎橋⇒日吉間を開通 大阪製鉄開業
	6	1917	天保山運河開通	三軒家第3(西)小学校開校 木津川運河開削
	7	1918	米騒動 中央公会堂竣工 方面委員制度(のちの民生委員)発足	八坂神社境内に中村勘助顕彰碑建立 久保田鉄工、恩加島に工場開設 市電、大正橋⇒木津川運河間を開通
	8	1919	大阪市児童相談所開設 渡船が市の管理下となる	大阪木材土地(株)創立。西区の西道頓堀・西長堀などから木材業者集団移転し小林町・千島町一帯は西日本有数の木材市場となる 大正運河開削開始(大正12年完成) 福町堀開削
	9	1920	第一回国勢調査	鶴町に大阪市初の市営住宅建設 鶴町に託児所の設置
	10	1921	市庁舎が中之島に移転・新築	泉尾警察署発足 岩田土地設立 造船所、木津川筋32社・尻無川筋に16社群立 岩崎運河開削と岩崎橋の架橋 市電、大運橋⇒鶴町4丁目間を開通 泉尾高等女学校・鶴町小学校開校

大正区年表

年号	年	西暦	大阪・一般	大正区
大正	10	1921	大阪最初のメーデー グリコ発売	泉尾振工会(工業会の前身)発足 鶴町公設市場開設
	11	1922	大阪市婦人連合会結成 大阪体育協会結成 天保山桟橋竣工	北恩加島小学校・泉尾工業学校開校 泉尾公設市場開設 岩松橋架橋 市電、小林町↔鶴町4丁目間を開通 南条病院(のちの大正病院)開設
	12	1923	関東大震災閑市長就任	木津川尻埋立地に大阪木津川尻飛行場が開設。日本航空(川西系)の拠点空港として水上機の飛行場として発足。のち陸上機能も併せもつた。 鶴町市電車庫開設 中山製鋼所、船町で開業
	13	1924	甲子園野球場竣工	南恩加島小学校・中泉尾小学校開校 神明神社、中央区より鶴町1丁目へ遷座
	14	1925	第2次市域拡張。4区から13区へ	西区から港区が分区(当区は港区に属す) 三軒家・泉尾地区の下水道管敷設完了
昭和	元	1926	御堂筋起工式	
	2	1927	大阪ばい煙防止調査委員会設置	市電、三軒家↔新千歳間を開通 日本ゼネラルモータース社、鶴町1丁目に開業。昭和16年までに約8万台を生産
	4	1929	世界恐慌始まる 日本航空、東京↔大阪↔福岡の定期旅客輸送を開始 第1次築港事業完了 阪急百貨店開業	船町に大阪飛行場(木津川) (約 39 万m ²) が、日本初の公用空港として開設。日本航空輸送等が名古屋・東京・福岡・大連・上海等へ航空路線。年間発着回数 8800 回・年間旅客 1 万人(昭和13年)。14年伊丹飛行場へ陸上飛行場機能移設され、水上機専用飛行場化 泉尾幼稚園開設 日本ゼネラルモータースで労働争議
	5	1930	地下鉄御堂筋線起工式 高島屋南海店開店	区内初の市バス、野田阪神↔鶴町間の運行開始
	6	1931	大阪城天守閣再建	
	7	1932	大阪市渡船事業直営化	港区から分区し、大正区が成立(15区制) 大正区歯科医師会・薬剤師会の創設
	9	1934	室戸台風来襲。市域の3割冠水、死者 946 人・被災者 78 万3千人	最大風速 48 マチ。区内全域冠水、死者 119 人・被災者 12 万3千人 北恩加島小学校で校舎倒壊、9人死亡 大正消防署、小林に新設
	10	1935	大阪港復興修築工事着工 【大阪市人口 299 万人】	木津川飛行場で煙霧による飛行機墜落事故発生 工業生産高が機械・金属工業を中心に市内 2 位へ(従事者数 22000 人)
	11	1936	市立美術館落成	可動橋の大船橋を架設
	12	1937	御堂筋竣工 電気科学館開館	大浪橋架設
	13	1938	校区町会連合会組織発足	大正区 12 連合、134 町会
	14	1939	警防団結成	中山製鋼所新溶鉱炉完成 【大正区人口 15 万 2000 人】
	15	1940	大政翼賛会結成 【大阪市人口 325 万人】	木津川・尻無川の防潮堤完工
	16	1941	太平洋戦争開始	東洋紡績軍需工場転換 (財) 大井積善会設立
	18	1943	中之島公園で出陣学徒合同壮行式	泉尾警察署を大正警察署と改称 大正保健所業務開始
	19	1944	学童疎開始まる	市電、小林町↔新千歳間運転を休止

大正区年表

年号	年	西暦	大阪・一般	大正区
昭和	20	1945	8次に及ぶ大阪大空襲・市内被災者は120万人以上 終戦 枕崎台風来襲 【大阪市人口172万人】	南恩加島小学校児童、疎開先の徳島県で16名焼死(十六地蔵) 大阪大空襲(3/13, 6/1, 6/15)で区の大半焼失。被災者約55000人 8月【大正区人口約1万人】 10月【大正区人口27637人】
	21	1946	国民学校で給食再開 昭和南海地震 M8.0	大正区復興委員会結成 大正区選挙管理委員会設立 区商店会連盟結成 大正区水防団結成 (財)皓養社設立
	22	1947	南海ホークス誕生 戎橋松竹座開場 角座、再築・開業 【大阪市人口156万人】	新制中学校(大正東・大正中央)発足 三軒家西幼稚園設立 遺族会大正区支部結成 大正区医師会発足 大正防犯協会結成 大阪港復興計画で大正内港化決定 区画整理事業『難波島工区設計』認可 (昭和36年、換地処分公告)
	23	1948	大阪市消防本部発足 新制高校発足 大阪市PTA結成大会 大阪市教育委員会発足	大正区防火協力会結成 男女共学により、女子高・泉尾高校が男子校・今宮高校と交流 大正区民生委員協議会設立 体育厚生協会・大正区支部設置
	24	1949	大阪市立大学設置 近鉄パールズ誕生	大正区日赤奉仕団発足 大正交通安全協会発足 大正区PTA協議会発足
	25	1950	ジェーン台風、大阪上陸 朝鮮動乱 大阪球場開業	台風被害・区域の83%が浸水。被災者57000人(人口の96%) 西大阪総合高潮対策事業着手(昭和30年完成) 港湾地帯整備事業の大正地区南部工区設計認可(平成6年度、換地処分公告) 大正橋公園・泉尾公園開園 泉尾球場開設
	26	1951	【大阪市人口195万人】 サンフランシスコ講和会議 関西電力設立 大阪共同募金会発足 毎日放送・朝日放送開局 大阪埠頭倉庫(株)設立	【大正区人口59784人】 区画整理事業三軒家工区設計認可 (昭和62年度、換地処分公告) 済生会泉尾病院開設 大正区社会福祉協議会結成 大正区女性団体協議会結成 区内最初の老人クラブ「千島鶴亀会」発足 大正区「母と子の共励会」発足
	26	1951		社団法人大正工業会設立
	27	1952	大阪沖縄県人会連合会結成 大阪諭売新聞創刊	尻無川、境川運河以北埋め立て 区保護司会発足 傷痍軍人会大正区支部発足
	28	1953	市営トロリーバス開業	区福祉事務所発足 鶴町中央公園開設
	29	1954	NHK大阪中央放送局テレビ放送開始	市バス、船町⇒大阪駅前間を運行 市電・鶴町車庫、盛り土のため閉鎖
	30	1955	第3次市域拡張 【大阪市人口254万人】	カーフェリー、船町⇒平林間運行を開始(～48年まで) 【大正区人口78012人】
	31	1956	政令指定都市制度発足	平尾小学校開校

大正区年表

年号	年	西暦	大阪・一般	大正区
昭和	31	1956	通天閣再建・開業	大正区更生保護女性会結成
	32	1957	上方落語協会結成 ナンバ地下センター開業 ごみ収集パッカー車、試用開始	大正区市場連合会結成 大正区老人会連合会結成 市バス、西船町↔あべの橋間を運行 大正西中学校開校 大正工業会若葉会創設
	33	1958	南港埋立起工式 関西テレビ開局	三軒家川、紡績大橋まで埋立 淀川左岸事務組合発足 三軒家球場開設 青少年指導員連絡協議会創設
	34	1959	四天王寺五重塔、再建竣工 市内防潮堤竣工式 伊勢湾台風来襲	三軒家防潮水門完成 南恩加島抽水所完成 鶴町・福町、盛土完成
	35	1960	司馬遼太郎、直木賞受賞 難波宮址顕彰会発足	大正区子供会連合協議会結成 三軒家公園に「近代紡績工業発祥の地」石碑設置 大正産業会館完成
	36	1961	【大阪市人口 301 万人】 国民年金・国民健康保険制度発足 地下鉄中央線、弁天町↔大阪港間を開通 第2室戸台風来襲	【大正区人口 93377 人】 国鉄大正駅開設 国鉄・天王寺↔西九条間、環状線開通 台風のため鶴町・福町全域冠水。その後、防潮堤嵩上げ実施
	37	1962	阪神高速道路公団発足 千里ニュータウン町びらき	水道局、大正サービスステーション開設 大阪大正ライオンズクラブ創設
	38	1963	名神高速道路開通 日米間テレビ宇宙中継実験	区制 30 周年記念祝賀会 大正公害防止会発足 大正区ふたば会設立 千島下水処理場完成
	39	1964	東京オリンピック開催 東海道新幹線開業	大阪環状線一周運転開始 大正区緑化推進本部発足 大正消防署改築
	40	1965	弁天埠頭、供用開始	大阪臨港地区指定 鋼材埠頭、供用開始 鶴町南公園開園
	41	1966	【大阪市人口 315 万人】 いざなぎ景気 泉北ニュータウン着工 NHK 朝の連続ドラマ「おはなはん」放送	【大正区人口 95509 人】 工業用水道給水開始 水道大正幹線敷設 大正第1突堤、供用開始。大阪海運事業協同組合が運営
	42	1967	阪神高速環状線開通	大正区内市電廃止 交通局鶴町営業所発足 南恩加島公園開設
	43	1968	日本、GNP 世界第2位	鶴町北公園開園 大正運河埋立開始(45 年終了)
	44	1969	東名高速道路全通	千島計画発表
	45	1970	天六ガス爆発事故 日本万国博覧会開催 地下街「虹のまち」開業 船場センタービル完成 新御堂筋道路全通 【大阪市人口 298 万人】	国道 43 号線、阪神高速・西大阪線開通 木津川・尻無川両防潮水門完成 千島公園植樹式 小林公園開園 小林改良地区指定(53 年に住宅完成) 大正地区 BBS 会結成 【大正区人口 88954 人】
	46	1971	大阪市消費者センター開設	区内初の老人憩いの家、鶴町福祉会館完成

大正区年表

年号	年	西暦	大阪・一般	大正区
昭和	46	1971	大阪南港にフェリー埠頭開設	
	47	1972	沖縄返還 千日デパート火災 敬老優待乗車証交付開始	区内木材業者の住之江移転完了 大正区合同庁舎完成 大正区食生活改善推進協議会設立 身体障害者団体協議会設立
	48	1973	第1次石油ショック	千本松大橋完成
	49	1974	大阪市26区制実施 港大橋・南港大橋開通	小林小学校開校 千島体育館開設 市バス、急行運行開始
	50	1975	第一回サミット開催 沖縄海洋博覧会開催 大阪市地域振興会発足 【大阪市人口 278万人】	第1回区民まつり 大正区地域振興会発足 大正内港化による拡幅・浚渫工事完了 鶴町社協「老人食事サービス」「友愛訪問活動」の事業開始 【大正区人口 88485人】
	51	1976	大阪駅前「マルビル」オープン 大阪ビジネスパーク事業認可 難波宮跡の一般公開開始	千島公園開園 千島計画完了 老人福祉センター・勤労青少年ホーム開設 大正区住居表示実施
	52	1977	静止衛星ひまわり打ち上げ	大正区政協力会結成
	53	1978	大阪市総合計画策定 なんばCITY開業	大正高校・大正北中学校開校 人権啓発推進協議会発足 体育指導委員協議会創設
	54	1979	東京サミット開催 南港に人工海水浴場開設	大正通の拡幅完了 千島公園と泉尾公園を結ぶ緑陰道完成
	55	1980	上本町ハイハイタウン開業 地下鉄谷町線、天王寺↔八尾南間を開通 【大阪市人口 265万人】	鶴浜小学校開校 小林斎場改築完成 環境事業局新大正工場完成 【大正区人口 84041人】製造品出荷額市内7位
	56	1981	ニュートラム開業	花と緑のまちづくり推進委員会創設
	57	1982	大阪21世紀協会設立 市立東洋陶磁美術館開館	大正区制施行50周年記念式典 難波島渡し廃止 平尾公園開園
	58	1983	大坂城築城400年まつり開催 大坂城ホール完成	「昭和山コ一ホ」地鎮祭 泉尾連合商店街アーケード完成
	60	1985	阪神タイガース戦後初の日本一 インテックス大阪オープン 【大阪市人口 264万人】	大正区まちづくり計画推進会議発足 (財)大正区コミュニティ協会設立 【大正区人口 82330人】
	61	1986	大阪市庁舎竣工	北恩加島工業団地竣工
	62	1987	大阪市の花をさくら・パンジーと制定	大正区の花を「つづじ」と制定 特別養護老人ホーム「大正園」竣工
	63	1988	瀬戸大橋開通 南海、阪急球団譲渡決定 市公文書館開館	新バスシステム運行開始 寝たきり予防推進協議会発足
平成	元	1989	市制100周年 24区制(新北区・中央区)発足	市制100周年区民フェスティバル開催
	2	1990	国際・花と緑の博覧会開催 【大阪市人口 262万人】	鶴町福祉社会館「子供の家」開所 【大正区人口 81272人】
	3	1991	新婚世帯向家賃補助制度実施 大阪市高齢者総合相談情報センター開設	地域ネットワーク委員会設立 マリンテニスパーク・北村オープン 大正区手をつなぐ親の会設立

大正区年表

年号	年	西暦	大阪・一般	大正区
平成	3	1991	リフト付市バス運行開始	大正警察署新庁舎落成
	4	1992	東海道新幹線に「のぞみ」登場 大阪市生涯学習大阪計画発表	大正区社会福祉協議会法人化 大正区ボランティアビューロー開所
	5	1993	大阪市立大付属病院新築 弁天町市民学習センター開設	区役所全土曜日閉庁実施 大正消防署泉尾出張所開設
	6	1994	関西国際空港開港 全市で資源ごみ収集実施	新木津川大橋開通 平尾商店街アーケード完成
	7	1995	大阪WTC開設 大阪オリンピック招致推進会議 【大阪市人口 260万人】	なみはや大橋開通 大正区在宅サービスセンター(ふれあい福祉センター)開設 【大正区人口 78372人】
	8	1996	みおつくし総合ネット開始 大阪プール・鞠テニスオーパン	大正西地域サービスステーション開所 シルバーカレイン開所 『区民だより』創刊
	9	1997	テクノポート線開通 大阪ドームオープン クリスタ長堀開業	地下鉄鶴見緑地線開通、大正駅開業 JR大正駅リニューアルオープン 大正やすらぎ会館開館
	10	1998	高度浄水処理水、通水開始 舞洲陶芸館開館	青少年育成推進会発足 新大正区民音頭発表
	11	1999	大阪オリンピック招致委員会設立	アゼリア大正(文化交流プラザ)開館
	12	2000	介護保険制度開始 なにわの海の時空館開館 【大阪市人口 260万人】	平尾公園会館開館 大正東地域サービスステーション開所 大正区生涯学習推進区民会議設立 【大正区人口 75042人】
	13	2001	USJ(ユニバーサル・スタジオ・ジャパン)開園 クレオ大阪中央オーパン 大阪歴史博物館開館	(社福)大正区社会福祉協議会50周年 大正区地域女性団体協議会50周年 千島ガーデンモール開設
	14	2002	サッカーワールドカップ、初の日韓共同開催 中央公会堂リニューアルオープン	済生会泉尾第2病院開院 ふくろうの杜開設 第1回ふれあい生涯学習フェスティバル開催
	15	2003	世界柔道選手権大会	千歳橋開通
	16	2004	国立国際美術館移転・開館 オリックス・バファローズ誕生	大正ギャラリー設置(大正内港護岸壁) 第30回区民まつり開催
	17	2005	大阪国際人形劇フェスティバル2005 ロボカップ2005 大阪世界大会 【大阪市人口 263万人】	「旧跡のいわれ・渡船場」のパネル設置 (財)大正区コミュニティ協会20周年 「大正区の歴史を語る会」開催 「大正区の歴史を語る」発行 【大正区人口 73207人】
	18	2006	市営交通に「PiTaPa カード」導入 世界バラ博覧会大阪大会開催 大阪ドームが「京セラドーム大阪」に名称変更 地下鉄今里筋線開業	第1回大正区ファミリージョギング大会開催 大正ドイツ友好記念史跡碑設置 大正区第九合唱団結成 大正区子どもの安全安心対策連絡協議会発足 大正区更生保護女性会50周年

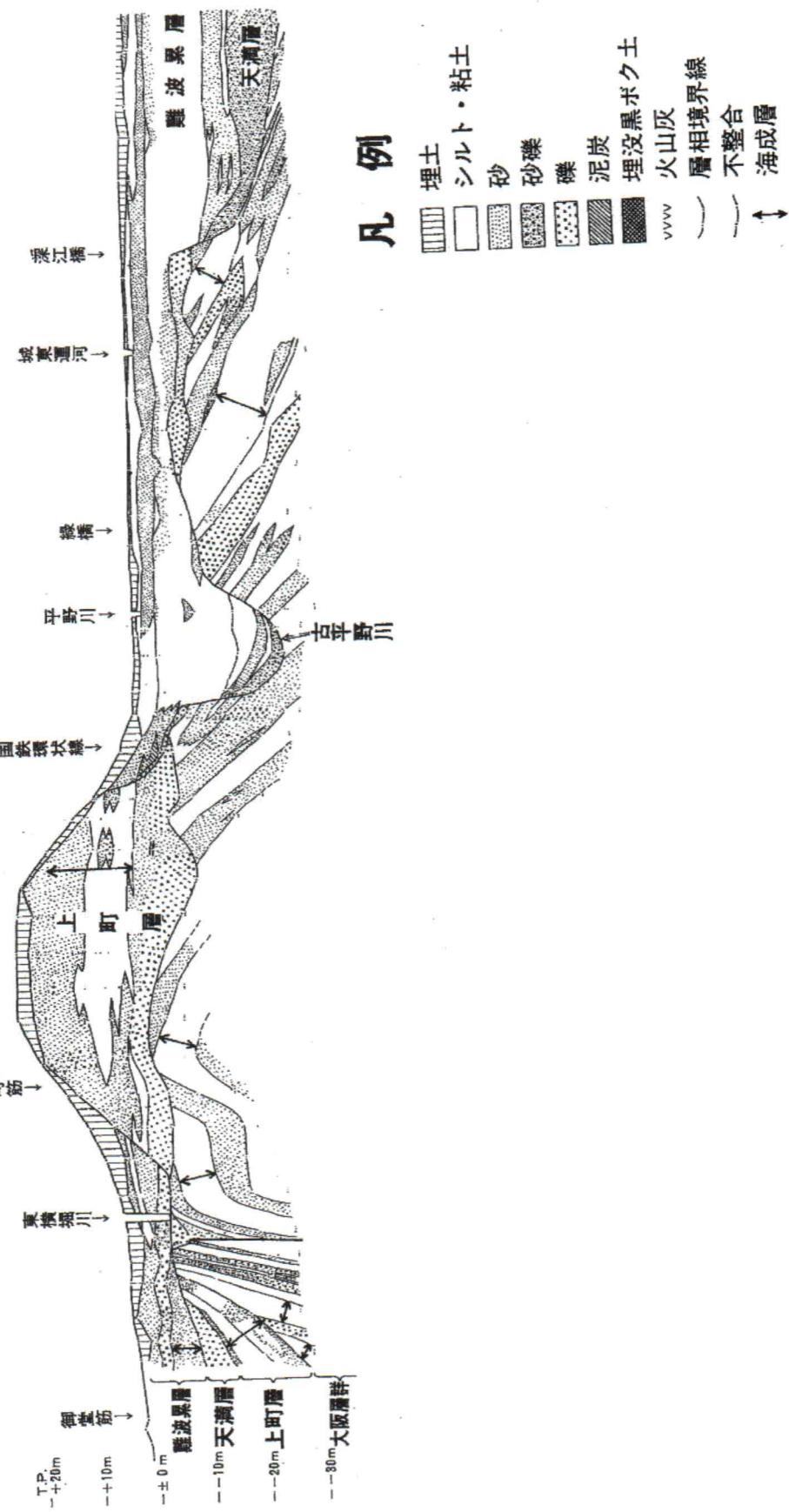
参考資料 1 大阪周辺の地質図
(『河内平野の生いたち』より)



参考資料2 河内平野東西地質断面図
 (『河内平野の生いたち』より)

河内平野東西地質断面図

(那須孝悌・梅野博幸, 1981原図)



参考資料3 石山合戦関係図・大阪冬の陣両軍布陣図
 (『新修大阪市史、第三巻』より)

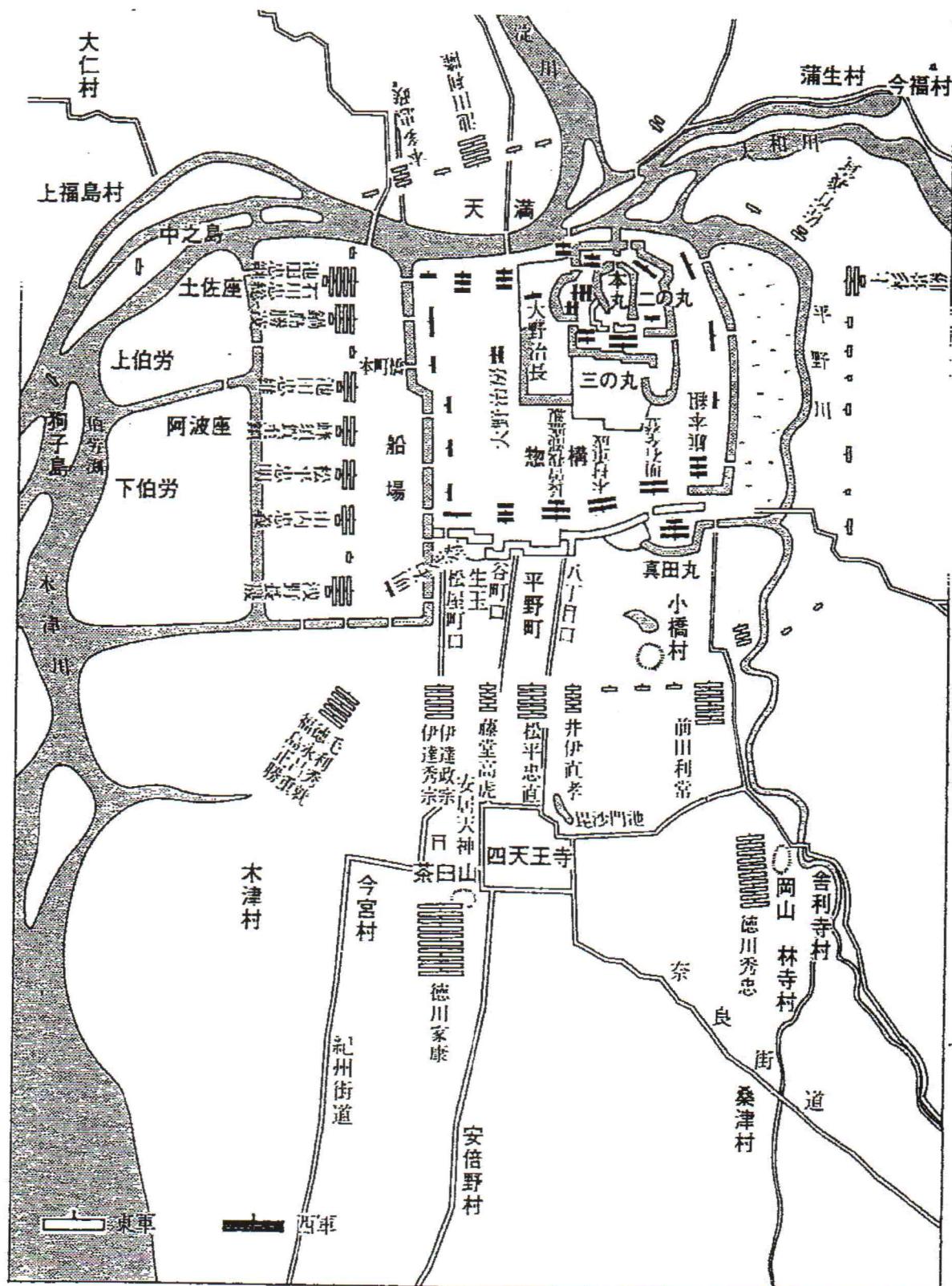
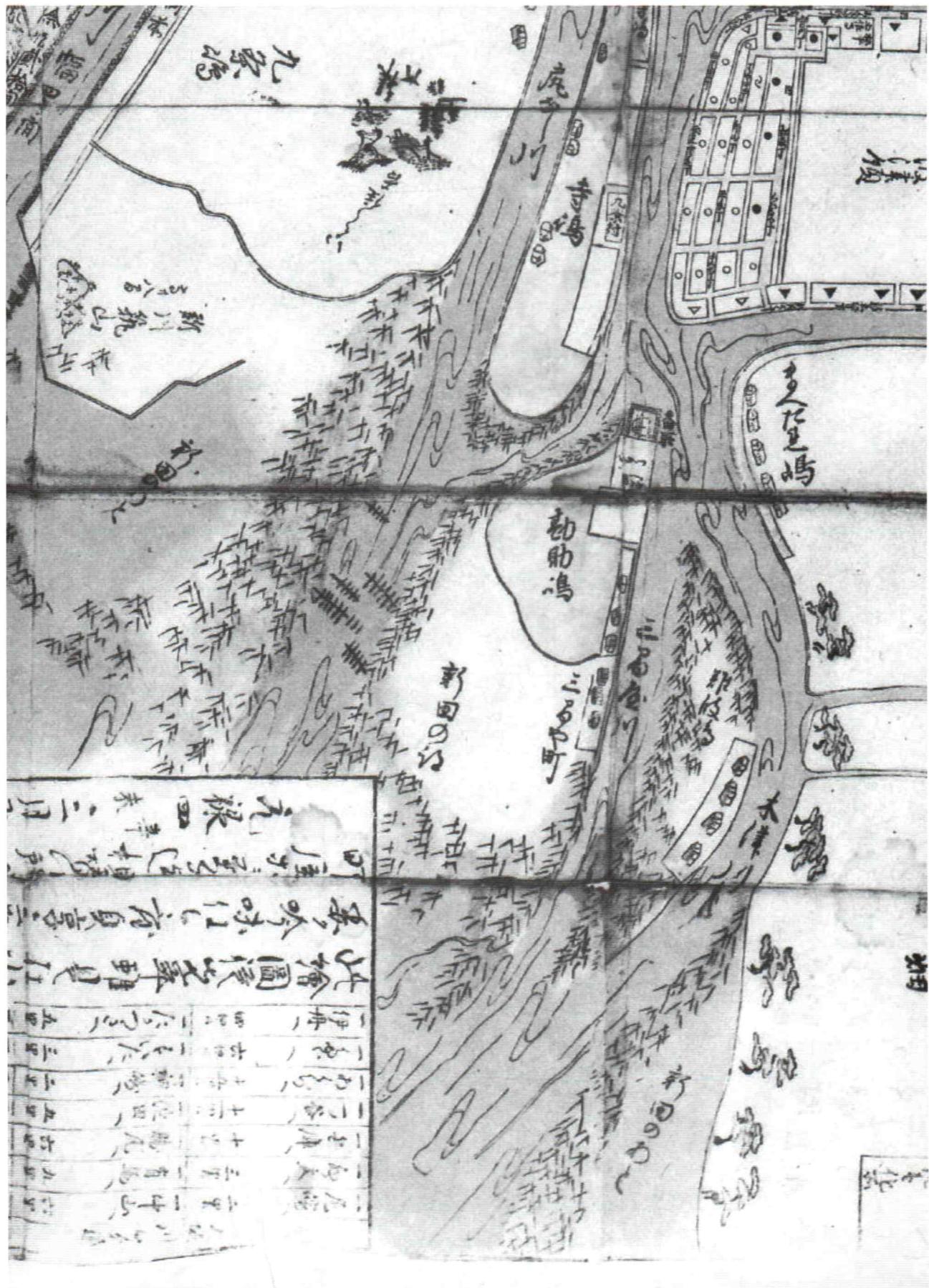


図1 大坂冬の陣両軍布陣図（慶長19年12月）

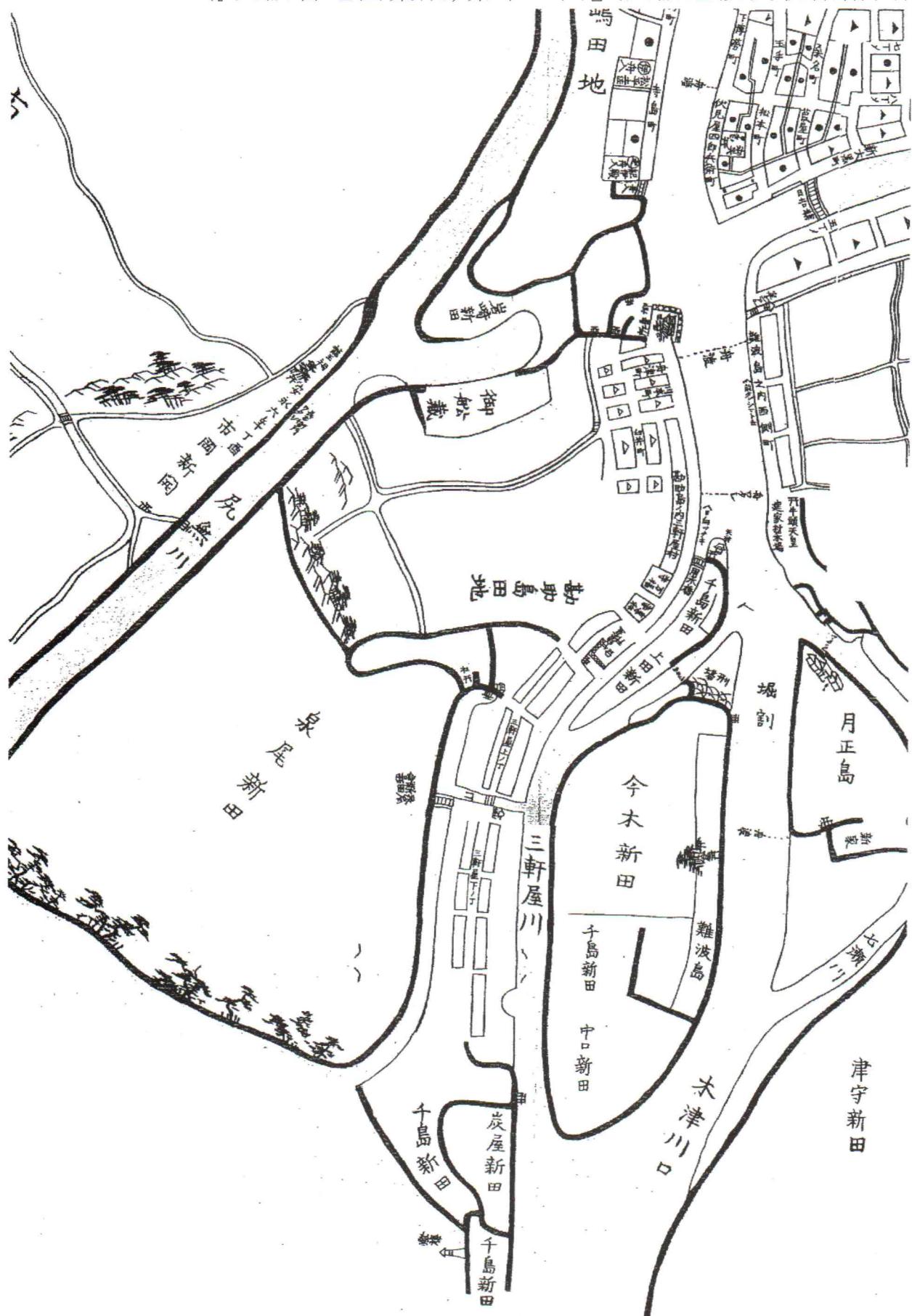
『日本戦史』付図、『懸台武鑑』ほかによる。

参考資料 4 『新撰増補大坂大絵図』：元禄 4 年（1691）

（『大阪古地図集成』、第四図）（大阪建設史夜話附図）

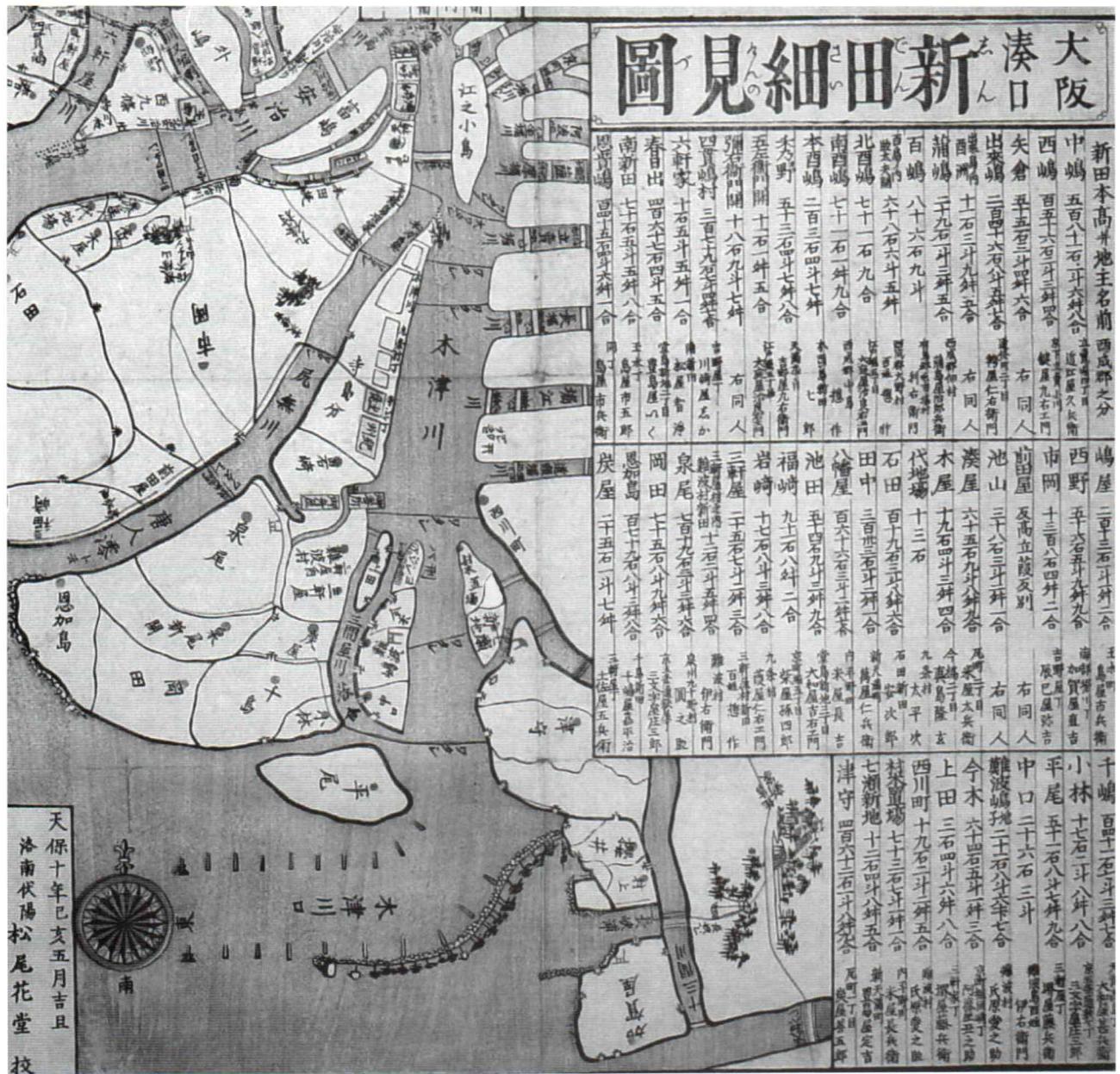


参考資料 5 『増脩改正摂津州大阪地図』：文化 3 年（1806）
（『大阪古地図集成、第十一図』（大阪建設史夜話附図））



参考資料 6 『大阪湊口新田細見図』

(なにわの海の時空館所蔵)



参考資料 7 新田開発の推移(『わがまち大正』より)

新田名		開発年代	開発者	所在地
第1期	三軒家村 216石	慶長 15年(1610)	中村勘助	大正 13年までの 三軒家上之町
	三軒家地子 63石	元和年間(1615-24)	難波島の漁師 助右衛門ら移住	大正 13年までの 三軒家下之町
	難波島地子 21石	寛永年間(1624-44)	難波村 氏原甚左衛門	住居表示までの 難波島町、今木町
第2期	泉尾新田 721石	元禄 15年(1702)	和泉踞尾村 北村六右衛門	大正 14年までの 泉尾町
第3期	炭屋新田 27石	宝暦 13年(1763)	大阪瓦町 炭屋三郎兵衛	住居表示までの 新炭屋町
	千島新田 211石	明和 5年(1768) 天保 13年(1842)	東成郡千林村 岡島嘉平次	住居表示までの 千島町
	今木新田 67石	明和 7年(1770) 安永 7年(1778)	岡島嘉平次	住居表示までの 今木町
	平尾新田 51石	明和 8年(1771)	大阪江戸堀 平尾与左衛門	住居表示までの 平尾町
	中口新田 26石	安永元年(1772)	難波島 中口勘右衛門	昭和 36年難波島町 に合併されるまでの 中口町
	上田新田 3石	安永 3年(1774)	三軒家村 上田伝兵衛	明治 17年千島新田 に合併される
第4期	南恩加島新田 232石	文政 12年(1829) 明治 4年(1871)	岡島嘉平次	住居表示までの 南恩加島町
	北恩加島新田 92石	天保 2年(1831)	岡島嘉平次	住居表示までの 北恩加島町
	小林新田 33石	天保 3年(1832)	岡島嘉平次	住居表示までの 小林町
	岡田新田 75石	天保 3年(1832)	岡島嘉平次	明治 33年小林町に 合併される
	千歳新田 177石	弘化 2年(1845)	西成郡長柄村 木下延太郎 岡島嘉平次	住居表示までの 新千歳町
	合計 2015石			

参考資料8 川口新田図(『新修大阪市史・歴史地図』より)



参考資料 9 市域の拡張

(『新修大阪市史、第七卷』より)

第一節 恐慌期の都市政策

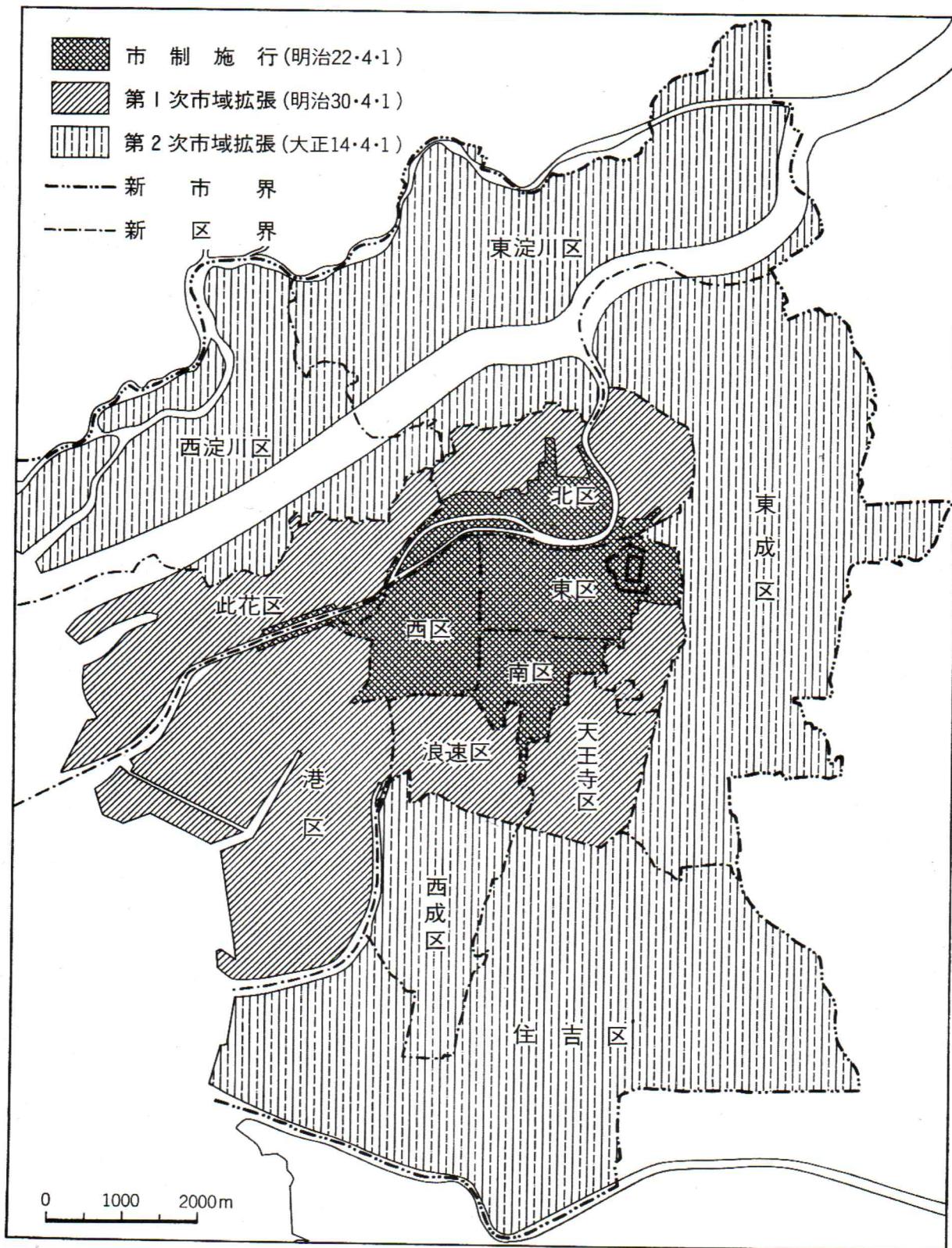
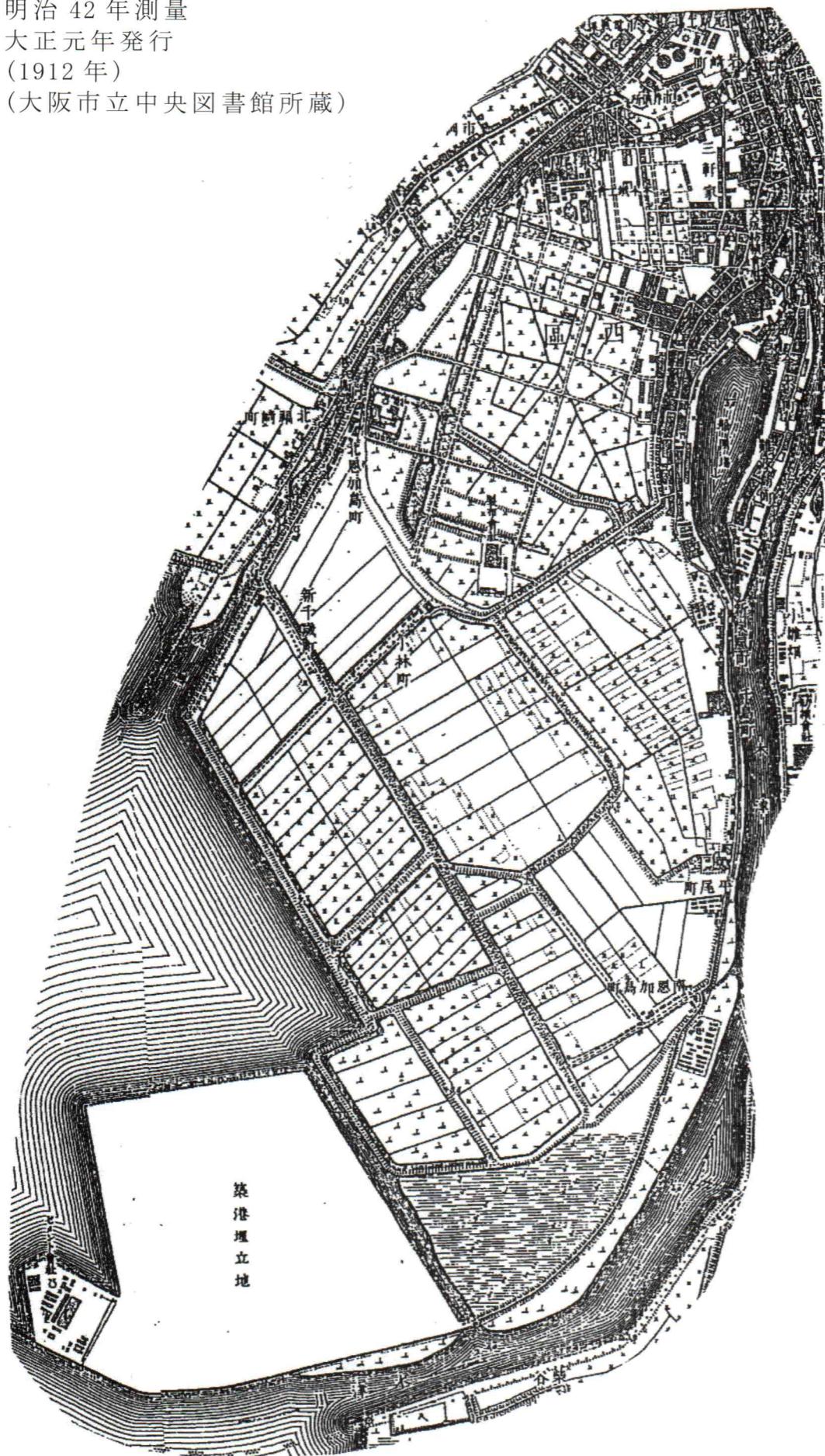


図 1 大阪市の第2次市域拡張(大正14年)

参考資料 10 『地形図』 大日本帝国陸地測量部発行

明治 42 年測量
大正元年発行
(1912 年)
(大阪市立中央図書館所蔵)



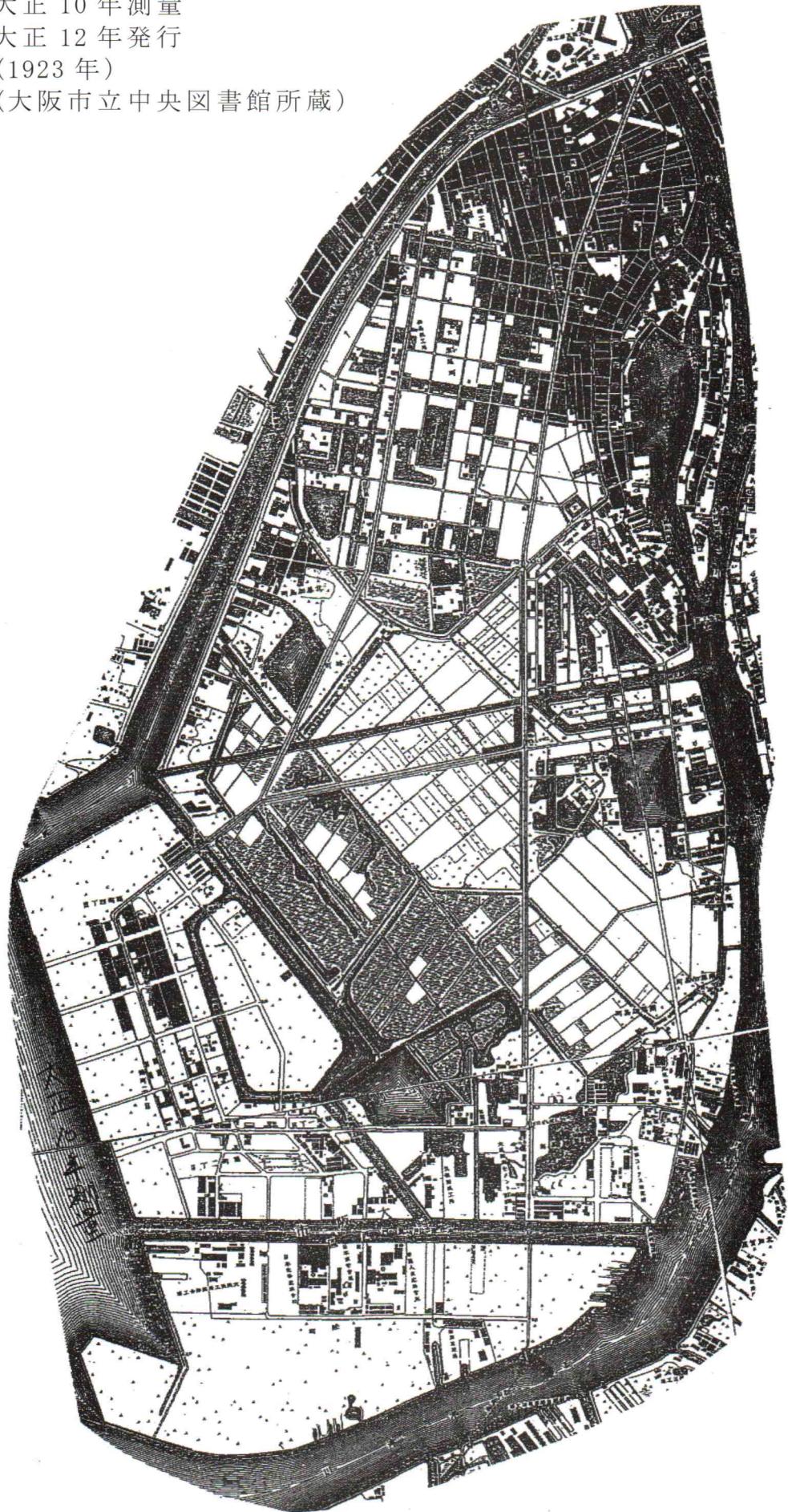
参考資料 11 『地形図』大日本帝国陸地測量部発行

大正 10 年測量

大正 12 年発行

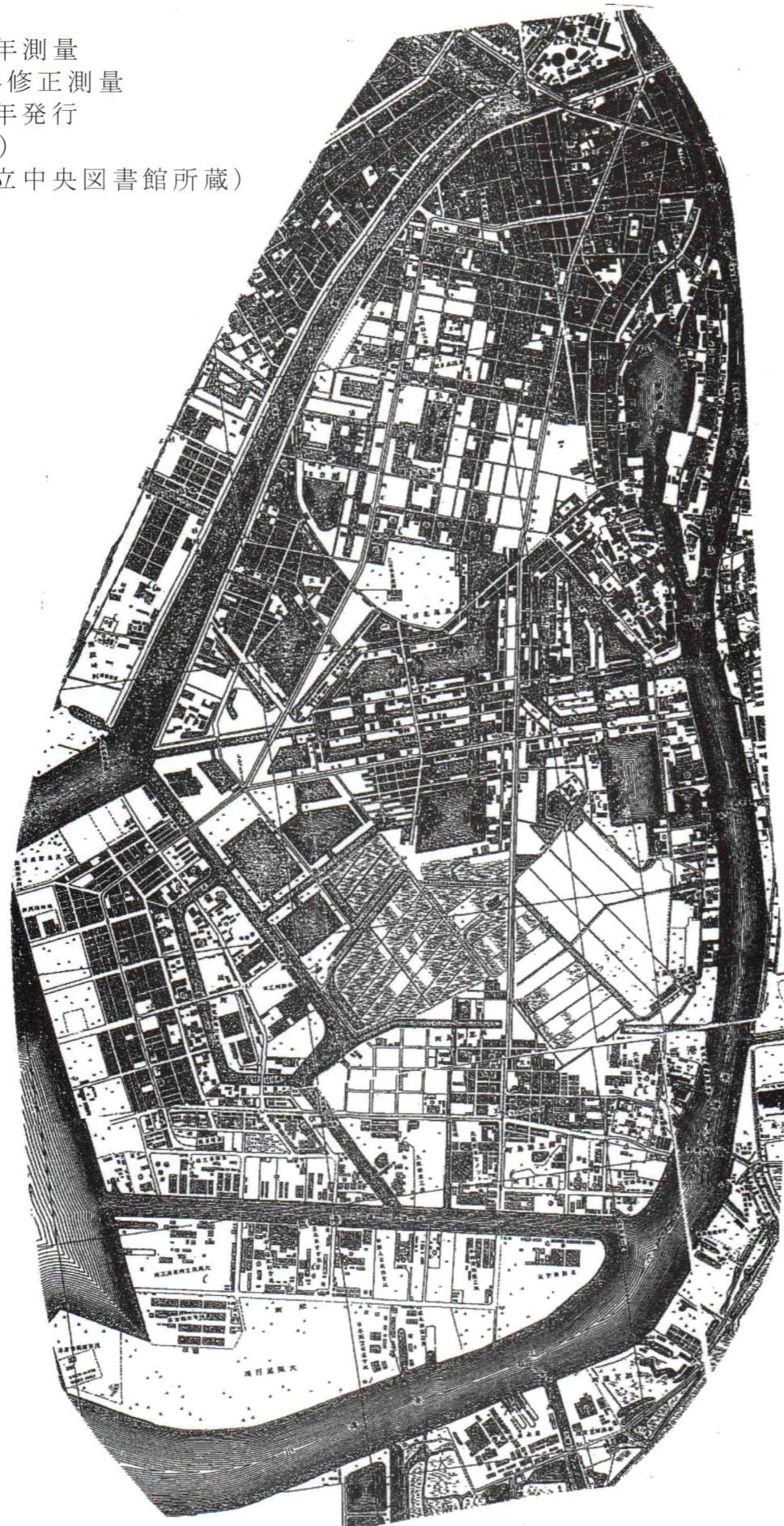
(1923 年)

(大阪市立中央図書館所蔵)



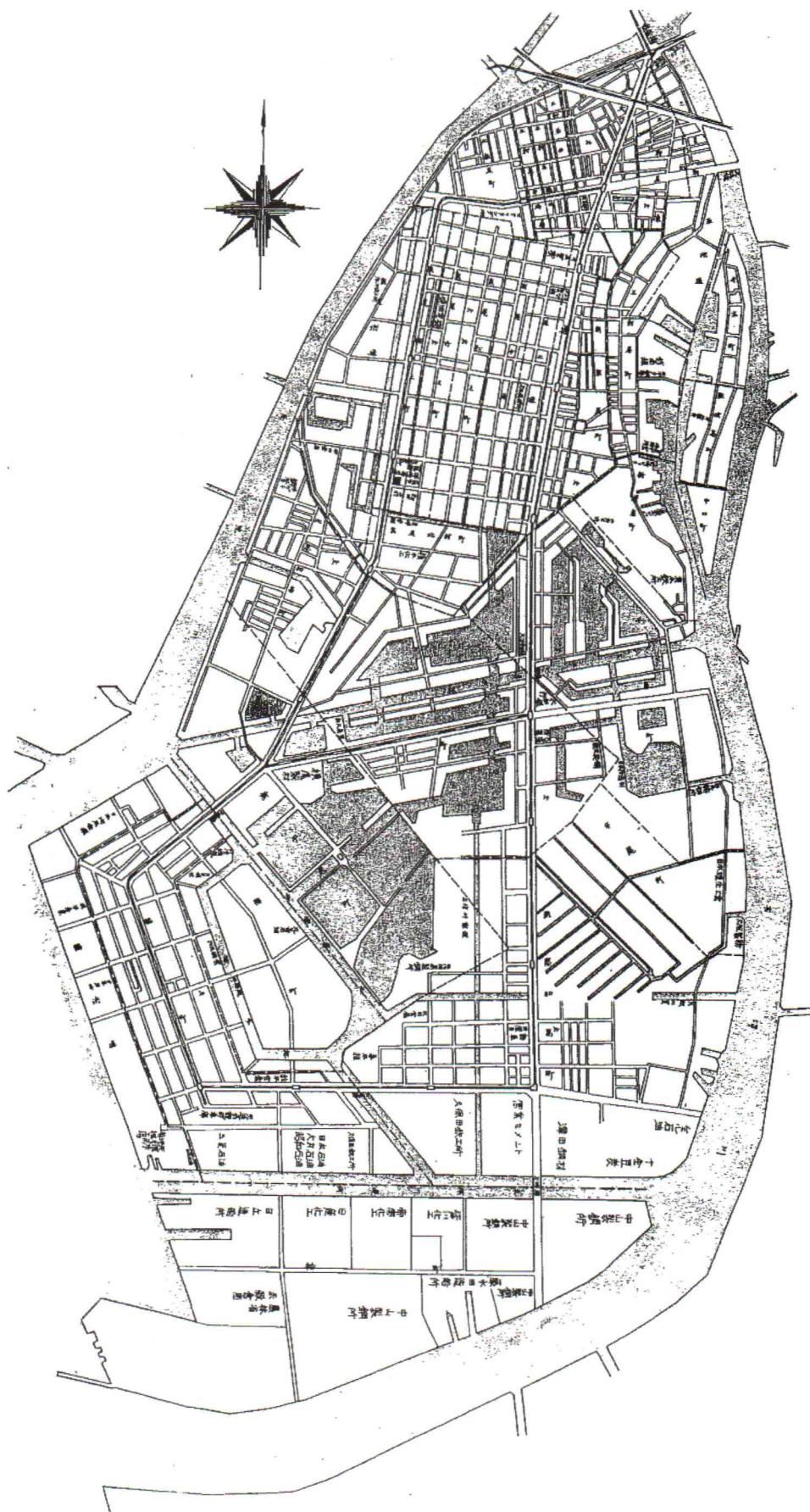
参考資料 12 『地形図』 大日本帝国陸地測量部発行

大正 10 年測量
昭和 4 年修正測量
昭和 10 年発行
(1935 年)
(大阪市立中央図書館所蔵)

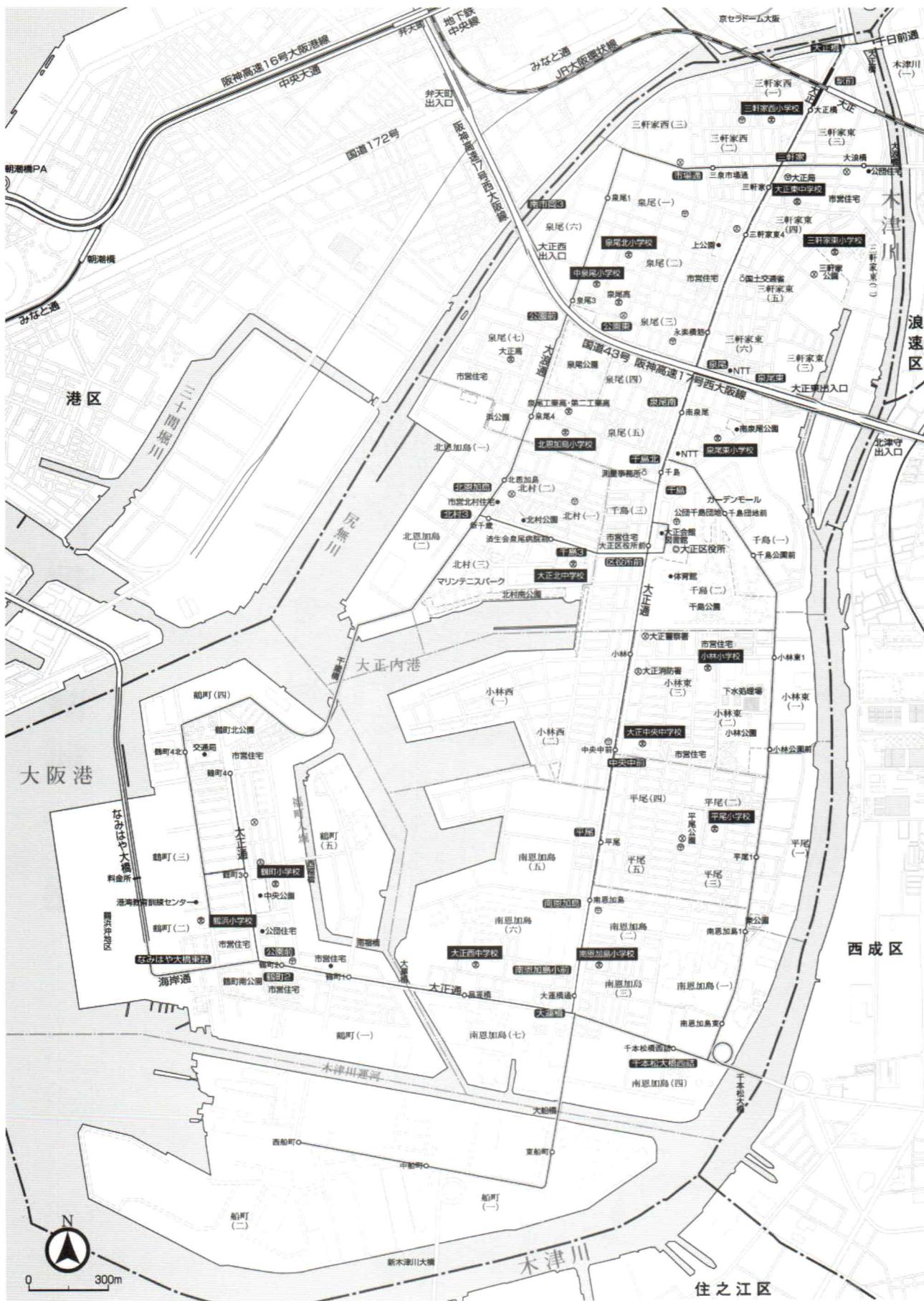


参考資料 13 『大阪市大正区全図』
昭和 28 年 (1953)

大阪市大正区全圖



参考資料 14 大正区白地図



参考文献

『大正区史』：大正区発行

『新修大阪市史』：大阪市発行

『懐かしい大正区の風景』：大正区役所・なにわの海の時空館発行

『わがまち大正』：大正区制施行 70 周年記念事業実行委員会発行

『クボタ 100 年』(株)クボタの 100 年史：(株)クボタ発行

『河内平野の生いたち』：大阪市立自然史博物館友の会発行

『大阪古地図集成』(大阪建設史夜話附図)：財団法人大阪都市協会発行

『地形図』：大日本帝国陸地測量部発行

あとがき

本冊子は、大正区まち講座の最終講義である「大正区を巡る」において使用した資料を中心に、大正区の歴史や現況データを加え、この一冊で大正区について詳しく「知る」ことができるよう編纂しました。

大正区には、他にも名所・旧跡がありますが、紙面の都合などもあり、今回記載のなかった場所等については、ご容赦いただきたいと思います。今後「まち案内人」となられる方が、さらに大正区のことを「知り」、多くの方への語り部役として活躍される際に、付け加えていただきたいと考えております。

最後となりましたが、本ガイドブックの作成にあたり、さまざまご指導とご助言、ご協力をいただいた関係各位に深く感謝申しあげ、お礼とさせていただきます。

平成19年3月

大正区役所

まち案内人－資料集－
大正ガイドブック

平成19年 3月 発行
編集・発行 大正区役所
印 刷 株式会社栄光堂印刷所

【非 売 品】